

労働旬報社 ◆ 定価=1,200円

企業社会
の扉を
ひらけ
沖電気争議

中山森夫 <なかやま・もりお>

1941年生まれ。名古屋大学経済学部卒。
沖電気工業(株)入社。1978年、指名解雇
される。沖電気争議団代表。

矢吹紀人 <やぶき・としひと>

1953年生まれ。慶応大学経済学部卒。
ルポライター。

企業社会
の扉を
ひらけ
沖電気争議
中山森夫・矢吹紀人

企業社会の扉をひらけ

中山森夫・矢吹紀人

労働旬報社

企業社会

ドキュメント

沖電気争議

中山森夫・矢吹紀人

の扉を
ひらけ

労働旬報社

企業社会
の扉を
ひらけ
沖電気争議

ISBN4-8451-0063-0 C3036 ¥1200E

企業社会

の扉をひらけ

ドキュメント

沖電気争議

中山森夫十矢吹紀人

企業社会の扉をひらけ

●ドキュメント 沖電気争議

中 山 森 夫
矢 吹 紀 人
著

労働旬報社

目次

第一部 人びととのつながりのなかで

——七一名の出会い

1 もどる日はなくても……………10

—— 影山政行の出会ったもの

黒いカバンに思いを残して(10)

会社の選択(13)

カラまわりの苛立ち(19)

対立候補の告白(23)

つなぎとめた人(23)

もう一度、争議団へ(26)

ぶつかっていける人の発見(29)

もう仕事はありません(32)

新しい道の始まり (三)

2 きびしきます日本経済と企業……………三五

——九年の歳月を経て

九年ぶりの赤字 (三五)

“企業社会”の《解》? (三六)

3 ミツバチのように地域をまわって……………四一

——相原幸雄の会ったもの

ゼロからの出発 (四四)

足で歩く日々 (四六)

自分を変えた地域オルグ (五〇)

いま、地域でなにが起きているのか (五四)

4 私はここでなにができるのか……………六三

——五味田靖子が出会ったもの

明日の見えないときに (六三)

埼玉の地に育てられ (六六)

楽しく人が集まれば (六九)

争議に勝つためには (七二)

世の中が変わるような気持になったよ (七四)

——「本庄ふれあいまつり」

第Ⅱ部 連帯こそ力の源泉

——労働組合運動としての争議

1 中央支援共闘会議の結成へ……………七八

それぞれの地域で (七九)

幅のひろい中央支援共闘会議づくり (八三)

“船は港を出た” (八六)

2 生活を支えた力……………九三

ヨコヤリ——押しよせる生活への不安 (九三)

重なりあう二つの時代 (九六)

理解をしめた人びと (一〇〇)

3	見えてきた争議の背景……………	一〇四
	背景団体への追及 (一〇四)	
	大きな対抗関係 (一〇八)	
4	結集し始めた電機のなかま……………	一一一
	——電機総行動へのねがい	
	共通する電機労働者の姿 (一一二)	
	「大企業・独占に刺さるたたかいを……」 (一二六)	
	企業のワクを越えて (一二〇)	
	沖を契機に電機総行動へ (一二三)	
5	和解——争議団の団結……………	一二七
	裁判所を舞台にした解決への攻防 (一二七)	
	団結はどうなるのか (一二九)	
	争議の全面解決へ——復帰 (一三三)	

第Ⅲ部 企業社会への“大波・小波”

1 大変化の“波”がおしよせるとき……………一四〇

「会社とともに生きる」？（一四〇）

ある配転命令（一四三）

“体質改善”の始まり（一四六）

“高度情報化社会”に向けて（一四九）

“情報化”のもたらしたもの（一五二）

“会社再建”のために（一五四）

“M—〇〇運動”のねらい（一五八）

「争議支援をする人は信頼できない」（一六〇）

2 全社員の思いを胸に……………一六四

都労委への提訴——半年間の議論（一六四）

立ち上がったとき（一六六）

ゆれる心と職場（一七一）

職場の人の「無言のカンパ」 (一七〇)

工場への立ち入り調査 (一七〇)

初めての「譲歩」 (一七六)

3

二つの「解」——企業と人間と……………一八二

企業社会のもろさ——幻のエクセレントカンパニー (一八二)

ある上司の嘆き (一八六)

先端技術者たちの苦悩 (一八九)

「競争信仰」の果てに (一九三)

わたしたちの「解」 (一九五)

エピソード 新しい変革へのチャレンジ……………二〇四

たたかってよかった (二〇四)

企業の矛盾のなかで (二一〇)

連帯の輪をひろげて (二二五)

▽本文イラスト 八島崇好
▽本文写真 藤田庄市

第I部

人びととのつながりのなかで

—七一名の出会い

1 もどる日はなくても

——影山政行の出会ったもの

* 黒いカバンに思いを残して

「影山君、もう君はその仕事しなくていいよ」

課長にいわれて仕事を取り上げられたのは、一九七八年一〇月の終わりだった。

やっぱりオレにきたのか、しかし……影山は途中までやりかけたTPSF(電話料金計算装置)の仕事を手放さなければならぬことに、筋のとおりなものを感じていた。

『ここまでオレの手でやってきた仕事だ。この仕事を、会社はいつたいどうするっていうんだ』

順調にいけば、この料金装置(課金装置)の設計で、影山は少なくとも年内いっぱい仕事を離れられないはずだった。

影山がその装置の設計にとりかかったのは、半年ほど前のことだった。七一年に一八歳で沖電気に入社して以来、それは影山に与えられた初めての本格的な設計の仕事だった。

影山の担当してきた市外交換機の部門では、沖電気は微力だった。新機種設計のほとんどを、最大のシェアーと技術力をもつ日本電気がなっていた。影山に七年間与えられてきた仕事は、公社もふくめた五社合同の図面検討会で完成している図面に「ケチ」をつけたり、沖電気社内でも通用する様式に描き直したりすることだけだった。責任もなく楽ではあったが、若い影山には面白味のない仕事だった。いままでだれもつくっていないものを、自分の頭で考え、自分の手でかたちにする。その部分の責任は、すべて自分一人が負うことになる。

影山は八年目にして初めて、仕事にやりがいを感じていた。何冊かの本を読み直したりした。入社してから経験のない、一カ月七五時間という長い残業を自分の意志でした。三カ月が、あっという間に過ぎた。苦しかったが、充実した期間だった。

夏に金沢の電話局まで出張して、実験にも成功した。努力は実を結んだ。影山の設計したTP SFは、これから日本中の電話局に設置されていくだろう。あと何か月かは、そのために図面を描き替える仕事が続いているはずだった。影山は、九月からその作業を着々とすすめていたのだ。

首切りの不穏なうわさが流れ始めたのは、一〇月に入ったころだった。

影山の心は落ち着かなかった。影山はかつて二年間組合の職場委員を勤めた。初めは、若手のなかから順番で就任させられるような偶然のものだったが、委員になったことが、影山の世界をひろげていた。きびしく管理され始めている、他の職場の実態を知った。組合で活発に活動して

いる人とふれあったり、スト中に周囲から激励されて感激する体験もした。

影山は、しだいに積極的になっていった。組合の職場集会を開いて「政党支持の自由」を決議した。上意下達で決められてきた組合要求を、職場で討論して修正案を出した。

職場集会も開かれなくなっていった社内では、影山の活動は会社にも組合にも目だちすぎたかもしれない。つづけて三度目に立候補したとき、とうとう影山は二票の差で、対立候補に敗れた。

後に、対立候補は会社の命令で、影山を落としにかかったとうわさされた。同僚のなかには、対立候補から顔をそむける空気が生まれていた。影山も怒りを感じ、落選しても落選しても、立候補するのをやめはしなかった。

『会社がまっ先にねらうとしたら……このオレの首かもしらんなあ……』

自分に与えられた仕事のあることにわずかな望みを持ちながらも、影山は不安な毎日を送っていた。影山の不安は的中した。次の日から仕事を取り上げられ、自分の机に向かって仕事関係の本を読むだけという日々が始まった。

T P S Fの仕事は、隣の同僚にまわされた。「なんでオレが、こんな苦勞しなけりゃなんねえんだ。ちょっとでも、オマエが手伝ってくれりゃ助かるんだけどな……」

同僚は、増やされた仕事に疲れていた。

手伝ってあげたいと思っても、影山は本を読む以外のことを禁止されていた。

『なんてことしやがるんだ。こんなことじゃ、せっかくやってきた仕事かメチャクチャだ。』

会社は、なにを考えてるんだ……』

この職場で働きつづけたい。仕事への思いを残しながら、一月末に影山はついに指名解雇された。職場を離れるとき、影山は黒いカバンをそっと先輩に手渡した。出張で仕事にいくとき、いつも道具を入れて携えたカバンだった。

「オレ、絶対にまたもどってきます。そんなときまた一緒に仕事できるように、このカバンあずかって下さい」

さまざまな思いを込めて、影山はカバンを先輩にあずけた。そして八年間すごした職場をあとにして、会社を去っていった。その日から争議の日々という、未知の世界へと歩み出していった。

* 会社の選択

七八年一〇月三十一日、沖電気は希望退職者が目標に達しなかったとして、二八六名にたいし指名解雇を通告した。一月八日、労組は指名解雇に反対するスト権投票の結果、反対多数でスト権が不成立になったことを発表した。投票は、会社の管理職とその意をうけた者たちによる激しい干渉と抑圧のもとでおこなわれた。彼らの、そのときの相言葉は「沖電気という船は一万五〇〇〇人では多すぎて、沈没してしまふ。すでに一〇〇〇人以上の人が、全体を救うために辞めたのだから、三〇〇の人たちも、それに従うべきだ」ということであった。

影山は、スト権が立たなかったことにながっくりしたが、それ以上に、あのきびしい状況のなかで、断固たたかうべしと決意した人が四分の一のこと、むしろ感激していた。それは、彼がこれからの長いたたかいのなかで、おりにふれて大きな支えとなるものであった。しかし、労組は、一月一七日に反合理化闘争の終結を宣言し、以後、争議団への援助はおこなわなくなった。このとき、スト権に反対の投票をした七二・二%の組合員の心には、どのような思いが宿っていたのだろう。解雇者の氏名は、すでに発表されている。自分たちに火の粉がふりかからないのなら、早く会社が平常にもどってほしいと思ったのか。多少の犠牲は出ても、企業の存続と多数の幸福のためには合理化も仕方ないと考えたか。会社のいう「沖の明るい未来のビジョン」を実現するためには、不要人員は排除されるべきだと信じていたのだろうか。

一部の社員が職場を去っていくという嵐のような合理化は、幸いにして希望退職・指名解雇にさらされずに職場に残った一万二〇〇〇名の労働者にも、少なからぬショックを与えたことだろう。彼らがこのとき、どんな思いをいだいていたかは分からない。ただ、大多数の従業員が、ホッと安堵の胸をなでおろしながら、こう感じていたのはたしかなのではないだろうか。

「これで会社も自分も生き残った。よし、明日から自分は会社のために今まで以上に働くぞ」
沖電気労組の機関紙「沖労新聞」はのちに次のように記している。

「……少数より多数の意見にもとづくのは民主主義のイロハだよ。自分の個人的な思惑だけ、どうこうなるもんじゃない。……ああした闘いのままでは結局、元も子もなくなるんだ

から、あの結果で止むを得なかったでしょうね。……みんなが力をあわせて、再建にとりくむことだと思ふ」

だがこの選択は、ほんとうに正しかったのだろうか。解雇の俎上にのぼった一三五〇名のうち、五〇〇名は女性労働者だった。当時の従業員男女構成比六対一に比べて、圧倒的に女性の比率が高い。

のちに、常務の太田登はこう語っている。

「……今までは女性がずらっと並んで顕微鏡をのぞきながらやっていたのが、半自動から全自動ということになり人手が要らなくなってきました。……どうしても対応し切れなくなつて、今度の合理化問題が起こってしまったわけです」

この事実は、なにを意味しているのだろうか。三宅正男が、電電公社総務理事から沖電氣に天下りしてきたのは七七年四月のことだった。六月に副社長に、翌年四月には社長に就任している。社内報「沖ニュース」七七年一月号には、「わが社の進むべき道と思う」という三宅のインタビュー記事が掲載された。まだ副社長というポストではありながら、「わが国の通信事業のリーダーとして活躍して」きた立場から語る三宅の言葉は、沖電氣という会社がこのとき、なにを考えていたのかをあらわしている。

「一言でいうと、沖電氣自身としての現在は、ある意味での脱電電をやるべき時期なんだと思います。過去の例からいえば、電電公社からの注文が沖電氣としては非常に大きな飯の種で

あった。そういう時代はもう過去のものになりつつある。……体質転換を——遠慮なくいわしてもらえば同業他社に比べると相当おくれちゃっている——これから数年の間にしっかりやっておかなければいけない。そういう時期なんです」

女性労働者たちの多くは、太田常務のいうようにラインに就き顕微鏡をのぞいて手作業をおこなってきた。高度成長時代に「金の卵」ともてはやされた彼女たちは、中卒・高卒で地方から上京し、右も左も分からないまま大量生産をこなって沖電気を支えてきた。

その労働者たちを、会社は「すぎ去った時代」の遺物として切り捨てた。企業がサバイバル競争に勝つためにおこなう「体質転換」。その本質がどういふものであるのか。だれにたいして、どういふかたちでおこなわ

私のひとこと

* 「日本に民主主義はないのか」とショックで

私が入会したのは、一九七八年。

こんなに人間的な人々たちを解雇するなんて日本には、民主主義はなかったのかという大きなショックでした。

私には二人の子供がいますが、子供達に、もっと平和で自由で人間として尊重される世の中を残してやりたいと思っと思っていますが、毎日毎日忙しくて、ともするとグチが出たり、大声で叫びたいような時も正直ありません。

そんなとき、沖電気の仲間を思いだし、当然沖電気の皆さんも苦しい、自己との闘いがあるに違いない。私の苦勞なんて苦勞のなかに入らないとがんばる勇氣と励ましになっています。

人間は、試練の中で成長するのだなあと、沖電気の皆さんに会うたびに感じます。(岡山・脇本延子)

〔はたらく〕 八〇年五月一日付



れるものかを、沖電気の企業戦略は明確に語っていた。

たしかに、沖電気は六年後の八五年三月期に一六五億円と史上最高の経常利益を記録した。経営者たちは、「一九九〇年シナリオ」でエクセレントカンパニーへの夢を描いてみせた。しかし一連の「体質転換」政策は、技術や経済環境が変わっていけば企業がいつでも根幹から揺さぶられるということを教えていたのではないのか。

指名解雇の通告された七八年一〇月三十一日、日本経済はかつてない円高のピークを記録した。そしていま、円高はさらに激しい勢いで日本中を席卷している。八年たった八六年九月、沖電気はふたたび大規模な組織改革をおこなうことになった。計画していた宮城超L S I工場の建設着工は、延期せざるをえなく

なった。この事実をどう考えればいいのか。企業に忠誠をつくして、「企業社会」に埋没してれば労働者は明日を保証されるのか、会社にしがみついているれば、幸福は運ばれてくるのか。

指名解雇を突きつけられて、七一名の争議は始まった。しばらくたったころ、一人の争議団員がオルグからもどってきてこうつぶやいた。

「驚いたよ、山手線って、昼間でもたくさんお客が乗ってんだな」

地方の高校を卒業してすぐに上京、寮に暮らして、朝から晩まで沖電気という会社のなかで生活してきた若い争議団員。彼にとっては首を切られて初めて知ることのできた世間の風景だった。争議団員にしたところで、やはり大企業社会のなかしかならない普通の人間にすぎなかったのだ。

たしかに彼らは、普通の人間だった。平均年齢二八歳。まだ若くて人との接し方も満足に知らない、普通の企業人間たちだった。

だが彼らは、解雇されて普通でない生活を知った。いや、ほんとうは、彼らがそこで知ったものこそ、喜びも苦しみも悲しみも隠すことのない、あたりまえの生き方だった。心をかよい合わせ支え合う、あたりまえの人間たちだった。八年四カ月の争議をとおして彼らが知ったのは、企業社会からは得られないものばかりだったのだ。

長くつづいたきびしい争議を、七一人がなぜ一人も離脱することなく乗り切れたのか。争議が解決して、三五名は職場にもどったが、三五名は新たな道を歩き始めることになった。もどらなかった者たちには、争議はどういう意味があったのか。そして、ふたたび沖電気という企業社会にもどった三五名と、会社に残った一万四〇〇〇名の社員にとっては――。

* カラまわりの苛立ち

争議が始まって最初のうちはマスコミなどで報道されたこともあって、カンバも支援もよく集まった。ときがたつにつれて、影山にはオルグの毎日が苦痛になってきた。

もともと、人に向かって話をするのは得意ではなかった。一人で地域をまわっていると、気が重くなって公園のベンチに寝ころんでることもあった。

疲れて事務所に戻ると、みんな酒を飲んでしゃべっている。影山には、自分一人が苦勞を背負わされているように思えた。慣れない争議の生活に、しだいに気持がカラまわりし始めていた。焦りを一番つよめたのは、解決のきざしが見えずに長びく争議そのものだった。当初は、長くても三年で解決といわれた。そのつもりで辛抱していたが、四年がすぎてもいっこうに終わる見通しは立たなかった。

長い争議の苦しきで、最初の怒りも薄れていた。影山には、すべてがイヤになってきた。もう

争議団に別れを告げて、福島の実家へ帰ろう。いつか影山の心に宿り始めた思いは、抑えられないほど大きくなっていった。

八三年五月、争議が始まって四年半がたったとき、影山はついに争議団を飛び出した。もう二度と東京にはもどらないつもりで、実家に帰った。争議をやめたと聞いた両親は、影山を歓迎してくれた。

三カ月ほどブラブラしたあと、影山は新聞で季節工の仕事に応募した。茨城県勝田市の日立の工場へ、六カ月期限で働きに出た。

仕事は、ICチップをガラス棒の先につける作業だった。忘れていた仕事の感覚がもどってきた。単純だが、自分にはこんな仕事に向いていると思った。

一緒に働いているのは、ほとんどが出稼ぎや、地元採用のアルバイトの人たちだった。電気知識のある人はいなくて、なにかという頼りにされるのもうれしかった。暮れには、みんなで忘年会に出かけて飲みさわいだ。影山は入社したころの、和気あいあいとした沖電気の職場を思い出していた。

影山は、実家に帰ってからでも争議団に月一回は手紙を出しつづけていた。自分はいま、こんなことをしています。こんなことを考えています。詳細な近況を、書き送っていた。

勝田市の工場にきてからは、争議団からの返事も届かなくなった。それでも影山は、自分のこ

とを知らせる手紙を、仲間に書きつづけていた。

一人になると、淋しかった。みんなに忘れられるのが、恐ろしかった。影山は、すぐるよう
に手紙を書いた。

あれほどイヤだと思った争議団なのに、もう二度ともどるまいと、決心したはずなのに。

一人になって分かってきた。いままで自分は他人のことは見ていなかった。自分だけが苦
労していると思った。けれどこんな争議団に引きつけられるのは、みんな同じ境遇で同じように苦
労してきたからだ。

勝田市の宿のせんべい布団に横になって、影山は思いをめぐらせた。もしこのままもどらな
かったらどうだろう。きっと自分の心に、一生消えることのない深い悔が残るだろう。

仲間を裏切って、仲間から離れて生きていくことはできない。そう気がついたとき、影山はか
つて自分に、仲間を裏切る苦しさを告白した人を思い出していた。影山の職場委員当選を阻むた
めに動いた、対立候補のことを。

* 対立候補の告白

七五年の五月ごろだった。影山は偶然、同僚の男と帰りが一緒になった。前年の職場委員選挙
で、対立して当選した男だった。

埼玉の寮の近くにくると、男は一杯やっていこうと誘った。かつての飲み仲間だったこともあって、影山は軽い気持で従った。

「影山……オレはいつかオマエに自分の口からいおうと思ってたんだ」
しばらく雑談をしていると、男は声を落として話し出した。

「オレは、……ホントは職場委員なんかやりたくなかった……。オマエの相手に立候補したときも、イヤでイヤで仕方なかった。でもしようがなかったんだ……許してくれ。課長に呼び出されて立候補しろといわれたとき、オレには断ることができなかったんだ……」

男は顔を伏せて、さらに苦しそうに言葉を吐きつづけた。

「けれど、……やっぱりオレは間違ってたよ。立候補して、たまたま勝っちゃまったおかげでオレは職場の仲間の信用を失くしちゃったよ。冷や飯食わされるのが怖くって、オレは大事なもんを売っちゃまったんだ……」

男と影山が選挙で争ってから、すでに一年近くがたとうとしていた。一年間、男はいつか苦しい思いを打ちあげようと思っていたのだろう。そしてチャンスが見つけれられずに、思い悩んでいたのだろう。話すだけ話すと、男はホッとしたりように杯を重ねていった。

勝田市の宿で寝るときに、影山は男のさびしそうな表情を思い浮かべた。男の父親も、かつて大企業で同じような立場になり、さからって一生日陰の部署で暮らしたと聞いた。

いまの影山には、男の苦しさがよく分かった。心ならずも対立候補にされ、同僚から白い目で

見られ、一年間も真実を語りたくて悩んでいた男を、心から許してあげたいと思った。

『あんたはホントは……いいヤツなんだよな』

影山は心のなかでつぶやいて、頭から布団をかぶった。涙があとからあとから、影山の目尻から流れ出てきた。

仲間を失うつらさ、いまの影山には、対立候補の後悔がよく分かった。分かっているながらその道を選んだ男の弱さを、許せると思った。

『人間は誰だって、弱いところがあるんだ。誰だって一人ぼっちではいられない。仲間を失っては、生きていけないんだ……』

影山の頭から、いつまでも対立候補の声が消え去らなかった。

* つなぎとめた人

争議の苦しさから実家に帰ろうと思いついたとき、影山は一人の人間に相談に行った。

ある労働組合の委員長をしていたその人は、かつて影山がアルバイトをしていたときによくめんどうを見てくれた。その組合にも、もう半年も顔を出していなかった。争議団以外で一番世話になった委員長に、影山は別れの挨拶をするつもりで会いに行った。

「影山、逃げて帰るのは、オマエ自身にとっても良くないんじゃないのか、いろいろ面白くな

い気持があるのは分かる。もしどうしてもおさまらないんなら、しばらく争議団から離れているのもいいだろう。けどな、一度帰っちゃったら……なかなか出て来れるもんじゃないぞ、東京を離れないで、がんばってみたらどうだ」

委員長は論すように、穏やかな口調でいった。

委員長のいうことはよく分かった。もしかしたら、自分はもうもどれないかもしれない。影山は自分でも思った。だがまだこのときは、実家に帰りたいという思いがつよかった。

「影山、かならずもどってこいよ。もどってまた、一緒にやろうよなあ」

別れぎわに、委員長は影山の手を握りしめていった。東京にもどる気持のないまま、影山はあ

「争議団」とは

全国で、常時三〇〇〜四〇〇の争議が闘われている。解雇、倒産、差別などの攻撃を受けた当事者の組織である。当事者の属する労働組合が支え、自らの課題として、闘う場合には争議組合による争議ということになる。現在、最も多くの争議を抱えているのは国鉄労働組合である。労働組合運動の右傾化が進むに従って、当該の労働組合が闘いを放棄するケースが増えている。この沖電気争議をはじめ、池貝鉄工の指名解雇、日産厚木部品の組合除名による解雇との闘いなどは争議団による闘いである。

東京では一九六二年五月に争議団・争議組合が集まって東京地方争議団共闘会議を結成している。一九八七年時点で加盟団体七〇、この二五年間で勝利した争議は五〇〇を越す。

争議は産業再編、合理化の過程で労働者全体に対する攻撃の環として発生する。とりわけ争議団としての闘いは労働組合運動強化をめぐる労資の攻防という側面を持つ。

いまいにうなずいていた。

オレはなんてバカだったんだろう。一人になって、影山は思っていた。自分など、いつもブツブツ文句ばかりいっている若造にすぎなかった。争議をしているからといって、ろくに真面目に仕事もしない自分の身になって、委員長は本気で心配してくれた。知らない間に、自分はほんとうに大切な人たちと会っていたんだ。

それはおそらく、争議をすることがなければ一生出会うことのなかった人びとだったろう。その人たちと離れては、生きていけない。一年間の一人暮らしのなかで、影山は自分に必要なのになにかがはっきり分かってきた。

『帰ろう。東京にもどって、もう一度やり直そう。争議団のみんなが、オレを受け入れてくれるかどうかは分からない。けれどもオレには、もう仲間と離れて生きるなんて考えられない。帰って今度こそ、ほんとうに腰をすえて生きてやるんだ』

争議団を離れて一年三カ月後、影山は争議団に手紙を出した。

「また東京に、帰りたいと思います」

八四年の夏。東京地裁では和解交渉が始まっているときだった。

* もう一度、争議団へ

九月初め、影山は争議団事務所へと向かって歩いていった。

もう一度争議団にもどってやり直す。話を聞いたとき、両親は最後まで反対した。

「オレはやっぱり、中途半端で逃げ出してきたんだ。どうなるにしろ最後までみんなと一緒にやらなかったら……オレは一生うしろめたさを引きずって生きてかにならん。なんとかいかせてくれ」

どうしても納得しない両親をふりきるように、影山は家を飛び出してきた。反対しつづけていた母が、出がけに新しく打ち直した布団を持たせてくれた。

九月三日には、撤回させる会の東京支部大会が開かれる。影山はその場で、みんなに復帰の挨拶をすると決めていた。

残暑の日照りがきびしかった。

『この坂は、こんなにきつかったかなあ……。やっぱりこのまま帰ってしまおうか』

事務所近くの三田聖坂を登りながら、影山はしだいに足が鉛になっていくような気の重さを感じていた。

一年四カ月も離れていた。しかも最初は、もう争議団などやめるといって、勝手に飛び出して

いった人間だった。自分が故郷に帰ってやりたいことをしている間も、みんなは毎日オルグやアルバイトに汗を流していたんだ。こんな勝手な人間が、もう一度やり直したいといってもどっても、みんなは受け入れてくれるだろうか。

なにをいわれるか、どんな仕打ちを受けるか。影山は、ビクビクしながら事務所のドアを開いた。

五〇人ほどの人間が集まっていた。影山はうつ向いたまま、みんなの前に立った。全員視線が自分に集まっている。怖いような感じがした。

「みなさん、どうも……ご迷惑をかけました。オレ、またよろしく、お願いします……」

ボソボソとした声で、影山は謝った。下を

私のひとこと

* 「争議団？」

「争議団」この言葉を初めて聞いたとき、私の頭にはいかめしく、また古くさいというイメージが横切った。しかし実際に争議団の人たちと会い、会社のこと、生き方のこと、争議のこと——話をすればするほど、私のイメージは、まったく別のイメージにとつて変わった。

沖電気争議団をつくり聞っているのは、ごく普通の青年たちであり、ごく普通の生活をしている人たちだった。私は、そのことに、大変希望を感じました。

反動攻勢を恐れることなく「私たちの国」をつくるために、何をするのかを考え、人間の尊厳を破壊するものに対して大きな怒りを持ち、現状をリアルにみると同時に、イメージ豊かに未来を見つめて闘う沖電気争議団は、私に大きな展望を与えてくれました。がんばれ！（埼玉・学生）

（八一年七月一日付）

向いたまま、深々と頭を下げた。

そのとき、一斉に拍手が起こった。影山は、ハッとした。怒鳴られるか。追い出されるか。たとえなにをいわれようと、みんなにすがりついて謝ろうと思っていた。

しかし影山を迎えてくれたのは、叱責の言葉でも怒鳴り声でもなく、みんなの温かい拍手だった。

『ああオレは、こんなにやさしい人たちを裏切って、一人で生きていけると考えていたんだ……』

しだいに軽くなっていく心のなかで、影山はあらためて、仲間のなかへもどってきた喜びを実感していた。

影山にまた、オルグとアルバイトの日々がもどってきた。かつてと同じ、きびしく苦しい日々だった。けれど影山はもう、その苦しさから逃げることをだけを考えていた、以前の影山ではなかった。

仲間には迷惑をかけたけれど、一年四カ月を一人になっていろいろ考えた時間は、フラフラしていた自分のような人間には、大きなプラスだったと思っている。

なによりも、自分の出会う人間が、自分にとってどれだけ大切なのかを思い知らされた。争議団の仲間だけではない。たかだかアルバイトで世話になっただけの労組の委員長が、親身になって心配してくれた。もしあの人に会うことがなければ、自分はいのまま争議団を離れたら

う。対立候補に立った男のように、後悔を背負って生きなければならなかったかもしれない。そう思うと、いままではただ任務だと思ってイヤイヤやっていたオルグやアルバイトの仕事が、他では体験することのできないぜいたくな楽しみのように思えてきた。影山は、自分からすすんで人のなかへ入っていけるようになっていった。

* ぶつかっけていける人の発見

争議団にもどってから、影山は全国行商の事務と梱包作業に取り組んだ。夏と冬、争議団はオルグと行商を兼ねて、手分けして全国をまわった。影山自身、中国、四国地方を歩くなかで、いままでも知らなかったような人たちに出会った。

「岡山のおバチャン」と呼ばれて、争議団員みんなから頼りにされている木下さん。行商で近くへいったときには、だれでも泊めてもらった。御主人や娘さんともども、家族全員で争議団員を温かく迎えてくれた。

影山は、八四年から毎年「おバチャン」の家を訪ねるのが待ち遠しくなった。オルグや行商に出るのが、楽しみにさえなってきた。

四国には、かつて労働運動のリーダーとして活躍した人が何人かいた。第一線を引退してもなお、独自の主張や理論を持って後継者を育てようとしていた。

高知の黒瀬さんは、「黄楊塾」という私塾を開いて、働く者の学ぶ場をつくってきた。

オルグらしくない。争議団は、もっとしっかり日本全体を見て活動しなければいけない。訪れるたびに、影山もハッパをかけられた。

「オマエらは、オルグにきたんかセールスにきたんか。オルグならもっとしっかり話をせい。その長い髪はなんぜよ。芸術家かや！」

以前だったら、ふてくされたり、イヤになって避けていたかもしれない。そんな全国の人びとに、逃げ腰にならずにぶつかっていけるようになった。

争議団にもどって最初の一カ月は、総評全国一般法律会計労組の関谷委員長のもとで働いた。翌年の三月からの一カ月半は「東京大

私のひとこと

* お元気ですか！

「こぶし」はたらく」そして写真をありがとうございました。今日、母から職場に電話があり「とってもいいことがあるから、まっすぐ帰って来なさい」とのこと。ポンコツサニーをブンブンうならせて帰ってみると、松本さんからのお便りでした。

私がみなさんのことを尊敬するのは、みなさんが自分の仕事に自信をもっていらっしゃるからです。自分はまだめな労働者だったと胸をはって言える人たちだからです。わたしは、学生気分がまだぬけていない“甘い”と言われる落ちこぼれ労働者だからです。だから尊敬するのです。

わたし早く落ちこぼれでなくなろうと思っていきます。それではお身体を大切に、みんなみんながんばって下さい。わたしもがんばります。また、いつかお会いできればいいなと思います。さ・よ・な・ら

(岡山・木下麻里)

(七九年九月二五日付)

空襲四〇周年」の仕事に、三上満事務局長ら都教組の人びととともに携わった。八六年一〇月からは、半年間にわたって、国鉄を守る国民会議で仕事をした。

どこにでも人間がいた。人間はすごいと思わされた。一緒に仕事をする事で、自分も一人の人間として、なにかの役に立てるんだと実感できた。

『もし首を切られなかったら、オレは一生かかってもこんな人たちと仕事をする事はなかっただろう。こんないろんな体験をすることはなかったろう。迷ったときもあった。でもいろいろ体験して、オレは自分のなかにしっかりと残ったものがあるといえる。オレはもう、どんなに苦しいときでも、絶対に投げ出したりはしない。オレを支えてくれる人たちがもうそんなこと、許してくれないから……』

* もう仕事はありません

もどってからしばらくして、影山はかつて職場で一緒に働いていた人たちに、連絡をとろうと考えた。

自分が職場を離れてから、すでに六年がすぎている。職場を出てからも、しばらくの間は会って酒を飲んだりする仲間たちだった。あの七八年の暮れには、影山だけに解雇通知のきたのがかわいそうだといって、忘年会を兼ねた送別会を開いてくれたりした。

一年四カ月ぶりに東京にもどってきたうれしさもあって、影山はあの仲間たちにもう一度会いたいと思った。その後みんなはどうしているのか。消息をたずねる手紙を、影山は先輩に送った。職場を去るときに、黒いカバンをあずけた先輩だった。

「影山君、君からあずけた黒いカバンは、いまでも大切にとってありますよ」

かなりたってからきた先輩の返事には、影山を懐かしむ思いがあふれていた。影山がもう一度職場にもどって、昔みたいに一緒に働きたいという心情があふれていた。しかし影山は、先輩も懐かしむ昔にもどれないことを手紙の文面から知らされた。

「君はICやLSIやVLSIのことを知っていますか。いまではこのクロスバーの職場の間も、誰だってみんなそういうのを使いこなすようになってるんだよ。いや、そうでなければやっていけないんだ。技術の進歩というか、会社がどんどん要求してくるものについていくのはほんとうにたいへんだ。それなのに、六年もブランクがあっても、君は職場にもどるつもりなのか。もどれると考えているのですか。もう君がもどってきてても、黒いカバンのなかの道具を使うところはないんだよ。君にできる仕事は、きつとなに一つないんだよ……」

職場が変わったと、聞いてはいた。争議団で調査をして、残業が多くなっていることも分かっていた。けれどいつだって、自分はどんな状況でも元の職場にもどりたいと思っていた。

その職場に、もう自分のできる仕事はない……。

先輩は、影山が去ってからの職場が、どれほど激しく変化したかを詳細に書いていた。ついて

いくのにどれだけ苦勞したか、心の内を吐き出していた。

あの年、送別会を開いてくれた先輩たちを、影山はいまも変わらない仲間と思っていた。しかし影山のもどるべき職場は、いつの間にか変わってしまったのだった。

「僕はずっとこの職場でやってきて、いろいろとイヤなめにも会ったよ。君がいたころの温かい同僚同士のふれあいなんて、どこへいってしまったのか。僕はもう、同じ職場の人間とは、あまり話をしないようにしているんだ。どこでどんな目が光っているかしのれないからね。うかつなことはいえない。まわりの人間は、信用できない人が多いよ……」

影山が入社したころの、楽しく仕事ができる職場はもうない。これが現実なのか、影山にはショックだった。解雇通知を受けて、会社の外で六年間苦勞してきた。けれど職場に残った同僚たちは、同じ歳月にもっとつらい思いをしていたのだ。

手紙に書かれていた同僚たちの生き方は、影山が悩みながら否定した生き方だった。人間と人間とを競争にかりたてバラバラにして切り離す、人間否定の生き方でしかなかった。

* 新しい道の始まり

八七年三月、争議団と沖電気との間に和解が成立した。影山は職場にもどらずに、新しい道を歩み始める三五名の一員となった。

職場復帰は半分と聞かされたときは、やはり複雑な思いだった。自分たちはいままで、なんのためにがんばってきたのかとも思った。けれどその後の仲間との話し合いや職場の様子を知ることで、影山自身の考え方も変わってきた。

あれは八五年の夏のことだった。夏の行商で北海道にいった影山は、全電通の組合を訪問した。労働者と雑談をしているうちに、たまたま影山は交換機の設計をしていたという話になった。

「ウチの局ではね、いま、TPSFを使ってるよ」

相手の人が口にした機械は、まぎれもなく、解雇通知を受ける前に、影山が初めての仕事に胸を躍らせながら設計した課金装置に違いなかった。

あのととき自分の手で設計した機械が、こんな遠い北海道で、いまでも使われている。影山は別れた我が子にめぐり会ったようなられさで、自分が設計したことを話した。

組合の人は感心した。せっかくここまでできたのだから、機械を見ていけとしきりに勧めた。さんざん迷った末に、時間がないうらといて、影山はTPSFを見るのを遠慮してしまった。

ほんとうは、影山はそのとき初めて気がついたのだった。自分が設計したはずのTPSFを、操作する方法さえ忘れてしまっていることに。

職場を離れていた歳月は、残った同僚にも、争議をたたかってきた影山にも、やはり重い痕跡を残していた。

もう職場にもどっても、自分の仕事はない――。

けれどもその事實は、けっしていまの影山を打ちのめしはない。会社にもどっていく三五人が、きつとまた、人間の働ける職場をとりもどすためにがんばってくれるだろう。そのための役割は、自分も十分果たしてきたと思う。

争議団で生きてきた八年四カ月は、影山を大きく変えていた。いま、影山は、自分たちを支えてくれた全国の人たちに、今度は自分のできるだけの力を出して、恩返しをしたいと考えている。新しい道は始まる。

争議のなかでつかんだものは、これからの人生に、ものすごく役立ってくれるだろうと影山は思っている。

2 きびしさますます日本経済と企業

——九年の歳月を経て

* 九年ぶりの赤字

沖電気の橋本社長は八七年四月、新年度の始まりにあたって『昭和六十二年度社長方針』を発

表した。そのなかの経営状況分析は、悲愴なまでの危機感にあふれたものだった。

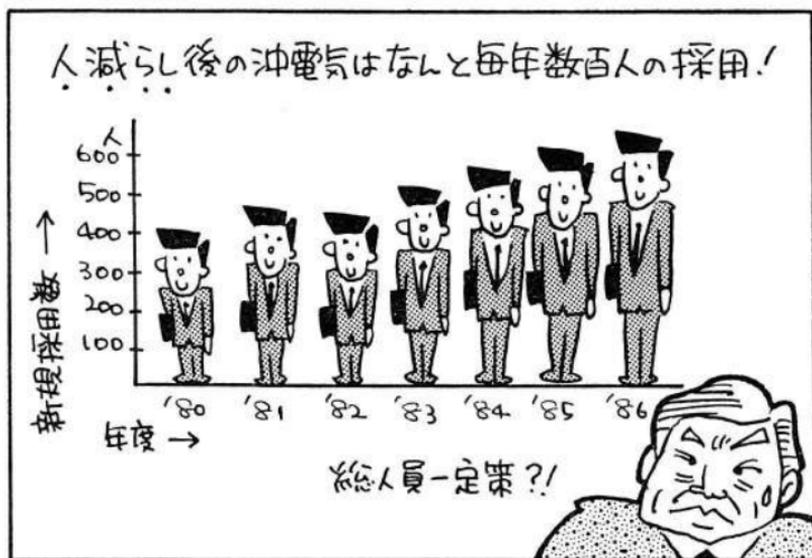
「当社を巡る昨今の経営環境は、かつて経験したことのないほどの非常に厳しいものであります。円高・貿易摩擦・価格競争の激化など、一向に好転の兆しが見えず、早期での経営環境の好転は望めないといっても過言ではないのです……」

ほんの二年前、昭和六〇（一九八五）年三ヶ月決算の時点では、沖電気は一六五億円と史上最高の経常利益を記録していた。円安に半導体需要の沸騰が重なり、輸出も順調で好況の「神風が吹いている」といわれた。経営者たちは労務管理の手綱を引き締めながらも、会社の将来にバラ色の夢を描いていた。

しかし現実の推移は、夢にひたっている時間を長く与えてはくれなかった。八五年後半に始まった円高以降、業績は急速に低落しました。翌年の経常利益は一三億円に減った。「戦争」という言葉さえ用いられるまでになった日米半導体摩擦が、業績低下に追いつちをかけた。八七年三ヶ月の決算では、沖電気はついに九年ぶりの経常赤字へと転落することになった。

橋本社長は新年度方針のなかで「かつてない厳しい事態」と社員の危機感をあおりたてていたところが、一方では次のような言葉を口にして、赤字が出たことにプラスの評価を下す姿勢を見せてもいた。

「……一時的に赤字になるのはしかたがない。むしろ社員の間に危機感が定着して、社内体制が整備できた成果は大きい」（『日本経済新聞』八七年五月二〇日付）



現在、沖電気には一万四〇〇〇人の従業員が働いている。会社を支える労働者たちにとって、この経営者の言葉はなにを意味しているのか。

経済通によると、経常赤字を出した沖電気も、八六年度下期には小幅ながら黒字に転換していたと見られている。業績回復の原因は、「経費削減」と「海外生産の拡大」にあったという。

八六年夏以来、経営者はしばしば「総人員一定策の見直し」という言葉を口にするようになった。他社や子会社への出向で従業員の増加を抑えてきたのに、いつのまにか社員の数は一万四〇〇〇名にまで増えてしまった。人件費削減の観点から、あらためて従業員数を見直そうという考えだったのか。

八七年度から、沖電気は社長を筆頭にして

『経営構造改善計画』に取りかかろうとしている。「競争に打ち勝つコストダウン……を着実に実施し、沖の大変革へ力強い第一歩を踏み出そう」というこの計画がめざしているものは果たしてなんなのだろうか。

九年ぶりの経常赤字が、沖電気を大きく揺るがしている。前回経常赤字を出したのは、昭和五三（七八）年三月期のことだった。電電公社から天下った三宅社長のもと、沖電気が一五〇〇人の希望退職者を募集し、三〇〇人を指名解雇するという大合理化策を強行したのはこの年だった。そして、沖電気争議団七一人の八年四カ月に及ぶたたかいが始まったのはこの年だった。

「現状の延長線上には解はない」

九年の歳月を経ていま、社長方針に刻まれたこの言葉が、企業としての今後の行き方を明白にあらわしているように思える。

* “企業社会”の《解》？

八七年五月、日本の完全失業率は三・二％を記録した。総務庁統計局が五三年に現在の調査方式を採用して以来、史上最悪の数字となった。

労働省の「雇用動向調査」によれば、八六年に離職した労働者の離職理由のなかでは、「経営上の都合」という回答が前年に比べて二七・七％増と急上昇したという。その総数三四万人は、

第一次石油ショック直後の七五年に次ぐ数だった。自分の意志にかかわらず、働く場を奪われる。その運命を、労働者が受け入れなければならぬ時代が到来したのだろうか。幸いにも職を失わなかったからといって、安心するわけにはいかない。八六年の一年間に、一時出向を経験した者は五七万人、全労働者の三・三%にのぼっていることが「雇用管理調査」で分かった。しかも、出向に際してその期間が定められていたケースは、わずか七%にすぎなかった。「一時出向」とは名ばかりの、無期限出向がほとんどだったわけだ。どの数字を取り上げても、現代日本の労働者がいかに不安定な状態に置かれているかを物語っている。

争議が終わったとき、争議団員たちは口をそろえていった。

「たたかってよかった」

支援をつづけたある人は、沖電気の争議団員は、争議を楽しんでいるとさえいった。

「経営上の都合」に労働者たちがふりまわされるこのきびしい時代に、企業の外で、彼らはなぜこれほど明るく生きてこられたのだろうか。彼らを八年四カ月の間支えてきたものは、なんだろうか。彼らの感じた「楽しさ」の本質はなんだろうか。

争議が解決して、七一名のうち三五名が職場に復帰した。解決金として、一二億九〇〇〇万円が会社から支払われた。

もちろんそれは輝かしいたたかいの成果だった。しかしほんとうに彼らが見つかったといえるの

は目に見える回答よりもはるかに大きなものだったのではないか。八年四カ月のほんとうの成果は、何人職場にもどれたかという結果よりも、解決金をいくら手にしたかという事実よりも重いものだったのではないのか。

「企業社会」で労働者たちがあえいでいる時代に、彼らは会社の外へ放り出され、自分の力で人と人のつながりをつくっていかざるを得なかった。その苦しみのなかに、彼らはかけがえのない素晴らしい人生をみつめてきた。三〇三三日の争議の一日一日が彼らの手にしたほんとうの成果だった。

彼らはなにに出会い、そして発見してきたのか。それはきっと私たちに、企業社会が示そうとする「解」にはけっしてないものを教えてくれるのではないだろうか。彼らが争議のなかでつかんだものこそが、働く人間にとって必要なものを教えてくれるだろう。

かつてなかったほど激しく変貌し、きびしい大量失業の現代に、「企業の論理」に翻弄されつづけている労働者たちが、どのように生きていくべきなのかという、私たち人間のためのほんとうの解を。

3 ミツバチのように地域をまわって

——相原幸雄の出会ったもの

七一名が指名解雇を受けたとき、妊娠している女性労働者が三人ふくまれていた。そのときお母さんのお腹のなかにいた三人の子どもたちは、八七年三月に争議が解決したとき、一年生となつて小学校に通っていた。

争議期間中に生まれた団員の子どもたちは、三三人にまでなった。

解雇されて一週間もたたない七八年一月二六日、争議団員の金子輝人は結婚式を挙げた。首を切られて職を失い、就労闘争を始めたばかりのとき。この先どれほどの苦難が待ち受けているか分からない、嵐のなかでの新しい出発だった。

八年四カ月つづいた争議の歳月に、金子のあとを追って結婚した団員は一四名にのぼった。

指名解雇はされても、人間としての生活は日々つづいた。あたりまえに結婚をして、子どもを産み育てること。それは争議団員の、人間として生きる権利の主張でもあった。

苦しみがなかったわけではない。夫婦共に解雇された者も三組いた。八年四カ月の月日には、明日の生活費に困ることも、心身を傷めて休養せざるを得ないこともあった。

「収入源も二人そろってとだえたので電話を切られたりガスを切られたり……親戚から援助してもらったときはうれしかった。洋服も二人で兼用が多く、一つのジーパンを二人ではいた」

夫婦で解雇され、翌年女の子を産んだ相原勝美はそう語った。

しかし七一人は、生活をつづけた。人間として生きつづけた。争議団員のまわりには、いつも温かく見守り、包みこみ、支えてくれる何人もの人間がいた。団員は自分で足を運んでその人たちと出会っていった。

指名解雇からしばらくたったとき、沖電気労組の機関紙「沖労新聞」は、次のような職場の声を載せていた。

「『ピリピリっていうんじゃなくて、沈滞ムードっていうのかな。先が良くわからないから、どうなるんだらうと息をひそめている感じだね』『忙しい割には、活気が感じられないっていうと

私のひとこと

* 手紙はいつも海の上から

拜啓 皆様ますますお元気にて全面解決めざし頑張っておいでのもようで力強く思っています。

なんと言っても家族ぐるみのしっかりした団結は、これに優るものはないと思います。私も友見ちゃん（沖電気争議団の北村晴夫さんの子ども）と同じ気持ちで相手に「どげざ、させるまで」支援を続けさせていただきたいと思えます。なぜならこの闘いは、私自身の闘いでもあるからです。

私は、船舶通信士で、三カ月から四カ月の航海をしています。底曳漁船ですので鮮魚運搬船がたびたびやってきます。今日はその船に託して手紙と会費を送ります。

（博多・峰 保太郎）

（八六年七月一日付）

ころがあるものね』『またあるんじゃないかという恐れですね。だから目立たないようにすることになるんじゃないですか』……」（七九年三月五日付）

職場がそういう雰囲気だったとき、争議団員たちはどんな人生を歩んでいたのか。

八年四カ月の争議をたたかいぬいたといっても七一人はけっして特殊な人間たちではなかった。

争議団員たちの生活を撮りつづけ、写真集『たたかってよかった』を出したカメラマンの藤田庄市はこう書いている。

「解雇撤回闘争といえ、ふつう相当な決意と覚悟をもって臨む。また、労働運動の経験もある人というのが通り相場だ。ところが沖電気争議団の場合、一部の人はともかく、当時の総評と同盟の違いも知らない人がいたのにはびっくりした。……やる気をなくして寮でフテ寝していても、こっぴどく批判されたというのも聞かない。大企業のカゴの鳥だったのが解放されて、争議を楽しんじゃった、といったら言い過ぎだろうか」

沖電気一万四〇〇〇名の社員と、同じ「企業社会」のなかで生き、外の世界を知らなかった七一人。

彼らは八年四カ月の争議をとおして、どうやって自分たちの手で、生活をつくっていくことができたのだろうか。

* ゼロからの出発

夫婦そろって首を切られたとき、妻の勝美は妊娠五カ月だった。やがて生まれてくる子どもを抱えて、これからの生活はどうなっていくのか。

相原幸雄には、その事実が不安でもあったが、自分たちの置かれた立場がいったいどういうものなのか、よく分からないというのが正直な思いだった。

高校を卒業して沖電気に就職した相原は、電子交換機のラッピングの仕事をにつけてきた。解雇されるまでの八年間に、職場の労務管理がしだいにきびしくなってくるのを、肌で感じていた。仕事中に隣の同僚と話をしていると、職長が飛んできてはうるさく注意した。かつては、話ができなくても、隣の人のことが分かる余裕があった。体調の悪そうなきには、手助けしてあげることもできた。

指名解雇をされた直後に、夫婦そろって解雇された者として、新聞に相原の手記が載せられた。次の日から、一日に五〇本の励ましの電話が家にかかり、五〇通の便りが全国から寄せられた。自分たちがついているから絶対に解雇撤回までガンバレと記された手紙のなかには、三〇〇〇円とか五〇〇〇円とかのカンパの入っていることが多かった。

『なんで見ず知らずのオレのために、金まで送ってくれる人がいるのだろうか……』

その事實は、相原には驚きであり、信じられないような不思議でもあった。

自分の働いてきた職場のなかには、他人のことを考えているような余裕はなかった。同じ職場の人間が体を悪くして休んでも、悩みを抱えて苦しんでいても、気づくことさえめったになかった。まして黙って、金を送るなど。

『世の中、捨てたもんじゃないんだな』

相原は思った。自分はいままで沖電気という職場のなかについて、知らず知らずのうちに人間らしさを奪われていたんじゃないのか。仕事場の雰囲気は、だんだん悪くなってギスギスとしてきた。だけど、いつの間にか自分自身そんな環境であたりまえに働けるようになっていた。自分たちに、日本中の知らない人たちからこんなにも多くの励ましが寄せられている。

なんとか、やっていけるのかな。東になった手紙に目をとおしながら、相原は漠然と思い始めていた。

沖電気で活動家として働いていたものの、相原は会社の外の世界をほとんど知らなかった。

組合の交流会のようなきには、幹部がいつもきびしく目を光らせていた。青年婦人部の地域集会上、頭の光った対策部長だけが出席したこともあった。社員たちを、外部の人間とできるだけ接触させないようにする。それが会社の政策であり、組合のやり方でもあった。

一六歳の相原幸雄、二三歳の勝美にとっては、なにかもが初めての体験だった。首を切られて初めて、会社の外で生きていかなければならなくなった。

そこになにがあるのか。解雇への怒りも、生活の不安も、人間らしい激励への感激も。すべてを背負いこんで新しい地平の上に立った二人の、ゼロからの出発だった。

* 足で歩く日々

争議が始まると、七一人はそれぞれの分担を決めて、毎日あちこちの組合をオルグしてまわった。ほとんどの団員にとって、大勢の人間の前で話をするなど初めての体験だった。

若い女子争議団員のなかには前の晩に一生懸命原稿を覚えようとして少しも眠れない者もいた。「泣いてばかりいて、なんのことだか分かんねえじゃねえか」

昼休みに、組合員たちは集まり、話を聞いてくれた。けれど、首を切られたときの悔しさがこみあげてきて、ハラハラと涙を流しながら、何十分間も嗚咽をこらえるのが精一杯という団員がいた。

「あんなに一生懸命になって泣かれたんじゃ、カンパをしないわけにはいかねえなあ」
組合員たちはボヤキながら、次々にカンパをしてくれた。

「しゃべり出したのはいいけど、どうも支離滅裂で話の味が分からねえなあ。沖にはもっとましなヤツはいねえのかね」

別の所では、情勢分析も展望もすっかり確認していないまま、出たとこ勝負でえんえんと話し



つづけ、おんしほく 懇盛をかう団員がいた。

「あんなんじゃ危っかしくって、黙って見
てられねえじゃねえか。この先ちゃんとやっ
ていけんのかねえ」

労働者たちはそういって、ここでも多額の
カンパを寄せてくれるのだった。

泣いてもわめいても、沖電気争議にはカン
パが集まる。この事実が、右も左も分からな
いまま走り出した七一人の、最初の生活に果
たした役割は小さくなかった。

労働組合の活動家としては、ほとんどシロ
ウトの集まりである七一人。筋のおった理
論を述べるのでもなく、感動的な話で人をひ
きつけるテクニックをもっているのでもない、
素朴なオルグ員。その一人ひとりのもってい
る初々しさが、逆に行く先々で人びとの心に
共感を呼ぶことになったのだった。

世間ズレしていない争議団員たちの性格は、そのまま集団の性格となった。それは後に、幅広い層の支援を得て力づよい共闘会議を結集していくための、重要な要素になっていった。

当初、電機労連傘下の組合をまわっていた相原には、オルグはそれほどやさしい仕事ではなかった。沖電気労組の所属する電機労連は、冲争議団には関知しない姿勢をとっていた。

「ウチのどこも電機労連なんでね。あんたんとこと関係ありませんから。あまり話を聞いてもしようがないし……」

門前払いで追い帰される所も多く、たまに話を聞いてくれる人がいると、それだけで感激して帰ってきたりした。

八〇年から担当した、港区のオルグもたいへんだった。港区は、沖電気の本拠地だったからだ。日本電気、松下電器、沖電気、安立電気。電機労連傘下の組合は、かつて地区労内では三分の一ほどを占め、絶大な力を持っていた。後に、組合の右傾化が始まって、松下電器などが脱落を始めるが、港区労協では電機の組合の影響力は衰えていなかった。

その港区内で、沖電気労組に排除された争議団が活動する。相原たちに残された道は、自分の足で、一軒一軒の組合を歩くことではしかなかった。

勝美は、解雇の翌年女の子を出産していた。保育園に子どもをあずけ、朝のピラまきに夜の集会。子どもの送り迎えから家事に至るまで、夫婦で分担する日々がつづいていた。家族としての生活を送りながら、相原はしだいにオルグに歩くことにめりこんでいった。

東田熙子、市川美佐子。相原と一緒に港区を担当していたのは、二人の女性団員たちだった。黒一点の相原は、夜遅くまで一人で組合をまわることもあった。いろいろな人に直接会って、相原は自分のもっている言葉で、沖電気争議を語って歩いた。拙くても未熟でも、相原にできることはそれだけしかなかった。

沖電気争議団員たちを支えたのは、ほんとうは、自分の足で歩いて現場の労働者たちと顔と顔突き合わせて語り合う、このエネルギーと粘りづよさだった。純粹さも朴とつさも人の心を打ったかもしれないが、それだけで何年もつづいた争議を支えられただろうか。

一片の要請で、カンパを集めるのは簡単だ。一枚の通達で、動員をかけてもらえば人は集まるだろう。だが、長期間にわたってカンパをつづけ、本気で沖電気争議団のためにありつたけの力を出してくれた人たちは、職場の隅々まで歩いてまわる争議団員の姿に惹かれたのではないだろうか。

ほんとうに自分たちのことを分かってもらうためには、幹部に会って申し入れるだけではだめだ。相原たちはそう考えて、一人ひとりの労働者に自分の感情をムキ出しにして、すべてをぶつけていった。

解雇されていて、オルグに専念できるという有利さもあつたかもしれない。争議団員たちのいつももっている真剣さがやがて、会社のなかにいたときにはなかった、人との出会いをもたらすことになる。

* 自分を変えた地域オルグ

港区労協は、沖電気労組との関係があつて、争議団支援にかんしては議題にものぼらせなかつた。しかし、解雇された労働者にたいしてそっぽを向いているというのは、労働組合としては無理の多い話だつた。指名解雇から一週間ほどしかたないうちに、東京新聞、共同通信、全港湾など一〇労組が、糾弾のアピールを出していた。地区労の組織としては支援をしなくても、ほとんどの労働組合が、争議団に共感しているのが現実だつた。

港区労協の執行委員だつた石川久照は、争議の始まつた当時から、団員たちの活動を支援しつづけた。

区労協の役員である以上、表だつて沖電気争議団のために働くことはできなかった。しかし石川は、後に沖電気労組の副委員長も出席した三役会議の席で、こういつて支援活動を公のものにした。

「港区で長い間労働運動やってきて、沖電気の争議はかわりもつてないから私は知りませんでおおると思つてるのか。オレは断固として沖争議を支援する。組織をはなれても、支援をする。運動家として、こんな千載一遇のチャンスになんもしないでいるなど恥だと思わんのか！ オレは堂々とやる。オレが沖のことをやるときは、区労協としての仕事でなく休暇をとつてやっ

ていると思え！」

石川がそこまでいきれたのも、沖電気争議が実質的に大多数の組合の支援を受けているという実績があったからだ。地区労の旗びらきなどでも、沖の争議団員は一〇名くらい連れ立ってくる沖電気労組の役員と、平気で顔を合わせていた。労組役員はすぐに帰ってしまったから、自然と争議団員の方が顔を知られるようになっていた。

石川は、後に沖電気争議団の支援共闘会議ができるまで、重要な役割を果たすことになった。争議団員たちが、歩いて勝ちとった支援の積み重ねが、また新たに人を引きつけて争議の力を生み出していった。

争議が始まって四年ほどたったころ、相原たちは一つの転機を迎えていた。

港区の担当になって以来、みんなは区内を毎日毎日歩きまわった。職場に働く労働者たちに直接会って、自分たちの思いのたけをぶつけてきた。そうやって、多くの支援を集めてきた。

だが、争議に入って何年にもなるというのに、いつまでもいつまでもそんなやり方をしているのだろうか。

相原は思い始めた。区内には、いまにもつぶれそうな印刷会社や、小さな町工場がたくさんある。自分はいままでそういう会社の労働者たちに会っても、「オレたちは苦しい、たいへんだ」、「だからカンパくれ、行商の注文くれ」としかいってこなかった。ひょっとしたら、自分たちよ

りも困っている労働者がいたかもしれない。自分たちと同じように悩みを抱えた人も、いたかもしれない。

まわる回数が多くなると、そのうちに地域の人も親しくなっている話をするようになった。聞いてみると労働者の口から出る話は思いもしないことばかりだった。

ある印刷所の労働者は、自分たちの生活費よりも低い賃金で働いていた。油まみれになり、汗だくになっても、それだけしかもらっていないかった。相原は、カンバを訴える言葉を、それ以後口に出すことができなくなってしまった。

別の工場では、合併したりコンピュータ化したりして、来月にはもう職を追われるという人が、カンバを寄せつづけてくれていたのだった。

港区の土地が値上がりして、経営者が工場を手放すらしい。オレたちはどうしたらいいのかと、悩む労働者から相談をうけたりもした。

これまで相原たちは多くの支援を集めて、争議は四年つづいてきた。だがあと何年、同じ日々がつづくか分からなかった。それに、ほんとうに勝利をつかむためには、もっともっと大きな支援が必要になるだろう。地域の人が抱えているホンネが出せなくてオルグがつづけていけるのか。

『オレたちはこれから先、いままで以上の連帯をつくり出せるんだろうか……』

思い始めたきっかけは、港区の争議団共闘に加盟するという話が持ち上がったことだった。

港区では、一〇以上の争議団が共闘会議を結成していた。争議団共闘では、統一行商、統一カ

ンパで利益分配するという方式を採っていた。

港区労協との密接な関係があったため、それまで沖争議団は港争議団共闘には加わっていなかった。しかし、実質的に区内のほとんどの組合が沖争議団を支援する実績ができ、行動を共にすることの多くなった二つの組織では、どちらの側からも一緒に活動をするべきだという声があがっていた。

ところが、加盟について話し合う席で、反対の意見を持ち出したのは相原だった。相原は、カンパの取り分が減ってしまうのに、わざわざ港争議団に加盟する必要はないと思ったのだった。たしかに、相原たちのつくり出した連帯のおかげで、沖争議団は一組織だけで港争議団をはるかに上回るカンパを集めていた。加盟すれば、分配された結果の取り分は、これまでの何分の一かに減ってしまうだろう。

東田照子は自分勝手な意見を言う相原をにらみつけた。相原は、加盟をすすめる東田たちと本気で話し合った。話しているうちに、相原はしだいに自分がイヤになってきた。

『なんだ。オレの考えていることは、結局自分自身のことばかりじゃないか。金ばかりをかき集めたって、オレは何の役にたってるんだ。世の中捨てたもんじゃない。争議に入ったとき、オレはたくさんの人の信じられないような支援を受けて、そう思った。高知やいろんな所で温かい人に出会って、自分が理想とする人間がここにいると感激した。あの気持を、オレはどこへやってしまったんだ……』

自分たちのために。それを訴えるのがオルグの仕事ではない。相原はそう思い始めた。区内のある支援者に、こういわれたことの意味がようやく分かってきた。

「ウチのどこにも、よくいろんなオルグがくるよ。だけど、みんな自分のことしかいって帰らない。あんたのそこはどうか、景気はどうですか、と一言聞く者もない。オルグってのは、地域を蜜蜂みたいに飛び回ってんでしょ。ちょっとその気になったら、春闘だって職場の状況だって、いくらだって耳に入ってくるじゃない。それを次々に伝えていったら、ほんとうはすごい仕事ができるんじゃないの」

沖電気争議団は、港争議団共闘に加盟した。相原たちは、いままでまわらなかったような集会にも顔を出すようになった。たとえばそこでカンパも行商の注文も、まったく集まらないと思っても。

それ以来、相原はまた、オルグが楽しくなっていた。

* いま、地域でなにが起こっているのか

八四年の一〇月に、相原たちは港区でブロック集会を開いた。目的は、それぞれにいろいろな問題を抱えている地域の労働組合の、交流の場を設けようということだった。同じ区内に働いていても、隣の会社のことはほとんどだれも知らなかった。

春闘のときなど、ある会社のニュースをもつて隣へいくと、大いに驚かれたことがあった。

「アリヤ、こんなに取れんのか。こんなに要求出しているとこあんのかよ！」

生の情報の魅力に、人びとは飢えていた。港区内を四つのブロックに分けて、普段はたまに地区労の集会などが開かれても、せいぜい五、六名しか集まってこなかった。相原たちの交流会は、フタを開けてみるとどこも三〇人以上、多いところは八〇人も人が組合から参加した。

医療労働者である看護婦からは、きびしい看護労働の実態、看病もまともできない状況が語られた。

「オレたちも、うっかり病気になんかなれねえな」

私のひとこと

* 歴史に残る闘いに

北海道は、もう雪の降っている所もあります。先日、具知安まで行きましたら吹雪でした。室蘭はその点大企業の煙突が高くそびえているせいか、割にあたたかです。

私自身も、七四年から七八年にかけて、職場の仲間の解雇撤回闘争と一緒にやってきましたし、室蘭工大の卒業生（渡辺秀雄さん）の方も沖電気で闘っていると聞いていましたので、他人事とは思えませんでした。とりあえず私一人でも支援しようと、連絡したのですが、同じ郵便料金ならもう一人と、欲を出すうちに一七人にもなり、あまり多くても責任が持てなくなるので———と思いつつ三〇人になりました。闘う皆さんの活躍は、働く仲間の歴史に残るすばらしいドラマになる事と思います。

資本家はお金が資本。労働者は身体が資本と先人が言っております。くれぐれも身体を大切に。私も微力ですがお手伝いいたします。

がんばってください。

（北海道・塩崎泰子）
（八〇年二月一日付）

初めて聞く話に、労働者たちは口々にいった。

民商や東京土建の組合員からは、思いがけない話が出た。

「私ら、みなさんに稼いでもらって、そのお金で商売させてもらってるんです。だから、みなさんにはしっかり、いい賃金、とってもらわんと困るんです。どうか、春闘がんばって下さい」

そうか。そのとおりの声が飛んで、思わぬところで労働者の連帯はつよまった。

いま、どんなことが地域で起きているのか、みんなで集まって話し合おう。そう呼びかけた結果の大成功だった。相原たちの考え方は、争議を通じて地域の交流をはかる役割をしようと変わっていた。それが地域の蜜蜂である、争議団オルグの仕事に思えた。

そういう思いで地域に入ってみると、どこも労働者も自分の話をしたがった。そして地域の様子を聞きがかった。現実には、隣の会社の春闘がどうだったのか、近くの工場でなにが起こっているのかさえ知られていなかった。それはまるで相原がかつていた職場の、人と人がバラバラにされた人間味のない状況と同じだった。

「みんな、どうしているんだろうか」

だれもが、同じ思いをもっていた。ただ声をかける人間が、いないだけのことだった。

集会では、それぞれが思い思いにアピールや署名を訴えた。「じゃ、それ持ち帰ってウチで集めるよ」。思いがけない声がかかり、また新しい連帯ができていった。ラジオ日本で一〇〇人以上の人減らしが問題になったときも、相原たちが話を聞いて地区労に持ち込んできたのだった。

港区労協の石川は、後にこう語った。

「いつの間にか相原たちは、オレたちより地域のことよくつかんでいるようになったんだよ。あそこでなんかこんな問題が起こってるらしいなんて、教えてくれたことがあったしね。話聞いてどこそこへ相談にいったほうがいいって、アドバイスもできるようになっていたんだなあ」
お願いをして訴えて人に頼っていた争議団が、人と人の間を結ぶ力もった。いつの間にか、「とにかく沖の集まりにいくといろんな組合員が来る。それも、自分たちの知らないような人がたくさん集まる」という評判がたつようになった。それを聞いて、また人が集まるようになってきた。

沖電気争議団は、毎週一回会社の門前でビラをくばりつつづけた。争議解決までにおこなったビラ配布行動の回数は、通算四〇六回にのぼっていた。

争議団の発行した数々の印刷物のなかに、守る会の機関紙『はたらく』があった。毎月一回出されたこの機関紙は、七九年四月の創刊号から、八七年五月の休刊号まで、九七回発行された。編集長を務めた事務局次長の松本謙司は、自分たちの生活費が何カ月も入ってこない苦しいときにも、この機関紙は休むことなく発行しつづけた。支援してくれる人を、どうやってつないでいか、それが争議団の勝利を決める。そう確信していたからだ。

「マツケン」の愛称で誰からも親しまれている松本編集長の、終始一貫した編集方針は、「自

分たち争議団の話はできるだけ載せないこと」だった。団のなかでは「趣味で出してる」と評判が悪かったが、結果的にはその方針は間違っていないかったと松本は思っている。

平和のこと、世界のこと。『はたらく』の記事を、楽しみにしている人がたくさんいた。自分たちのことを訴えるのだけが、争議ではない。沖電気争議を中心にして、多くの人が集まってくれた。『はたらく』を読む守る会の会員は、一万四三六五人に達していた。

人と人を結んでいくと、見えないものが見えるようになってきた。相原たちには、ほんとうに自分たちに求められているのがなが分かってきた。とにかく人が集まると、それだけで元氣が出るようになっていた。

いつの間にか、冲争議支援の話は、あまり口にしなくなってしまった。だれだって、顔さえ見れば分かっていることだった。

冲争議に関係なくても、相原たちは、区内を歩くことをやめようとしなかった。



相原幸雄・勝美夫妻。長女が三歳のとき。長男はまだ
生まれてない。(1981年)





職場に復帰して5ヵ月。長女は小学校2年、長男は4歳になった。
自宅で。(1987年11月)



いちばん前が五味田靖子。(1981年)

4 私はここでなにができるのか

——五味田靖子が出会ったもの

* 明日の見えないときに

五味田靖子は、八一年五月から自宅のある埼玉県を担当になった。

埼玉では、本庄工場から解雇された笹井均、南本博、佐々木君代がオルグにまわっていた。たった三人で、ひろい埼玉県内に支援の輪をひろげていた。

七九年一二月には、「闘いのトリデ」として、本庄駅のすぐそばにプレハブ二階建ての事務所がつくられた。自治労県本部、埼玉県教組、埼玉高教組、埼玉土建、埼玉商連、埼玉県職労の六団体の青年部が、実行委員会をつくってカンパを集め完成させたものだ。八一年の二月には、本庄を中心に「沖電の仲間を励ます埼玉北部の会」が発足していた。

しかし靖子が出会ったこの年は、争議団にとっても靖子自身にとってもきびしさを抱えた年だった。

指名解雇を受けてから、すでに一年半がすぎている。会社側の引き延ばしで裁判の行方にメドは立っていなかった。会社の考えていることもつかめず、争議団の側では、まだ共闘会議が結成されていなかったために、自分たちのたたかいかいごとまでひろがっていくのかに確信が持てない、明日の見えない苛立ちが、争議団をおおいかけているところだった。

この時期になにをすればいいのか。埼玉担当に移ったばかりの靖子にとっては、なおさら五里霧中で手探りの毎日がつづいていた。

埼玉担当になるまでの一年半、靖子はアルバイトで東京水道労組の書記として働いた。会社にいたころ、青年婦人部で活動した経験はあったが、組合の書記というのがどんな仕事をするのかほとんど知らなかった。簡単な事務はできても、印刷のやり方も知らない。自分の存在がかえってみんなに迷惑になっているのではないか。

毎日恥をかき、とまどいながらのアルバイトのなかで、靖子はこう思い始めた。

「早く組合員のみんなと仲良くなるう。仲良くなって、組合員がしょっちゅう事務所にやってきてしゃべって帰れるような組合にしよう」

争議に入っているいろいろな組合をオルグして歩いた。まわってみると、人の出入りの多い組合と少ない組合があった。その違いは、活動が活発かどうかのバロメーターになっていることも分かった。

東水労は、活発な組合だった。靖子は、自分の存在が組合の妨げになることなく、少しでも潤

滑油の役に立てればいいと考えた。組合が生きいきと動くために少しでも役立てれば、自分がここにいる意味も少しはあるだろう。ふくよかな体つきで、いつも明るくニコニコしている靖子には、それはうってつけの仕事だったかもしれない。男ばかりの労働組合で、むずかしい仕事はできなくても労を惜しまずに働く靖子は好感を持たれた。

東水労の組合員は、コーヒーの空きびんに一元、五円、一〇〇円とカンバを集めてくれた。一年半のアルバイトが終わって靖子が去ったあとも、硬貨のギッシリつまった重いビンをもって、何回も争議団事務所まで届けてくれた。

沖電気の支援を、声高に訴えたことはなかった。けれども、靖子が一緒に働いているというのと、自分にできることを考えてガンバっている姿が、組合員の間には沖電気を支援する気持ちを自然と起こさせていた。

「私はここでなにができるだろう」

そう考えて、靖子は無理をせずに支援をひろげてきた。

埼玉県には、ひろい全県でたった四人しか担当者がいない。沖電気のある本庄などの北部では、まだしっかりとした労働運動さえおこなわれていなかった。埼玉の運動を、四人でつくり出していかなければならない。待っていては、支援はひろがらない。訴えるだけでは、気持は伝わらない。

明日の見えないきびしい情勢のなかで、靖子にはまた、自分になにができるかを考えながら歩

く日々が始まっていた。

* 埼玉の地に育てられ

靖子が埼玉に入る前、沖電気争議が始まったばかりのころ、川越地区労は支援の集会を開いてくれた。冲争議をなんとかしようと呼びかけて、初めてというほどたくさんの人が集まった。

埼玉南部には、高崎線、東北線に沿って金属のベルト地帯といわれる、中小の金属関係の工場が集中した地域がある。

争議をしているのか働いているのか分からないような、自分の生活がきびしい労働者たちが、積極的に支援をしてくれた。

いくらがんばっても、四人だけの力で埼玉の運動を盛りあげることができなかつただろう。地域に入って歩くことで、彼らは自分たちの力を引き出し導いてくれる人びとに出会っていた。

靖子の担当した浦和の地区労には、倉林事務局次長がいた。倉林は、日本荷役争議でたたかっ

私のひとこと

* 事務所に寄ってみようかと

毎日元気に復職めざして頑張っておられることでしよう。暑い日を迎え、行商の仕事をするのは大変な苦勞でしょう。私が「支援する会」に入った動機は、汗をふきながら行商している婦人の写真を見たからでした。

病気をしないように頑張ってください。私は、高校の教師をしているのですが、困難なときには、みなさんの苦勞など考えて、頑張っています。夏休みには東京に出たら、事務所に寄ってみようかと思っています。

(福島・石井二郎)

(八二年七月一日付)

てきた争議団員だった。

浦和地区労では、争議団員が母体となって動いてきた。

争議団が呼びかけて、人をつないできた。倉林は、争議の先輩として靖子のめんどうをよくみてくれた。

一年間にわたって、靖子は倉林のお抱え運転手のような仕事をした。どこへでも、倉林と一緒にについていった。

倉林はいく先々で、沖電気争議団員である靖子を紹介してくれた。土地の様子もよく知らなかった靖子が、自然に地域の人たちとふれあえるようになった。

倉林はまた、いろいろな顔でどこへでも図々しく入っていく術を教えてくれた。ときには争議団の顔で、ときには地区労の顔で。それを覚えたことで、靖子はさまざまな傾向の労働組合のどこへでも入っていけるようになった。

「今日はという名前できたの！」

工場のなかにある組合事務所を訪ねるとき、守衛が笑いながらそう聞くようになった。

指名解雇されたとき、三二歳の靖子には小学校二年と四歳の男の子がいた。子どもが生まれてからは、朝六時半に家を出る生活をつづけた。二重保育を引き受けてくれる義姉の家へ寄ってから出社をし、帰りにまた寄って帰宅するという毎日だった。二人目が生まれてからは、条件はい

っそうきびしくなった。靖子には、自分がただ、会社と家の間を往復しているだけのロボットのようを感じられた。子どもを育てながら働くということの意味が、見えなくなっていた。だから指名解雇を受けたときも、ほんとうは争議団に残ってたたかいぬく自信などなかったのだ。

その靖子が、地域の人たちに励まされて変わっていった。

「働く婦人の埼玉連絡会」では、自分の地域にいる婦人労働者の実態を教えられた。浦和市民会館で一〇年以上働いていた婦人労働者四人が、三月末に突然、新年度からの解雇を通告されていた。

「もうちょっと早く知ってたら、私にできることがなにかあったんじゃないかな……」

靖子はそれ以来、何人かの婦人たちを集めて二カ月に一回くらいの交流会を開いた。国際婦人年、労働時間、労働基準法などのテーマで学習を重ねたこの会は、斉藤洋子、中村光子などが参加していた東京の中央区婦人部連絡会議などにならって、「浦和で働く婦人の交流会」になっ

ていった。

活動の中心になって働くことで、靖子は一つの組織をつくり、運営し発展させるむずかしさを痛感した。だが、かつては自分の周囲もよく見えず、ときにはうしろ向きに生きていた靖子が、地域に入っているいろいろな人に育てられるなかで、人のもつ要求をくみとり、つなげていく力を確実に身につけていった。

* 楽しく人が集まれば

「この地域の婦人の集まりが、なかなか大きくならないの。なにをしたら人が集まるのかしら」

上尾市職労の書記が、靖子に相談した。上尾には、冲電気争議守る会の人が二〇人くらいいた。ほとんどが女性だった。そのまわりにいる人たちもふくめて、なにか交流になることはできないかと、靖子は考え始めていた。

「コンサートをやろうよ」

相談をうけて、靖子はすぐに答えた。そのころは、各地でコンサートを開くのがはやりだった。やるからには、楽しいことをやりたい。靖子はいつもそう思っていた。会社にいたころ青年婦人部の活動で覚えているのは、楽しかったという想い出が多かった。

靖子の呼びかけで始まった取り組みは、「あじさいコンサート」となって四〇〇人の人間を集めた。

市民生協の人たちや、普段あまり知らない人たちも集まってくれた。婦人たちの合唱団ができ、後に上尾の平和祭典などの出演にも引き継がれていった。冲争議の話も少ししてもらったが、靖子はそれよりも、自分が地域の人たちにとって、なにかができればいいなと思っていた。

人が集まることも、楽しく歌ったりすることも、地域の婦人たちの交流には役に立った。靖子自身、友だちもいっぱいできたし、結局はその人たちが、沖電気争議をほんとうに理解してくれて、最後まで応援してくれた。

靖子のやったことは、言葉で訴えるよりも大きく、幅ひろい支援を生み出す役割をしていた。八二年から毎年やっている「やまびこフェスティバル」で、八月の夏休みに四五団体、三〇〇人を集めて秩父でキャンプをした最初の年には、歌手の梅原司平やきたがわつもかけつけて、夜どおし楽しいときをすごした。

浦和地区労の青年部が中心となって実行委員会を組織したことで、若い人が育ったといわれるようになった。こういう運動を中心にして人が集まり、いままで同じ地域にいてもバラバラだった労働者が、交流できるようになっていった。

ここでなにかができないか。やるからには楽しくやらなきゃ。靖子はいつも、それだけを考えていた。自分のことを訴えるよりも、人のためになにができるかとやっていたことが、最後には争議団を支える人のつながりをつくりだした。

八三年一月、中央共闘会議の結成から一年後に、埼玉県共闘会議結成集会は開かれた。

議長に推された、埼教組委員長だった小笠原政之助は引き受けるかどうか悩んだ。埼教組の争議の有力な支援団体の一つに、電機労連があった。沖電気争議を支援することで、関係が悪くなってしまうかもしれない。

「万一のときは、たとえそうなくても仕方ないだろう。指名解雇を認めるようなことは、絶対にできないのだから」

小笠原は考えぬいた末に、そう決断した。靖子たちの運動は、体を張って支援する人を生み出していった。一月一〇日の集会には、雨のなか、一三五〇人の人が集まった。

埼玉担当の争議団員の一人、南本博の小学校六年生になる娘、由科が、作文を朗読した。

「早く父に、会社にもどってもらいたい。けれどいまの父は、この争議の仕事がむいていると思う。この仕事をしている父は、とても生きいきとして、みえてくるからだ」

生きいきとして、争議をしている。それは南本にかぎらず、七一人全員に共通していたことかもしれない。それが沖電気争議の、人を集める秘密だったのかもしれない。

* 争議に勝つためには

いままででない取り組みを、埼玉でやってみよう。

靖子をふくむ争議団員が思い始めたのは、八五年に入ったころだった。第II部でふれるように、争議団は八四年の五月から和解交渉に入っていた。形勢は会社に不利な状況がつづいていたが、八五年に入っても、会社側ははっきりとした回答を出さないうままだった。より大きな支援の力を見せつけて、交渉を勝利へ導きたい。それが争議団員みんなの思いだった。



靖子たちは、沖電気の城下町である本庄で五〇〇〇人を集める集会を提案した。しかし、真面目に話せば話すほど、共闘会議の幹部たちには笑われた。

「東京で開かれた民主勢力の大集会にだって一万人いったのが最高だ。それなのに、あんな田舎にそんなにたくさん人が集まるか……」

八一年に雪印食品の争議団が、埼玉県蓮田市の堂山公園で勝利をめざす集会を開いた。この「青空と桜のまつり」には、五〇〇〇人が集まっていた。東京に一万人いくのなら、本庄に五〇〇〇人こないはずがないと靖子は粘った。この人たちは、一度目標が決まったら、かならずやりぬいてくれる人たちだ。そう信じていただけに、靖子は必死になって説得しようとした。

「そんな話、とてもシラフじゃやってられん。とにかく一杯飲ませろ」

地区労務局長だった倉林の提案で、三月の終わりに本庄にある公民館で泊まりがけの実行委員会が開かれた。

「五〇〇〇人を集めて、本庄で集会をやりたいんですけど……」

地元の人たちを中心とした二〇人ほどを前に、争議団の南本がおそろおそろの切り出した。

「五〇〇〇人なんて、ちっちゃなことでもいいのか!」

反応は、予想外のものだった。倉林の提案は効を奏した。酒の勢いも手伝って、話はどうんちも大きくなっていった。

「戦後、映画にもなった本庄事件の集会には、一万人が集まったんだ。秩父事件だって、一万人の民衆が集まっている。現代の沖電気争議団が五〇〇〇〇人ばかりじゃ小さいよ。人口五万の本庄の町を一変させるんなら、やっぱり一万人は集めなくっちゃ!」

日本機関紙協会埼玉本部の芳野政明が、率先してたきつけた。埼玉でも北のはずれにある本庄に、どれだけの人が集まるかは芳野にも分からなかった。協会が主催して毎年二、三万人を集めている「平和のための戦争展」の経験があった。沖電気の争議団員が歩きまわって、関係をつくった各地の団体が動いてくれればという思いもあった。しかしなによりも大きかったのは、沖電気争議を勝利させるためにはなにが必要なのかというところから、みんなが発想を始めたことだった。争議を勝つためには、一万人を集めて会社に打撃を与え、社会的に包囲しなければなら

ない。そのためにはどうすればいいのか。だれもが本気になって支援を考えていた。

こうして、靖子たちのいいだした集会の構想は、全県的な規模にまでひろがり、みんなが自分のための集会として運動をすすめる取り組みにふくらんでいった。沖電気争議が、埼玉の歴史のなかにあった、民衆のたたかいの現代版としてとらえられるようになっていた。

* 世の中が変わるような気持になったよ

——「本庄ふれあいまつり」

「本庄ふれあいまつり」の取り組みは始まった。一万人集会をやりとげるために、ありとあらゆる人びとの知恵と経験が集められ、創意ある行動が展開された。

浦和では、一万人の一割、一〇〇〇人が目標になった。今後の地域の運動にかかわることから、地区労は自分たちの問題として取り組んだ。当日浦和からは、本庄まで一四両編成の列車「ふれあい号」が走った。困難な争議をたたかって、首を切られたら労働者が支援するという風潮をつくっていた全金の仲間たちは、障害者列車の発想を持ち込んだ。

蓮田市の雪印食品の集会では、市当局も協力し、市民、議長もかけつけたという経験も生かされた。全県にわたって、一三ほどの地域で、まつりのための実行委員会が組織された。埼玉土建、民商、支援する会の人たちが中心になって、それぞれの地域の人を集めるために働いた。

この運動をすすめている最中に、裁判所では会社側が金銭解決による和解案を提示してきた。自分たち争議団は、職場復帰のためにたたかってきたんだ。撤回させる会の全員集会で、靖子は断固として会社提案をはねかえす決意を表明した。ふれあいまつりに埼玉県をあげて労働者たちの参加してくれている事実が、靖子をはっきりと勇気づけていたのだ。

九月二二日、雨模様の本庄市城下公園には、八五〇〇人の人間が集まった。

「ふれあい号」に乗った八〇〇人は、本庄駅から「赤いゼッケン」を歌いながら行進した。

「こんなにたくさんの人、初めてだ。がんばってよ」

地元の商店街の人たちが驚き、声援を送った。芳野がいったように、集会は本庄の町を一変させた。城下公園はじまって以来の人出だった。会場までチャーターされたバスは、東京から五時間かけて来たものもふくめて、二七台にのぼった。

少年団、学童クラブ、障害者、商工団体、労働組合……。それぞれの参加者たちが、思い思いに舞台や模擬店に参加した。会場に並んだテントは、四〇をかぞえた。

「沖電気の人びとが、明るく胸を張ってたたかっている姿に拍手をしたいねえ。こんなにたくさんの人と手を結びあっている。これが人間だよね」

メインゲストと呼ばれたレオナルド熊は、舞台の上から参加者に語った。

「弱い者はみんなで助け合わなければいけないんです。このたたかいは、かならず勝ちます。それが、日本の労働者を救うことになるんです」

歌を歌う人。焼き鳥を売る人。猿まわしを楽しむ人。八五〇〇人は、思い思いのやり方でふれあいまつりに参加した。城下公園は、人間と人間とがふれあう場所になっていた。

「本庄ふれあいまつり」は成功した。参加した一人ひとりにとってまつりは、沖電気争議団支援というワクを越えて、自分たちのための楽しみ、運動になっていたのかもしれない。

それでいいと、靖子は思っていた。ここで自分は何にができるのか。そう問いつづけて歩いてきた靖子の争議の日々は、いつもこういうかたちで実を結んできた。婦人たちは、地域で交流した。若者たちは、自分のなかの蕾が少しふくらむようなものをつかんでいった。そして埼玉県の親と子が、家族一緒になって楽しめる一日を経験した。

人が集まるのは、楽しいことだった。いつだってそのまんまに、沖電気争議団がいた。気がついてみると、自分たちはけっこういろいろな集まりをつくってきたように思えた。とまどいながら入った埼玉にも、少しはなにかを残せたのかもしれない。けれどほんとうに得をしたのは、自分自身だったと靖子は思う。沖電気争議を本気で支援してくれる人も、たくさん集まった。なによりも、倉林をはじめとして、自分を変えてくれるような人に何人も出会うことができた。みんな自分の思いを正面から受け止めて、一緒になって苦労をしてくれた。この人たちがいるかぎり、争議をやりぬけると自信がもてた。争議は靖子を、前向きに変えてくれた。いつもニコニコしていて、明るい人だねと靖子はよくいわれる。だけどほんとうは、まわりの人たちの力が、自分を明るくしてくれているんだと、靖子は思っている。

第Ⅱ部

連帯こそ力の源泉

——労働組合運動としての争議

1 中央支援共闘会議の結成へ

七八年一〇月三日の『日本経済新聞』に、次のような記事が掲載された。

「通信機大手メーカーの沖電気工業は二日、従業員数の一割削減、東京・品川事業所の閉鎖……を骨子とした企業体質強化策をまとめた……」

従業員にまだ提案されない段階での公表だった。沖電気労組が合理化反対スト権を確立した一日、会社は正式に労組に合理化提案を出してきた。

当時、沖電気のある港区の区労協にいた石川久照は、その直後に支援などの打ち合わせのために、沖電気労組の樋口委員長に会いに行った。石川に向かって、樋口はこう話した。

「まあオレンとこは、組織が大きいから、それなりの解決つけるからあまり心配しなくていいよ。電機のなかで合理化が一番遅れてるのはオレンとこだからねえ、くるべきものがきたという感じだからね」

樋口の言葉を聞いて、石川はすでにこのとき、沖労組が本気で合理化反対闘争に取り組みつものないことを感じていたという。

マスコミは、沖電気で指名解雇が発生した段階で大きくとりあげたが、それは一つには、三井

三池以来「死語」と化していた大企業における大量指名解雇が、成長産業といわれる通信大手であらわれてきたことであった。

もう一つは、労働者・労働組合にとって、より衝撃的であったのは、当該の労働組合が希望退職募集の段階では一〇波・三八時間のストをうってたたかいたが、指名解雇が強行されたのにたいして、なに一つたたかえなかったことである。「名指しの首切りとさえたかえない。労働組合の弱体化は、ここまでですんでしまったのか」という驚きであった。

したがって、沖電気争議は、企業によるもっとも鋭形での人べらし合理化とのたたかいであり、同時に労働組合のあり方を問うたたかいという二つの性格をもっていたし、そういうひろがりをもったたたかいとして発展した。

しかし、七一名の前に立ちふさがった「当該労組の闘争放棄の壁」は大きかった。

七一名が、どれほど幅広い支援を受けることができるか。労働者たちの連帯の力がどれだけつよいか。争議団のたたかいが会社の予想を超えて発展するかどうかは、それをどこまでかたちにし、会社を社会的に包囲していけるかにかかっていた。

* それぞれの地域で

東京・東部地域は、争議団事務所からは川を二つへだてた遠い地域だった。平井盛博、藤原正

和らがオートバイに乗って、オルグに走りまわっていた。この東部の七地区労が、沖争議団支援の地域共闘会議を最初に結成していた。

指名解雇発生直後に、争議支援はするなというFAX司令を下ろした全電通労組の、支部があった。日本電気精機のような、電機労連の組合もあった。しかしこの地域には、ドレイ工場で知られる日本ロール、ペトリカメラ、全金浜田精機など、多くの争議を支え勝利させてきた歴史があった。その力が、争議支援をあたりまえのこととして、地域共闘に結実していた。

東部支援共闘会議結成は争議団を励まし、他の地域での支援組織化を促進した。後に中央共闘会議では、高橋東部支援共闘会議議長が、地域共闘を代表して副議長に選ばれた。

私のひとこと

* 沖電気の人はとてもすてき

私と沖電気争議団との出会いは、三年前の夏。ふるさと山形県での平和友好祭でした。

八三年の中央メーデーにブラッパと参加したら、会場の入口（東京、原宿）で宣伝行動をしている沖電気争議団を見つけました。

胸がキュンとなり私も、「ピラまきしなくちゃ」とゆるすな沖電気的首切り“のゼッケンを胸につけて、ピラまきに参加。にわか雨の中、流れるデモの隊列からは「がんばれ」の声とともに、たくさんの募金も。

その時の感動、勝利に確信を持って、闘う沖電気争議団の姿は、もう忘れられません。

力たらずの私ですが「支援する会」に入会して、全国の仲間みなさんと一緒に、働く者の権利を守りたいと思います。

（病院勤務・斉藤弘子）

（一九八三年六月一日付）

沖電気争議は、いろいろな形で各地の労働者のたたかいと結びあい、支援は全国的な規模で発展していった。沖電気での指名解雇の半年後、大分の佐伯造船では、やはり大量の指名解雇が強行された。背景資本の石川島播磨重工業への抗議のために三人のオルグ団が上京したとき、沖電気争議団員は東京の地域共闘と一緒に朝ビラまき、オルグ、デモに参加してたたかいを共にした。企業ワタを越えて労働者たちがつながる姿は、佐伯造船の争議団員たちに運動をどうつくっていくかを教えただろう。大分では、県労評が率先して沖電気争議の支援決議をして、後の全国的な支援への契機となっていった。

相原たちが歩いてまわった東京港区には、沖電気本社と東京工場があった。

指名解雇をうけた七一名が争議を始めたとき、地域の労働組合にたいして、沖電気労組から、「争議はすでに終結している、したがって争議団の行動にはかわりをもたないでほしい」という主旨の文書が配布されていた。地区労では沖電気労組だけでなく、電機労連の日本電気労組、全電通などが沖電気争議を支援することによく反対しつづけていた。

門前払いで、話を聞いてもらえない組合も少なくなかった。争議団員たちはそれでも、一軒一軒を訪ね歩いて労働者たちと語り合った。

「ウチじゃこないだボーナス出なかつたんだよ。会社に抗議したら、沖電気じゃ首まで切つたんだ、ボーナスなんか出ないのはあたりまえだっていわれちゃったよ」

行く先ざきで耳にする話は、沖電気の大量解雇の影響が、地元の労働者たちのうえにまで及んでいることを示していた。

「沖電気みたいな大企業で首が切れるんなら、ウチだってできるんだとぬかしやがったぜ」
争議団員たちのたたかいは、七一人のためというワクを越えて、数多くの労働者たちがいだく不安や要求と結びつくものをもっていた。自分たちのために、あたりまえの権利として支援しようという行動を阻止する力にたいしては、しだいに反発の声がよくなっていた。

「指名解雇が出たっていうから組合で会社には抗議電報打とうとしたんだ。したら沖電気の労組から待ってくれといってきた。そんなバカな話があるかってんだ」

さまざまな妨害にもかかわらず、一年後には、沖電気争議を支援する労働組合は、港区内でも一〇〇労組を越えていた。八〇年四月、国労新橋支部、マスコミ関係労働組合、全国一般などの努力があって、沖電気争議支援港区労働組合連絡会議が結成された。

「沖の仲間への攻撃は、たんに沖の七一名だけへの攻撃にとどまるものではなく、同じ港区の地で働く労働者全体への攻撃であり、ひいては全国の労働者階級への挑戦であると私たちはうけとめております。港区で働く全労働者とすべての労働組合に私たちは共に、沖電気争議団を支援する労働組合連絡会に加り、支援共闘に積極的に参加することを訴えるものです」

結成アピールには、区内のたたかいをみんなの力でつくり出していこうという熱意があふれていた。地区労は、ついに争議終結に至るまで、組織としての支援はしないで終わった。そのなか

にあって、執行委員だった石川は、働く者の立場に立つ個人として沖電気争議を支援することを宣言し、争議団員たちへの力となりつづけた。争議団員たちが、自分の足で歩いてたたかいをひろげていったこと。労働者たちに会い、顔と顔を向かいあわせて語りあったことが、支援の輪をひろげていった。それは一人ひとりの思いをつなぎ、支えあう力となって、争議団員たちが八年四ヵ月を歩きつづけるよりどころとなっていた。

* 幅のひろい中央支援共闘会議づくり

七一人のただどしい訴えが、なめらかに口から出るころには、本人も、そして会社も予想しなかった大きさに、たたかいはひろがってきた。日比谷野外音楽堂の決起集会には、五〇〇〇人の仲間が詰めかけた。沖電気本社への抗議行動には、絶えず三〇〇人をこす仲間がきた。全国への行商活動は、日本中にたたかいを伝えるとともに、七一人の生活をぎりぎりのところで支えるまでに確立した。四年間の草の根からのたたかいを基礎に、相手に解決の決断を迫るたたかいの気運はもりあがってきた。より大きな運動の確立のために、軸となるべき当該の労組、単産の支援のないなかで、闘争指令部をつくりあげることが求められていた。

運動を組織的にすすめていくためにも、会社との話し合いの場で“社会的存在”として認めさ

せるためにも、幅ひろい支援を結集した中央支援共闘会議を結成する必要があった。だが、さまざまな立場、考え方の組織を集めて「幅ひろい」共闘をつくり出すという作業は、簡単にはすまなかった。

第一の問題は、リーダーをだれに頼むかだった。どのようなキャラクターの人か、どの組織の人か。リーダーによって、共闘会議の性格も決まってくる。もともと沖電気争議団のなかにはさまざまな考え方の仲間がいた。沖労組の公表した文書によれば、沖電気争議団は共産党系六一名（撤回させる会）、協会派二名、新左翼系八名となっていた。会社も統一したたかいはできないだろうという計算ずくで解雇を強行したのだろう。しかし、この七一人は、解雇の翌年「指名解雇撤回・職場復帰」という共通の要求を掲げて、沖電気争議団を結成した。そして要求実現のために、一緒にできる行動を一つずつ積み重ねてきた。

共闘会議のリーダーは、この七一名の争議団員を団結させ、なおかつ幅ひろく多くの人びとをつないでいけるだけの力量のある人物でなければならない。全民労協が発足し、労働組合運動が右傾化し再編されていくという困難な時代状況もあった。

最終的に白羽の矢がたったのは、全国一般・東京地方本部委員長で当時中央本部の委員長をしていた倉持米一だった。長年、争議をたたかって「争議の神様」といわれ、東京地本書記長の石井、東京地評オルグの市毛を始め多数の争議指導者を育てた人物だった。このころ、全国一般内でも全民労協参加問題をめぐって揺れていた。倉持は、その組織の最高責任者だ。それを理由



に、共闘会議のリーダーとしてはふさわしくない、反対の声も出されていた。

共闘会議議長への就任要請を受けていた倉持は、八二年の全国一般定期大会を前にして、一つの決断をした。彼は中央本部委員長を降りて、東京にもどるハラを固めた。三〇年間、全国一般で中小企業争議一筋に生きてきた自分の生きる場所は、たたかひの現場だという決意があった。

これによって、倉持の共闘会議議長就任は決定した。八五年二月、倉持は冲争議の解決を見ずに心筋梗塞で急逝する。そのときまでの二年余りの命を、彼は争議団のために心血を注いで共闘会議議長を勤めた。

共闘体制の要である事務局長には、新聞労働東京副委員長の立場で、報知印刷労組の井

川昌之が就任した。世界最大の新聞である読売資本から、組合つぶし、解雇攻撃を受けてたか
ったときの争議団長だった。報知印刷労組は全員の解雇撤回、職場復帰を勝ちとっただけでなく、
第二組合を解散させ、統一したたか労働組合の団結をつくりだしていた。共闘体制の主力部
隊として東京都職労と国労東京地本が共闘会議に参加することになった。

都職労は一三万人の組合員を擁する大組合であり、革新都政の実現など首都東京での組合運動
の要となっていた。大牟礼藤男委員長は、みずから役員就任を快諾した。国労東京地本の存在も、
共闘の幅をひろげていくためには不可欠のものだった。この二つの組合の参加によって、沖争議
共闘は、東京のたたかう労働組合を大きく結集する条件をつくりだした。

「共闘」の理念は、考え方や立場の違いを越えて、要求にもとづいて行動を統一していくこと。

「支援共闘会議」とは

争議団の力だけでは、闘いに勝利をすることはおろか、会社は交渉にすら応じようとはしない。そこ
で争議団は広く支援を求めて、労働組合をオルグすることとなる。会社への抗議や裁判傍聴、激励集会
に人が集まり、闘いが大きくなる。この支援の力を組織し、闘いを勝利させる作戦司令部となり、闘い
の担い手となり、解決交渉の当事者となるのが共闘会議である。共闘会議は争議になった組合員の所属
する当該労働組合を軸として上部団体である単産や、関係する単産・地区労などで構成される。構成団
体は単なる支援ではなく、その争議を勝利させる責任を負う。

沖電気争議では、軸となるべき沖電気労働組合、電機労連が支援せず、むしろ争議を妨害する側にた
った。したがって、共闘会議が結成されて、機能できるかどうかは沖電気争議最大の焦点となった。

要求を実現するために、一緒にできる行動を考えあうということにある。その意味からすれば、東京統一労組懇の果たした役割も、共闘会議をつくるうえでは重要なものがあつた。

統一労組懇は沖電気の指名解雇直後から支援を決め、具体的な取り組みをつづけていた。松原東京統一労組懇議長は年次総会の挨拶のなかで、ナショナルセンターをめざすものとして、爭議支援の重要性を指摘している。共闘会議結成には、当然しかるべき役割を果たす決意をしていただろう。

だが、支援を受ける側の爭議団の一部や、共闘会議参加を決意している単産・地区労から、統一労組懇の動きにたいして反対の声が出された。

爭議団の出していた要請は、統一労組懇としてではなく、加盟単産を役員として出してほしいというものだった。総評労働運動の右傾化にたいして、労働運動の再生・強化をめざし組織の発展を考えている統一労組懇にとっては容認できることではなかつただろう。統一労組懇の組織として参加することにこそ意義があると考えていたのだから。

しかし話し合いの末に、共闘会議副議長として、当時東京統一労組懇代表委員だった安田治雄建設一般全日自労東京都本部委員長が就任するという結論になった。戦後、企業整備・レッドバロージなどによる多数の失業者を組織してたたかってきた安田委員長の努力もあつただろう。爭議に勝つことを最優先させるために、「共闘」の理念はつらぬかれた。統一労組懇は、全国的に、爭議の終結まで惜しみない支援を送りつづけた。

共闘会議はようやく理想的なかたちで発足するかに思えた。だが、労働戦線の複雑な渦のなかで、争議団は共闘会議結成を目前にして、早くも最初の難問をかかえねばならないことになった。

* // 船は港を出た //

国労東京地本が沖電気争議団支援を決定するまでには、約四年の歳月を必要とした。国労各支部は地域に一定の役割を果たしていただけに、逆に沖電気労組の働きかけを受けた労組の反対によって、支援に動くことのできないところもあった。

もっとも、開かれた組合だった国労は、支部・分会という現場では、争議団オルグを受け入れている所が多かった。分会のたまり場のなかには、争議団や地域の労働組合員が出入りして、地域のセンター的な機能をもっている所もあった。

争議団員たちのまわっていた職場からは、東京地方本部の支援決定を求める声がしだいにつよくなっていった。

現場の労働者たちの力が、東京地本を動かすことになった。共闘会議の結成集会を東京地評か、全都反合共闘会議との共催にすることで、ついに国労東京地本の支援が決定することになった。

国労、都職労などが加盟し、東京でのナショナル・センターの役割を果たしてきた東京地評は、もう共催支援のハラを決めているはずだ。この時点で中山は、共闘会議が理想的なかたちで結成

されることを、ほぼ確信していた。

「いや困ったなあ……困ったよ、沖は……」

倉持と争議団代表の中山が共闘会議結成集会の共催申し入れにいったとき、東京地評幹部は小さな声でそうつぶやくだけだった。表情は苦渋に満ち、視線はそらしたままだった。

「東京中立労連との関係があるからねえ……地評はもちろんだが、東京総行動の母体の全都反合としての共催もむずかしいなあ……」

しほり出すような幹部の言葉を聞いて、中山はがく然とした。この場でOKさえ出れば、念願の共闘会議が発足するという段階だった。幹部の言葉は、完成を目前にしてすべてをふりだしにもどさせるものだった。もし共催の条件が満たせず国労が結成集会に参加しないとすれば、共闘会議は片肺飛行同然になる。四年の時間をかけて念願としていた、幅ひろい支援体制をつくることは不可能になってしまう。それどころか、共闘会議の結成自体が危機におちいることになるだろう。

「沖電気労組との関係は……」

中山は、あわてて事情を説明しようとした。なんとしてもここで幹部を説得しなければという思いが、自然に言葉をはき出させていた。

「中山君！ これ以上頼むことはない！」

そのとき、中山を制したのは、一緒に申し入れにきていた倉持だった。

「われわれは要請にきたのではない。申し入れにきたのだ」

倉持は中山の腕をつかんで、そういった。その顔は、怒りで赤く染まっていた。

倉持にしても、事態の深刻さが分からなかったわけではない。このまま下がれば、共闘会議結成が破綻することは十分承知していた。しかし、沖電気労組が加盟していた中立労連との関係を口にして幹部が首をかしげている以上、もういくら交渉しても事態は変化しないというのも事実だった。

右翼的労働組合からの巻き返しが、すでに始まっていたのだ。沖争議支援の共闘体制が、目前にあるようなかたちで発足すればどうなるか。その存在はたんに冲争議というレベルを越えて、今後の労働戦線の形成に大きな財産を残すことになるだろう。全民労協に向けて、労働組合の右翼的編成をねらう勢力にたいしては、いく手に立ちほだかる大きな障害になるに違いない。

それ以上に、倉持の心のなかにはいづくせない無念の思いがあったのかもしれない。東京地評は、かつては倉持自身がかわり育てた組織だった。

「受けないというのであれば、それはそれで結構。しかし、沖電気の争議は支援できません、首切りとはたたかえません、そういうことで、東京のナショナルセンターといえるのか！」

その言葉を残して、倉持は席を立った。

人と人をつなぎ、連帯を求めようとする力。その願いに水をさし、切っけいこうとする力。沖

電気争議をめぐって、あらゆるレベルで二つの力のぶつかり合いが始まっていた。

東京地評を出た倉持と中山は、井川と合流して国労東京地本副委員長の増田市応に会いた。

三人の足どりは重かった。東京地評と共催ができれば、国労の参加を再度求めるのは困難だろう。その後、どんな策が残されているのか。支援決定までに四年をかけた苦勞を知っているだけに、いく手は完全に阻まれたという思いがよかった。

「増田さん、困ったことになった……、東京地評はやらないといっています……」

中山は、重い気持で増田に事情を説明した。ほんとうの心のなかは、「それでも国労は参加と
いうことでやってくれるか」といいたい思いであふれていた。だが中山はどうしてもその言葉を
口にするのができずに、断られたいきさつだけを語った。

気落ちした三人が交互に話し終わると、増田はじっと考え込んだ。「それでは国労は参加でき
ない」。中山は、いまにもその言葉が増田の口から飛び出すように思えた。

三人の見守るなか、やがて増田は自分の迷いをもふりきるようにはっきりとした口調でいった。
「船は港を出たんだ。もう前へすすむだけだ。前へすすんで、目的地に着くだけだ」

増田はこのとき、共闘会議結成が失敗したら、副委員長を辞任する決意をしていた。

沖電気を解雇された労働者が最初に国労の増田に要請にきたとき、彼は争議団員が一つにまと

まったら支援に努力すると約束していた。いま、争議団も支援体制も一つにまとまって歩み出そうというときに、増田は四年前に一争議団員と交わした約束を忘れていなかった。松川事件からカネミ油症事件にいたるまで幅ひろく共闘を追求してきた増田は本気で冲電気争議のために働くとしていた。その決意が、糖尿病で目を傷め最悪の状態にあった体調を乗り越えさせて、共闘会議結成のための最後の危機を救った。

倉持は、増田の手を取るようになして喜んだ。何人もの人間がギリギリのところを出す大きな力が、自分たちのたたかいを支えているのだと中山は肌で感じていた。

八二年一月三〇日、東京体育館に八〇〇〇人を集めて、中央共闘会議結成集会は労働者のたたかう集会として画期的な成功をおさめた。共闘会議は、幅ひろい人びとを結集する理想的な私たちを発足をした。

七一人の、不眠不休といえるオルグの成果だった。地域ごとに、四年間一緒にたたかった仲間たちの成果だった。首切りは許さない。八〇〇〇人の一人ひとり、この決意に満ちていた。日本フィルのメンバーによる伴奏で、「インターナショナル」が合唱された。感激の涙を流したのは、争議団、家族ばかりではなかった。参加した八〇〇〇人のすべてに、自分たちのたたかいのトリデをつくったという、大きな確信が生まれていた。

2 生活を支えた力

* ヨコヤリ——押しよせる生活への不安

指名解雇された直後は、莫大なカンパが寄せられた。半年くらいの間は、雇用保険がおりていた。その後何年にもわたって、争議団財政の最大の柱となってきたのは、オルグも兼ねた全国行商だった。争議団員たちは何組にも分かれて、夏と冬に全国を走りまわった。

「春には沖電気の鮭一番、夏には沖のソーメンに麦茶、秋にはプラモデルで遊び、来年のカレンダーを見る。冬には沖の落花生を食い、タコあげをする。一年はこうして沖争議とともに過ぎるんです」

ある労組の委員長が争議団員の結婚式でそう挨拶するほど、行商は全国の人びとに受け入れられていた。

電機労連幹部、沖電気労組委員長、北海道中立労連議長がそろって北海道労協に申し入れをおこなってきたのは、中央支援共闘会議が発足して三カ月ほどたったときだった。

「……指名解雇を受けた人たちには臨時大会で闘争継続が不可能であり、人員整理を認めざるをえない機関決定した以上、その後の行動は個人としてのものであり、沖電労組としてはかかわりをもたないことをたがいに確認し今日にいたっております……」

北海道労協にとって、北海道中立労連は春闘、選挙闘争を通じてもっとも親密な友好団体だった。沖電気争議団は、すでに傘下の組合を行商でまわっていたが、直接的な関係は北海道労協との間にはなかった。

北海道労協は中立労連からの文書を添えて、申し入れがあったことを加盟の単産、地区労にたいて通達した。同時に沖電気争議団にたいしては、以後オルグを受け入れないという主旨の連

「GYOSYO」とは

解雇撤回を求める闘いで最も大変なことは、何といっても生活をどのように支えるかである。アルバイト、行商、カンパ、守る会の会費、などが主なものである。

沖電気争議団では、行商による収入が五〇%以上を占めた。夏と秋の二度花火やカレンダーを持って全国の労働組合・民主団体を回る。単なる物売りではない。争議の経過報告をして、署名を集めたり、行動への参加を合わせて、お願いする。ほかの財政活動に比べ、闘いと財政確立を一体のものとして取り組むことができる。北海道の郵便局の労働者が首を切られた労働者のために、争議団から九州ラーメンを買い、鹿児島トラックの運転手が花火を買って子供と楽しむ。生きた連帯を作り出す闘いである。沖電気争議では、七一人の大手帯を支えるために全国の隅々までまわりつくし、七〇〇〇団体の輪を作り出した。

絡をしてきた。

沖電気争議団にとっては、衝撃的な出来事だった。争議団財政の柱である全国行商のうちでも、もっとも売り上げが大きく、一〇〇〇万円以上を占めていたのが北海道だった。道労協は、北海道においては強力な力と、傘下団体にたいする影響力を持っていた。その道労協の意向に反して行商、オルグにまわったとしても、どれほどの組合が受け入れてくれるだろうか。

そればかりではなかった。ひとたび北海道で締め出しという事態になれば、動きはいずれ青森以下全国にひろがるだろう。そうなったとき、争議団員の生活は、せっかくつくりあげた支援の体制はどうなるのか。

中山はすぐに、北海道にいる支援者に連絡をとった。だが、反応は思ったより悪かった。一度機関決定がされてしまった以上、それを動かすのはまず無理だろうという話だった。道はふたたび、閉ざされようとしていた。

「沖労組の樋口委員長とは古いつきあいなんですよ。指名解雇が出たっていうから心配していたんだけど、なにもいってこないうちに終わってしまったらしいね。君たちはいまだどうしているんですか」

中山と井川の二人が訪ねたとき、総評組織局長の蛭谷ははいねいにそういった。

北海道の支援者の話では、争議団員たちにとって残された道は、総評から指示を出してもらう

ことだけだった。しかしどう考えても現実的な話ではない。思いあまった中山たちは、かつて自分たちと同じ指名解雇を受けた三井三池闘争の指導者の一人ということにすがって、蛭谷を訪ねたのだった。

蛭谷は何度もうなずきながら、中山たちの話を真剣に聞いてくれた。北海道で起こった事情を説明すると、すぐに机の上の電話を取り上げて、北海道労協と話し始めた。

電話で話をしている蛭谷の背中を、中山は祈るような思いで見つめていた。

* 重なりあう二つの時代

一九六〇年に三井三池炭鉱争議が起きたとき、炭労の労働者たちはスクラムを組んで資本とたたかった。当時まだ一八歳だった中山は、六〇年安保闘争の最前線に立つ力づよい労働者のヘルメット姿に、胸を躍らせて感動していた。そのとき、総評・炭労の現地責任者の一人で、自分自身ヘルメットをかぶってたたかった本人が蛭谷だった、中山にとってみれば、蛭谷は若き日の偶像のような人間だった。その人が目の前で、自分たちのために力をつくしてくれていることに、中山は感激し、賭けたい思いすらいだいていた。

炭労にいた蛭谷は、三井三池以後も長い間多くの争議にかかわってきた。

かつて日本が国をあげてエネルギー政策を転換していったとき、戦後の日本と経済成長を支え

てきた石炭労働者たちのうえに、考えられないような合理化が起こっていった。

戦後から五〇年代半ばまでは、政府はまだ国内資源中心のエネルギー確保をめざしていた。五〇年代後半になると、原油価格の低下、大型タンカーの登場による輸送コスト低下などから、無尽蔵で廉価に輸入される石油が主役に登場した。火力発電の燃料がほとんど石油に変わっていったように、あらゆる産業のエネルギーが石油に転換されていった。

「できる限り低廉な価格で供給することが必要であるので、経済性を中心とした合理的な供給構成を確立する」

六〇年に、経済審議会エネルギー部会は、石油供給体制確立をめざす報告を出していた。

エネルギー政策の転換のなかで、炭鉱は相次いで閉鎖され、石炭労働者たちは波にさらわれるように職場を奪われていった。報告の出た年に起こった三井三池炭鉱争議の、渦中でたたかっていた人間が虻谷だったのだ。

戦後日本の労働運動がもっとも高揚した時期にあって、虻谷たちがどれほど困難なたたかいをしてきたことか。指名解雇、暴力、金銭による分裂工作……。あらゆる卑劣な手段が、労働運動の戦線を襲った。労働者たちは、団結してたたかっていた。だが、どんなにたたかいても、ついに歴史の地盤が大きく変化をしていくなかに、だれもが飲み込まれていかざるをえなかった。その労働者たちの無念さを、働く者たちの悔しさを、虻谷はきつと心のなかに抱えつづけていたことであろう。

あるいはこのとき、蛭谷は、かつて「エネルギー革命」という時代の波に襲われた自分たちと同じ姿を、「情報革命」という現代の変革にさらされていいる冲争議団員たち電機労働者の姿に見ていたかもしれない。

半年前、北海道夕張炭鉱では大規模な落盤事故が起きていた。坑内に取り残された労働者の生死が確認できないまま、資本は二次災害を防ぐために炭鉱に水を注ごうとした。現場労働者も世論も、反対の声を大きくするなかで、炭労は資本の方針に従う決定をしていた。まだ生きていいる労働者がいるかもしれない坑内に水を注ぐことを、労働組合が認めた。

かつて蛭谷のたたかった炭労も、そこまで変わってしまった。蛭谷の背中を見つめながら、中山はそのことを思っていた。

私のひとこと

* 沖電気のオルグたちはわが家の季節鳥

沖電気争議団の地方オルグとわが家とのつきあいが始まったのが何時頃からだったかほとんど覚えていない。

ある日、妻が職場（吉田共同法律事務所）から「今晚沖電気の人を連れて帰るから早く帰ってきて」と電話をかけてきて八島さんと中野さんに会ったのが最初のような気がするのだが。

以来年に二度、相当に乗りこなして風格のついたワゴン車で現れる沖電気のオルグたちは、わが家にとって、ひとつの季節を迎えるたのしみになっている。

労働者の心をどうつかむか。労働戦線の右翼再編に抗して革新的潮流をどう前進させていくか。そこで自分はどういう位置に在るのか。

“生きがいの根本”にもふれる思いであの夜を思い出しながら、次に会える日を心待ちにしている。

（大分・大内明）

（八五年二月一日付）



『生きた人間を、見殺しにする石炭資本。オレたちの職を奪って街頭に放りだした電機資本。資本の非道さとたたかうってことは、いつの時代も同じ命がけのもんなんだ……』

たとえどのように時代が変わっても、労働運動がしなければならぬこと、守らなければならぬものは同じようにあるはずだった。見捨てられる労働者のために、解雇された労働者のために、労働組合はなにをしなければいけないのか。

中山は最後の望みを託しながら、電話を取った蛭谷の心のなかに思いをめぐらしていた。

「とにかく、首を切られた労働者を助けるということなんだよ。せめて物品販売だけでも取り組んでやってくれないか……」

電話は長びいた。蛭谷は静かな口調で話しつづけた。中山たちは、息を飲んで成り行き

を見守っていた。

しかし、蛭谷の努力にもかかわらず、事態はなに一つ好転しなかった。北海道労協は、「機関の決定」をくりかえすばかりだった。共闘会議と争議団の代表が北海道へいくといっているので、話を聞いてやってほしいという申し入れにも、くる必要がないというのが唯一の返事だった。

二人は気落ちして総評会館を出た。蛭谷は自分の出身の九州に電話を入れて、沖電気争議団支援を依頼してくれた。中山も井川も感激した。だが、北海道にかんしてはなにも解決してはいなかった。中山は、直接会って話ができればと感じていた。

「よし中山君。こうなったら北海道へいこう。それ以外にもう方法はない」

期せずして、井川が叫んだ。中山はうなずいた。二人はその足で、羽田から北海道へ飛んだ。中山の心のなかには、なんとしても北海道労協を説得しなければならないという決意が宿っていた。

* 理解をしめした人びと

五月連休明けの北海道は、まだ寒かった。二人は半袖シャツで、身をふるわせた。

自然の寒さ以上に、北海道労協幹部の態度はきびしかった。

「来るなどいったのにどうしてきたのですか。もう聞いてもしょうがない。蛭谷さんにいった

はずだ」

入り口のところで、幹部はいい捨てた。

ここまできて話を聞いてもらえなければ、すべては無駄に終わる。中山はとりつくしまもないような幹部にねばりづよく食い下がった。

「どうしても事情を聞いてほしいんです。なんとか、話だけでも聞いて下さい」

すでに東京から目の前にきてしまっているというのは、なんともつよみだった。幹部はしぶしぶながら、二人を事務所のなかほどにある応接セットに通した。

「沖電気がいかに残酷に、私たち一五〇〇人の首を切ったかを聞いて下さい。妊娠中の女性が、長時間会議室に一人で座らされて、退職を強要されたんです。共働きの夫婦が、二人ともども首にされたんです。沖電気は解雇のあとで、史上最高の利益を上げて大量の労働者を新規採用しているんです」

中山は、必死でしゃべりつづけた。幹部は向かいのソファにかけ、足を組んでそっぽを向いていた。しかし中山の話は、人間として無視できることではないはずだった。事務所で働いている一〇人ほどの目が、しだいに中山たちのうえに注がれるようになった。

「東京では、国労や都職労も加わって、争議団員を守るために共闘会議ができていますよ」中山の落としたことは、井川が補足した。部屋の本真の中で大声でしゃべる二人の話に、やがて机に向かっていた事務員たちの手が止まった。全員が成り行きを注目していた。

みんなの目がある以上、幹部もそうそう冷酷な仕打ちはできないだろう。味方を得た思いで、中山は本題に入ってしまった。

「沖電気労組は、会社の合理化提案にたいして、白紙撤回を求めて一〇波・三八時間のストライキでたたかったんです」

労組は、二度目のスト権が成立せず、やむなく条件闘争に移行した。争議団はそのたたかいを引き継いでいるのであって、けっして中立労連や電機労連と対立しているわけではない。沖電気労組を誹謗したりもしていない。争議団員は、いまでも組合員だと思っているし、組合の強化のためにたたかっているだけだ。

「いまたたかっている七一人は、沖労組の指示にしたがって、最後まで希望退職強要に応じなかった労働者たちです。指名解雇反対の旗は、沖労組の掲げていた旗なんです」

中山の話に、幹部は視線を落としてため息をついた。中立労連や沖電気労組が、妨害をする根拠はないはずだった。

やがて幹部は、小さな声でポツリといった。

「あなた方の話も聞いてから決めればよかったかもしれない……」

部屋のかなかに、ホッと息をつく空気が流れた。幹部の態度が変わった。二人はさらに、北海道の労働者と労働組合から、争議団がどれほど熱心に支援してもらっているかを話した。

いままで東京争議団の芝信用金庫従組や細川活版所労組が切り拓いたルートを受け継ぎ、冲争

議団は、すでに道内全域、中小都市まで支えてもらおう関係をつくっていた。道労協に所属する組合がそれだけ争議団を支えているという事実は、幹部にもうれい話だったに違いない。

幹部の表情が、ようやく和らいだ。

「北海道は、炭鉱などずいぶん争議をたたかってきましたからねえ。労働組合が首切りとたたかえないんではね……」

中山たちは、ついに目的を達した。最終的には、機関決定をくつがえしてオルグの受け入れ要請を下してもらおうことはできなかった。しかし幹部は争議団に理解を示し、最後にこう付け加えてくれた。

「みなさんのオルグを受けた地域からは道労協に、今回はどうするのかを問い合わせてくるでしょう。そのときには、うちのオルグがきちんと説明してくれると思いますよ」

文書は出なかったが、以後も、四人二組の争議団員は、北海道をくまなくまわった。道労協は以後、争議終結まで、年二回のオルグを受け入れつつづけてくれた。全国一斉に「背景資本」の富士銀行支店への抗議行動をしたときには、道内五カ所の支店への取り組みをおこなってくれた。旭川には一七〇人が集まり、札幌では道労協代表が連帯の挨拶をおこなった。

総評の蛸谷の努力があった。道労協幹部の理解があった。そしてなによりも、首を切られた労働者を守るために、カレンダーや花火を買いつづけてくれた人びとがいて、その人たちと連帯を結び合えた争議団の実績があった。

だれもが人間として、自分がほんとうにするべきことはなにかを考えてくれた。その一人ひとりの理解が、苦境におちいるたびに、争議団を救ってくれたのだった。

3 見えてきた争議の背景

* 背景団体への追及

共闘会議が結成されるとすぐに、富士銀行、労働省など、沖電気にかかわる背景団体に要請がおこなわれた。相手方の回答によって情勢分析をおこない。四年間のたたかいの到達点を明らかにするためだった。

富士銀行では、総務の担当者が応対した。

争議にいたる沖電気のやり方、争議の経過、七一人が団結し、それを支える体制ができたことを共闘会議の方から説明したのにたいして、担当者は丁重な言葉使いでこう答えた。

「沖電気とは、商売上の関係です。内部の問題、とりわけ労使関係についてはまったく関知する立場にございません。昔と違って銀行の立場は低下しています。沖電気のような大手のおやり

になることにたいして、ああだこうだ言えるような力はありません」

文書を読みあげるようにしてそこまで話して、担当者は「うちよりも、あそこじゃないの」と、応接室の隅にあった電話機を指さした。

「東京サミットの線引きが、きびしかったようですからね」

指名解雇の年におこなわれた先進国首脳会議の議題の一つが、電電公社購入資材にたいする門戸解放要求だった。アメリカからつよい圧力がかかっていた。

電電公社からファミリー企業への圧力が、沖電気の解雇につながった。だから自分たちに責任はない。それが相手の言葉の意味だった。

「銀行の力はそんなもんじゃないでしょう。日本は銀行の力でもっているようなもんですよ」
倉持が、ニヤニヤしながらドスのきいた低い声でいった。

「これからもわれわれは、争議終結まで富士銀行に解決を要請しつづけますよ」

富士銀行が筆頭にいる芙蓉グループは、金融資本中心で製造部門に弱いというのが一般的な評価だった。そのなかにあって沖電気は、情報機器、コンピュータのメーカーとして一定の役割をになっているのが事実だった。

「なにかいままでバラバラだったようですけども、まとまってやる体制ができたということですね」

富士銀行の担当者は、最後にそういった。共闘会議を、交渉の相手として認めたことを意味す

る言葉だった。

業界団体である通信機械工業会は、半分は電電公社の指導で成り立っていた。要請にたいして、公社から天下りした専務理事は、辛らつな個人的感想を述べた。

「沖電気には沖電気の都合があったのでしようが、それがうまくいったのかどうか。日本電気、富士通に追いつこうとしたのでしようが、逆に松下通信なんかの中堅どころに追いつかれそうだというのが実際のところじゃないですか」

共闘会議のメンバーが、「沖では技術者がどんどんやめてますよ」と水を向けると、彼はきっぱりとこういきった。

「電機で物を作って売るといふのは、技術がいいかどうかポイントですよ。それには技術人の蓄積が必要ですからねえ。指名解雇をしてギョツと締めようとしたらどうけど、そんな簡単なもんじゃないですよ」

技術畑出身らしい専務理事の言葉は、沖電気の姿を、客観的にいいあらわしたものだ。

ナショナルセンターか全国単産としか会わないといっていた労働省は、何度かの交渉の末に、ようやく労働組合課の課長補佐が応対に出た。

「とくに個別の争議でしかも係争中の問題については、お会いしないことになっています」といいながら、彼は沖電気争議の状況を詳細に記したメモをめくりながら、逆に争議団にたいして三つの質問をしてきた。

「沖電気とは、話し合いができていますか」

「裁判所の審理はどこまですすんでいますか」

「七一人はどういうことをしているのですか。とくに生活はどうなっているのですか」

たてつづけの質問に、あわてながら中山が答えた。最後の質問にたいして、「なにぶん大所帯です。からたいへんきびしい……」といいかかると、机の下で倉持に思いっきり足を踏まれた。相手にたいして弱味を見せるような言葉を口にしかけたためだ。

「のですが、全国的に大きな支援が生まれているので、全員元気にやっています……」

中山は、かろうじてその場を切り抜けた。

「痛かったか、中山君」

要請が終わって喫茶店に入ると、倉持はニヤリと笑っていった。共闘会議が交渉相手として認識されたという成果に、中山は足の痛みを忘れていた。

「敵はこっちをよく見ている」

倉持は笑っていた顔を引き締めて、ポツリと言った。労働省のしてきた三つの質問は、この段階での焦点になることばかりだったのだ。

* 大きな対抗関係

このとき会うことを拒否したのが通産省、電電公社、通信工業連盟だった。

通産省にたいしては、本庁前で数回ピラ宣伝をした。通産省前は東京国公や全通産省労働組合の活動の影響で、霞ヶ関に働くほとんどの労働者がピラを受け取る。効果はすぐにあらわれた。共闘会議の申し入れにたいして、機械情報産業局電子機器課の課長が会うことになった。本庁の課長が争議団と会うなどというのは、異例の措置であった。

「沖電気の指名解雇にたいして、補助金を出して援助している監督官庁として解決努力してほしい。被解雇者は、通産省が推進している産業の情報化にもなる産業構造の変化の犠牲であり、その責任をとってもらいたい」

それが争議団側の、このときの要請だった。

通産省は、電機・情報産業をリーディング・インダストリーとして位置づけ、莫大な補助金を出していた。大型コンピュータ開発だけでも、七一年からの五年間に、七〇〇億円の巨費を沖電気をふくむ六社に投入している。

超LSI開発のためには、七六年に大型プロジェクトを発足させた。その際通産省は、大手六社のなかから沖電気だけはずした。裁判所で沖電気は、「経営の悪化」の原因としてこの点を



あげていた。争議団側の反論は、「超LSIを心臓部に使う大型コンピュータについては、沖電気が自社開発をやめてアメリカのスペリールランド社と提携した結果である。業績の問題ではなく、経営戦略の選択の問題である」というものだった。

電子機器課長は、五社二グループ体制は通産省の指導ではなく業界の自主的対応であること、沖電気が五社体制からはずれたことは、沖電気の経営戦略であると述べて、自分の責任を逃れようとした。

また、この直前に日立製作所へ、通産省の補助金が不正に払われていると『読売新聞』が報じていた。

「あなたの所はこういうことをやっている。補助金とは無縁の中小企業、一般国民の立場に立って、通産行政というものを考えたこと

があるのか」

倉持は新聞の切り抜きを突きつけながら、いつもの太い声でじゅんじゅんと説いた。

「分かりました。通産省としてなにかできるかは分かりませんが、自分としては、沖電気の問題について勉強してみたいと思います」

課長は最後にそういって、共闘会議との話し合いをきりあげた。

この課長の言葉は、その後の争議の行く方に大きな意味を持つものだった。彼はこの時点で、半導体の問題などともからんで、沖電気争議の成り行きを黙って傍観しているわけにはいかない」と認識したのだろう。

その後、何回かの面談申し入れを拒否したとき、アメリカの半導体問題交渉代表にピラをまくという話に驚いて、通産省は交渉の場にあらわれた。国際的な緊張感のつよさを示すとともに、沖電気争議が突きつけた問題の鋭さを示す姿だった。

4 結集し始めた電機のなかま

——電機総行動へのねがい

* 共通する電機労働者の姿

七八年一二月。指名解雇のあった直後に東京水道橋の労音会館で、沖電気を解雇された仲間を支援する、電機労働者の集いが開かれていた。

△勝利を迎える その日をめざし

きずこう強く 首切りはねかえす

こぶしの防波堤▽

首を切られた直後、沖電気と同じ電機の職場である日本電気精機に働く中島修一が作詞作曲した「こぶしの防波堤」の歌が、会場一杯に響き渡った。

日本電気、松下電器、ソニーを初めとする都内の電機の職場に働く労働者たちが、会場からあふれるほどつめかけていた。



電気

職場に!
電気は不当解雇を撤回せよ!

富士電機は
解決と
のほにも
得には
ならぬ

電気は
名解雇を
せよ!

電気は
不当解雇を
撤回せよ!

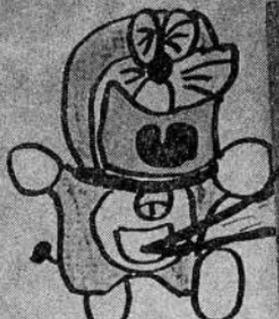
富士電機は不当解雇
撤回せよ!

富士電機は
不当解雇撤回せよ!
富士電機争議団支援

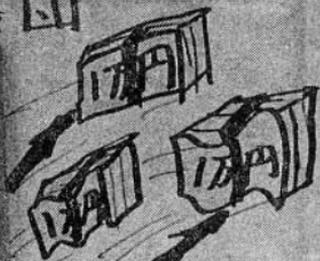
初の電機総行動。大手町で。

争議団
を
回せ
ない

団議争電気沖



お金がほしい!!



80 春闘
勝利

日立中研は
草野さんを
職場に戻せ!
日立中研草野守

ゆるみな!
沖電気の首切り

富士電機は
賃金差別撤
富士電機中研

「私は今日は司会をしていますが、沖の人と入れ替わって、私がゼッケンをつけて、後ろに並んでいてもまったくおかしくないというのがいまの職場の実態です」

壇上に並んだ沖電気争議団員を背にして、司会の松下電器に勤める長岡はいった。長岡の言葉は、沖電気の労働者を襲った「大合理化」の波が、けっして一企業だけの問題ではないことをあらわしていた。変わりゆく技術と経済環境のなかで、歪みはいつどのようなかたちで労働者のうえに押しつけられるか分からない。そのとき自分の立場はだれが守ってくれるのか。それは、この日参加したほとんどの電機労働者に共通した思いだったに違いない。

「もしいま、会社が首を切ってきたら、職場ではたたかえないでしょう。いまでは職場のなかに、労働組合とか、労働者の団結とかはほとんどなくされていってしまってるのです……」

首を切られた沖電気の労働者のために、同じ電機産業に働く労働者たちが集まった。会場を埋めた参加者のこころのなかには、いつ同じことが自分の身のうえにふりかかるかもしれないという不安と、だからこそ、いま、自分たちの手で、「防波堤」をつくってたたかわなければならぬという決意が渦巻いていたことだろう。

その一カ月後には、神奈川でも電機労働者による支援集会が開かれた。神奈川には、東芝、日立、日本電気、三菱電機など、日本を代表する大企業の工場が集中している。集会には、そのほとんどの工場から労働者たちがかけつけた。

「神奈川の電機でたたかう仲間がこれほどたくさん一堂に会したのは、初めてではないだろう

か」

集会の呼び掛け人を代表して挨拶にたったコロンビア労組元委員長の本田が興奮して語ったように、参加者たちはだれもが、沖電気の問題を自分のこととして考えていた。そう思わざるを得ない職場の状況が、どの労働者の日常にもあった。

「オレの工場でこの前、自殺者が出た」

「自分の職場では、一〇〇時間を越す残業が慢性化している」

「ウチでは、中高年を追い出しにかかっているんだ」

壇上で語られる話も、自分一人の問題ではなかった。参加者には、すべての発言にうなずかずにはいられないものがあつた。

電機の職場で働く労働者たちの共通の思いが、沖電気争議団を支援するとうかたちで集まつた。中小企業には、明日の生活がどうなるか分からないという不安があつた。大企業では、労働組合が働く者を守る役割を果たしていないという現実があつた。

同じ思いをいだいて電機の職場で働く労働者たちを、電機争議団支援総行動が結集していった。それは人と人をつないで、沖電気争議を勝利へと導いていく、力と道筋のあらわれでもあつた。

* 「大企業・独占に刺さるたたかいを……」

沖電気争議以前にも、電機の職場にはいくつかの争議があった。

電機の労働者も、電機労連と加盟組合も、かつては一九六〇年安保闘争でたたかった。日米支配層は、その後、「ケネディ・ライシャワー路線」と称される労働組合懐柔策を採ることになる。電機の職場は、そのもっとも大きな影響を受けたものの一つだった。電機の大企業のほとんどがアメリカ電機独占と結び付いていたこと。労働集約産業で、企業が労務管理に力を注いでいたためである。

さまざまな方法で、職場の労働組合を「企業主義」、「反共主義」においこんでいった。たたかう労働者を、労働組合執行部から排除する。それが一つの重要な手段だった。工場から本社へ、本社から地方支店へとめまぐるしく配置転換し、したがわなければ解雇するというやり方が相次いだ。

日立の藤田、日本電気の北島・栗橋。いずれのたたかいても、当該の労働組合の支援がない、困難で長期のたたかいだった。

守る会がつくられ、裁判闘争が柱としてたたかわれたが、地域へも、労働組合運動全体のたたかにもなかなかひろがらない争議だった。しかし、たたかうことで職場の労働者を励まし、合

理化に歯止めをかける重要な役割を果たした。だが争議の当事者は、なおいっそう広範な労働者の共同のたたかいたいといつも痛切に考えていた。

電機の経営者は、工業会などを通して電機産業に働く労働者全体を支配しようとしている。電機の労働者にたたかいの輪をひろげることなしに、争議の勝利は考えられなかった。

富士電機から解雇されていた田上三郎、親会社日立に会社を倒産させられて企業再建闘争をしていた全金カコストロボの小林雅之には、沖電気の争議は一つの契機となった。

沖電気指名解雇の衝撃のつよさは、沖電気という個別企業の枠を越えたものだった。電機労働者たちが集会で共通の思いを語ったように、沖電気の争議は産業全体にひろがる要素をはらんでいた。それぞれのたたかいを前進させるためにも、電機全体のたたかいのためにも、沖電気争議は重要なきっかけを与えようとしていた。

沖電気の被解雇者は、一年後に七一人で沖電気争議団を結成した。解雇撤回を求める労働組合運動としてたたかう立場を鮮明にし、東京争議団共闘に加盟した。

東京争議団共闘の副議長にはこの年、田上と中山がなった。事務局長には小林が、議長には渡辺清次郎がいた。渡辺は、細川活版所から四六人の仲間とともに指名解雇をうけていた。中央区労協の事務局長を務めるなど、長年にわたって地域レベルから運動にかかわり、解雇されるとすぐに議長になった。

沖電気争議団を結成するうえで、重要な役割を果たしたのは渡辺だった。四つのグループに別れて走りだした被解雇者を一つにまとめるために、渡辺は奔走した。

長い地域労働運動の経験から、争議が職場、地域全体の問題となって、労働者の統一を前進させる重要な役割を果たすのを見てきた。争議団は、そうしたたかひの蓄積された力と、それを前進させるみずからの力で勝利を重ねてきた。

沖電気争議を、ほんとうに幅ひろく労働者を結集させるたかひにできるかどうか。それが東京の争議団共闘、労働組合運動に投げかけられた課題だった。

渡辺にとっては、電機にかんして忘れられない記憶があった。議長になって最初に取り組んだのが日立にたいする抗議行動だった。

私のひとこと

* 自分自身のたかひ

(八六年四月二〇日付)

四月八日、電機総行動に仙台から参加し、そのハイライト、日比谷公園での中央総決起集会には、三五〇〇人の支援する仲間が各地から集まり、熱気ムンムンでした。

私はつい三ヶ月前まで、仙台の沖電気に勤務していましたが、指名解雇以前と以後の職場の雰囲気、あまりにも違うことをつぶさに感じ、その原因を仲間と共に考えていく中で、自分自身を大きく成長させてきました。長時間過密労働と低賃金、闘わない組合とストライキとは何かも知らない、新入社員、サービス残業、昼休みを使つてのサークル活動、本音を出し合えず盛り上がらない行事など。争議団が会社を追い詰め、勝利を目前にしていることは、争議団のみならず、全職場・全労働者にとって本当に感動的なことですし、職場復帰によつて、必ず職場の雰囲気が変わり、連帯が取り戻せることを確信しています。

(宮城・洞口邦子)

日立では、当時中央研究所で労組副委員長だった草野が、武蔵工場で田中、向坂、矢吹が、関連会社日立メデイコで平田が解雇されてたかっていた。カコストロボでは、四〇人が企業再建をたたかっていた。東京から乗り込んだ渡辺らは、日立の町中を数百人でデモ行進したのだった。行動は大成功に終わった。労務管理で締めつけられている労働者が、肩を叩きあって成功を喜んでいる姿が、いつまでも渡辺の印象に残っていた。

「金融資本を初めとして、大企業・独占に刺さるたたかいを」

労働争議にいただいた渡辺の一貫した戦略には、カコストロボの小林にも同じものがあつた。

大企業日立製作所に、自分たちの会社を倒産させられたというだけではない。小林は全金のなかで、長い間中小企業の労働運動をたたかってきた。

日本経済の二重構造のきびしい状況のなかで、大企業に比べてそれほど遜色のない賃金、労働条件をたたかいてきた。しかし、壁になるのはいつも親企業、大企業であり、そこにある労働組合のだらしなさだった。自分の争議にたいして、日立労連は妨害をすることはあつても、なにか一つ支援することはなかった。小林はまた、大企業の活動家といわれる労働者にたいしても、歯がゆい思いをいただいていた。

沖電気の争議をきっかけにして、大企業の活動家たちが自分の要求を持ち寄り、立ち上がってスクラムを組もうとしている。小林はそこに、働く者たちのロマンすら見ている。

雄弁家の小林は、よくこう口にしていた。

「昔から、横という字は嫌われてきた。横車を押す、横柄、横着、横しま、横恋慕……。しかしそれをほんとうに嫌ったのは、支配者なんだ。庶民が横に手をつなぐのを、恐れたからなんだ！」

* 企業のワクを越えて

東京千代田区には、大企業の本社、官庁の中核、裁判所などが集中している。全国でたたかっている争議団が、いくつも集中してくる地域になっていた。

千代田区労協は、それらの争議を包みこんで、区労協加盟労組の要求実現をめざすたたかいと合わせて、地域からの大きな行動を組織していた。それが七六年に始まった「千代田総行動」だった。春闘・秋闘のやま場に設定する千代田総行動は、全都的な「東京総行動」と合流して労働者の盛り上がりをつくり出していった。昼休みの時間におこなわれる丸の内中通りのデモは、最盛期には数千人の労働者を結集した。

このデモの出発地点の前に、富士電機本社が入っているビルがあった。

富士電機を配転命令拒否という口実で解雇された田上は、全国にある富士電機の工場へピラマキに出た。各地で支援する仲間をつくり、数年後には、全国一斉に一万枚のピラが富士電機の労

働者にわたるまでに組織をひろげた。

田上のピラはいつも、職場の労働者の自然な気持を伝えていた。上がらない給料、きつくなる仕事、頼りにならない組合の幹部……。働く者たちのもっている共通の思い、言葉で語ることによって、田上は何人も労働者たちをつないでいきたいと考えていた。

その田上がさらに幅ひろい労働者たちの連帯を求めて、長野から単身上京し、富士電機本社のある千代田区の地域共闘に飛び込んだ。

「富士電機は、田上君を職場にもどせ！」

「東京総行動」とは

この行動は、総評、東京地評が主催し、各単産、地区労、争議団・争議組合が一体となって反合同争全部代表者会議（全部反合）で意志統一をして組織される。行動内容は争議責任追及を中心とする銀行などへの大衆的抗議行動、昼休みデモ、夜には総決起集会を行う。一九七二年六月に第一回がおこなわれ、その後春闘、秋闘などの労働者全体の要求闘争と一体となって発展をし、七五年四月の総行動には、白昼の日比谷野外音楽堂とその周辺に三万人が結集した。争議団は自らの闘いが中心に据えられていることもあり、この運動の担い手となった。

沖電気争議は総評などとの関係で正式な単独の形では、行動が入らなかったが、富士銀行をメインバンクとする他の争議団との共同行動などのかたちで行動が組まれるようになった。この東京総行動からは、千代田などの地域総行動、マスコミ共闘などの単産総行動が分岐し、発展した。現在では、統一労働懇を軸とする新たな総行動も発展している。



初めて千代田総行動に参加した田上を、一〇〇〇人を越える労働者のシュプレヒコールが包んだ。本社のビルに向かって、何度も何度も大きな声が、自分につながるデモの隊列から湧き起こった。プラスチックバンドを先頭に、一人ひとりが要求をプラカードやゼッケンに示していた。

並立する巨大ビルの窓々からは、昼休みで仕事の手を休めたサラリーマンたちが見下ろしていた。日本の経済の中枢で、いま、自分のたたかいが労働者たちの熱い連帯に包まれて支援されている。田上はこのときの、体の震えるような感激を、いつまでも覚えていた。

この連帯に応えよう。この連帯のなかで、自分のたたかいを勝利させよう。決意した田上は、松本に妻と娘を残して、日暮里に部屋を借りた。東京の地域共闘の拡大に、自分の

もつ全力を注いだ。

のちに、田上は裁判で、解雇無効・職場復帰という完全な勝利をした。しかし、会社は田上を職場にもどすことを拒否しつづけていた。

富士電機の職場でも、千代田の地域共闘でも、裁判でも、たたかいはすすんだかに思われたが、なおいく手には厚い壁が立ちふさがっていた。この壁をどう突破するのか。どうやって、突破できるだけの力を集めればいいのか。

沖電気の指名解雇と、電機の職場に与えた衝撃。それがこのときの田上に、一つの新しい可能性を与えていた。

労働者たちは、集まり始めていた。同じ電機の職場で働く連帯で、横につながり始めていた。沖電気争議を支援する、その行動を中心にして結びつきだした労働者たちが、企業の枠を越えて、新しいたたかいの力をつくり始めようとしていた。

* 沖を契機に電機総行動へ

八〇年四月二二日、第一回電機関連争議団支援総行動が実現した。

この日の昼休みには、富士電機本社のあるビルの前から、中通りを日立本社ビル、沖電気の背景資本Ⅱ富士銀行に向けてデモ行進がおこなわれた。電機の労働者三〇〇名、地域の支援労働者

二〇〇名が隊列をつくった。

「各争議企業に抗議行動、解雇撤回の要請行動をおこなうなかで、とくに感じたことは、対応する企業側にも、企業体質がハッキリあらわれていたことです。受付段階で代表団を拒否した日立の態度には、解雇したことへの怒りとともに、社会的ルールをも無視する応接には重ね重ね腹が立った。この怒りを源に、さらに職場のなかにこの怒りをひろげ、各争議団の一日も早い解決のために頑張りたいと思います」

行動に参加した日本電気の女子労働者は、同じ電機産業に働く労働者たちが、初めて一つの行動にまとまった感激を、そう語っていた。

デモ出発に際して、千代田区労協副議長の下重が挨拶をした。

「自分は長い間、この丸の内地域共闘の責任者をやってきました。たくさんの争議団が、丸の内にひしめく独占大企業を相手にたたかってきました。ほとんどの争議団は、その大企業の労働組合の支援が得られない、きびしいたたかいを余儀なくされてきたのです。しかし今日、この中通りの両側に林立する富士電機、三菱電機、日立製作所、そして沖電気の職場の仲間が、争議団支援のために立ち上がったのです」

電機の大企業労働者は長い間、労働者としての自分の要求を運動する手だてをもたなかった。その労働者たちが、手をたずさえて争議団支援行動に参加し、仲間とスクラムを組み、企業にシユプレヒコールを突きつけた。労働者たちは、連帯の道を模索していた。

「いままで私たちに、手の届かない存在であった大企業の職場。そのたたかう仲間たちと、千代田の地域共闘が手を取りあえた。この意義は、双方にとってたいへん大きなものがあるのです！」

下重は、新たに生まれた労働者たちの連帯を確認して挨拶をしめくくった。

電機総行動と前後して、全国電機労働者交流会が熱海でおこなわれた。

交流会では、電機の経営側の動き、合理化のあらわれ、それにたいする職場、労働組合の反応などがそれぞれの職場から報告された。だが出される話は、当初は被害届け的なもの、泣き言めいたものが多かった。会社のやり方がどれほどひどいか。組合がどれほどだめになっているか。そんな話が、日頃のうっぶんを晴らすかのようにあふれ出した。

私のひとこと

* 胸が熱くなって

「富士銀行と沖電気は、解決の方向で責任ある回答を示せ」——総決起集会での司会者の言葉。参加者みんなの気持ちでした。

六年間の闘いは、何としても、職場に戻るのだと一致団結した闘いであって、労働者として、人間として、あたたかい結び付きをそのまわりにひき起こしている闘いなんだと感じました。

「裁判闘争も大きく前進しています」と、報告した弁護士さん。壇上に並んだ争議団の人たちと子どもたち……。

人間の連帯がつくる闘い——。

帰りのバスで八島さんの「漫画パンフ」を読み、また感動。

いっぱい熱いものをもらった一日でした。

(群馬・八木啓子)

(八五年一月一日付)

電機総行動で、自分たちの力と連帯を確認した労働者たちは、しだいに変わっていった。嘆いてばかりいても、しようがない。文句を言っているだけでは、なにも変わってはいかない。自分たちに、できることはなんなのか。力を合わせて、しなければならぬのはどういうことか。

一人が小さな突破口をつくれれば、だれかがあとを継いで、さらに大きな道を拓くだろう。

電機の労働者たちは、生きた行動を求めだした。その思いは行動することで確信となって、電機総行動をさらに発展させていった。

第二回は、電機工業会へ争議解決と長時間労働是正の申し入れに行った。三回目には、労働省に申し入れをおこない、通産省兵器工業会へと視野はひろがっていった。

日本電気の女子労働者のいったように、行動でさまざまな感動を体験した労働者たちは、そのままの気持を各自の職場にもちかえり、仲間たちに伝えていった。

沖電気争議を契機にして始まった電機総行動は、争議という状況を越えて、電機の職場のなかに労働者のたたかひの精神をひろめていった。電機労働者たちは、それぞれの要求を持ち、多くの労働者たちとともに解決の可能性を考えていく手段を手にしたのであった。

要求の主人公は、労働者だ。たたかひの主人公も、労働者だ。その要求に固執して、あらゆる手だてを講じて実現のために工夫する、電機労働者の典型的なたたかひが、やがて沖電気の職場にあらわれてくることになる。

5 和解——争議団の団結

* 裁判所を舞台にした解決への攻防

八三年一二月一四日、東京地方裁判所民事一一部の法廷には、いつものように原告側傍聴人があふれていた。正面裁判長席に向かって左側の原告席には、三〇人からの弁護士が座りきれないほど並んでいた。通常、弁護人の席は四つしか用意されていない。押し出された七名の原告は、傍聴席で見守っていた。傍聴に参加した仲間に席をゆずって法廷を出ている争議団員や、入りきれない傍聴者が廊下にあふれていた。会社側の席には、弁護人が二人、争議担当課長ら二人が並んでいただけだった。

この日、傍聴席最前列には倉持、井川が並び、隣には東京地評争対部長市毛良昌が座っていた。会社側三人の総論証人が終わった。原告側は、会社側証人の打ち切りを要求していた。五年をかけても、会社側は解雇理由を立証できていなかった。たんなる引き延ばしに証人を呼ぶことが、はっきりしていたからだだった。

前日、共闘会議は倉持の提起をめぐって議論が沸騰した。労働省、通産省などの交渉内容から、倉持は和解交渉を検討する時期にきたと提起した。

弁護団も共闘会議のメンバーも、倉持の意見に戸惑った。会社が交渉を考えるとどこまで、こちら側のゆさぶりは効いているのか。運動は、交渉するところまで達しているのか。

「根拠があるわけではない。裁判所がまとめるとすれば、和解以外にはないと思う。いまやその時期にきていると思うのだ」

争議団員のだれもが、五年間のたたかいで会社を追い込んできたと実感していた。その感触のなかで、解決への明かりを求めているのも事実だった。この日傍聴席に座ったメンバーたちは、息を飲んで渡辺裁判長の最後の言葉を注目していた。

「次回に、今後のすすめ方について提案をいたします」

裁判長は、そう述べて閉廷を宣言した。

八四年二月一七日、倉持のいったとおり、裁判所は和解を提起してきた。審理は引きつづきおこない、並行して解決のための和解交渉を双方に提起するというものだった。

「倉持さんの見通しどおり、事態はすすんできました」

二月六日に裁判所の出方を知った中山は、電話で倉持に報告した。だが倉持は、自分の目で和解提起を見ることはなかった。直前の八日、心筋梗塞で急逝していたのだ。

「中山君、問題はこれからだよ。これから先は君たちの団結で決まるのだから」

電話口の向こうでつよい口調でいったのが、倉持が争議団に残した最後の言葉だった。

和解提起をめぐるって、争議団のなかでは議論が噴出した。

「交渉で、全員の職場復帰が勝ちとれるのか」

「裁判所が提起してきたねらいはどこにあるんだ」

こちら側から裁判所に、提起を頼みにいったのではないかと疑いまで出された。倉持の予想したとおり、争議団内部の団結を深めていくことが、大きな課題となった。

運動の到達点の認識についても、争議団でズレが出た。和解となれば、妥協も必要かもしれない。そういう内容をもった和解提起には、応じられないという者もいた。

最終的に、審理を並行するという裁判所の案が、仲裁の役目を果たした。同時に審理をすすめていくのなら、裁判で決着をつけるという道にも、支障が出るわけではない。

和解については、次のような確認をして争議団の議論が集約された。

「指名解雇後、八王子工場で解雇された田中君もふくめて、七二人全員の職場復帰を前提に交渉に応ずることとする」

第一回の和解交渉は、五月に開始された。会社側は、金銭による解決を考えている態度を示した。争議団側は、職場復帰のない解決はあり得ないことを、裁判所に伝えていた。間に立った裁判所は、原告側の考えを検討するよう会社に指示した。

以後、和解交渉はほぼ二カ月に一度のペースでおこなわれていく。だが、裁判所にたいして、会社側はいつまでたつても職場復帰をふくむ回答に同意する姿勢を示そうとしなかった。きびしい経営で余裕がないと言いわけをした。

「新たに人を採用してはいませんか」

「この人たちが不始末をして解雇されたのではない。いまの会社の繁栄も、これらの人たちの犠牲の上になつている」

裁判長は、交渉を進行させない会社側を批判した。それは五年間の審理で明らかになった、解雇にたいする会社の不当性追及そのものだった。

会社側の考えていた以上に、裁判所の対応はきびしかったのではないだろうか。沖電気は大量解雇の直後から、毎年五〇〇人を越える新入社員を採用しつづけてきた。審理のなかでも、沖電気的身勝手さは鮮明になってきていた。同時に、沖電気争議団を支援する声は全国的にひろがり、世論としても会社側を圧倒的に追いこんでいた。

一二月、第五回の交渉の席には、会社側から根岸人事部長が出席した。それでも会社は、態度を変えなかった。

和解交渉が始まって一〇カ月後の、翌年三月には、二回の交渉がもたれた。会社側は経営が苦しいなどの言い訳をたてに、職場復帰をふくむ解決に話が及ぶのを、極力避けようとしていた。

それは裁判の審理と同じ、時間かせぎの引き延ばし作戦だった。

だが、会社側の態度も限界にきていた。三月五日に、人事部長の急用を理由に回答を避けた会社側にたいし、同じ月にもう一度交渉を開いたところに、裁判所の姿勢があらわれていた。

会社は、窮地に追い込まれた。

事態は、思わぬところから急転した。年度替わりの裁判所の人事移動で、渡辺裁判長以下三人の裁判官が交替してしまったのだ。

裁判所での審理、和解交渉の経過は、もちろん新しい裁判官に引き継がれていく。しかし、直接証言を聞き、証拠を調べてきざぎざあげられた心証と、あとになって記録から裁判するのでは差があるのは歴然としている。労働事件の裁判長期化の大きな原因の一つが、この裁判官の異動にあった。

争議団員たちは、落胆した。

これまで一年近くにわたって、和解交渉がおこなわれてきた。その経過は明らかに、会社側に不利なものだった。あとは会社が、職場復帰をふくむ回答を出す以外に道はなかった。その時期は、もう目前に迫っているはずだった。

新任の裁判官たちが、これまでの経過をどう判断するのか。会社側がこのチャンスを、どのよう利用しようとするか。しかも新しい裁判長は、家庭裁判所所長からの転任で労働事件は初めての間だった。

争議団側のおそれたとおり、会社はこのわずかな間隙をぬって動いた。六月の第一〇回和解交渉で、会社はついに次のような解決案を文書で提出した。

「一、会社は昭和五三年一月二〇日付解雇を撤回し、原告等は同日付で退職する。七一人に對して各一〇〇〇万円を解決金として支払う

二、会社は原告等を一年間自宅待機の非常勤嘱託として採用する」

* 団結はどうなるか

和解案には、職場復帰は盛り込まれていなかった。交渉の経過を無視した不当な回答にたいして、争議団と共闘会議はただちに糾弾の声明を発表していた。

しかし、どのようなかたちにしる会社が自分たちの回答を出したということは、たたかいの一つの前進だった。

「一年以上、裁判所から職場復帰なしにこの争議は解決しないといわれながら、こうした回答を出してくる会社にはほんとうに腹がたつ。しかし同時に、初めて会社が解決の意志を明らかにしたこと、自分たちが六年間たたかってきたことに確信がもてました」

交渉の終わった裁判所の廊下で、中山は傍聴の支援者に率直な感想を語っている。

沖電気の社内に、会社回答は大きな影響を与えていた。

「これは会社が負けたということではありません。争議の解決とは、こういうものなのです。……」

会社は管理職にたいし、弁解めいた通達を出していた。

七八年の指名解雇は正しかった。あれがなければ、会社は成り立っていなかった。それが、以後の労務政策の出発点になってきた。その解雇を撤回し、約一〇億円の解決金を払う。社員の間で起こる会社への不信を、一時しのぎの対策で逃がれようとしたのだった。だが会社のやり方は、ほんとうに正しかったのだろうか。

新任の裁判官三人は、いままでの裁判記録を調べたうえで今後の進行を決めるとして、慎重な態度をとった。

夏が過ぎ、秋が本格的になった一〇月、裁

私のひとこと

* 沖電気争議は「恵まれた」争議?

闘いに触れた多くの人々が、考えさせられ、励まされ、働く者の団結によって、不安なく生きる日にくることを、まだ小さいにしても自信をもちはじめています。

「恵まれない」争議から、「恵まれた」ものへの見事な転換を、評論家風に、「弁証法」うんぬんで、かたずけるのは簡単ですが、そこまで、はりついて話を聞き、訴え、組織し、考え、体で理解し、それをくりかえし、同時に自分を高めてこられたみなさんの努力に、あらためて目をみはる思いがします。八年の歳月は、沖電気争議団の一人ひとり、立派な労働者に鍛え、強い精神をもった人間に成長させたのです。そのことに、謙虚であると同時に、自信をもってほしいのです。すばらしい無形の財産が身についたのです。

(弁護士・小島成一)

(八七年一月一日付)



判所は和解の解決案骨子を文書で出すことを表明した。

八五年一二月一二日、裁判所は和解交渉の出发点として、文書で基本案を提出した。

「一、被告は、原告七一名のうち、三五名を現実に復職させ、その余の原告は円満退職すること

二、被告は、原告に対し、和解金を支払うこと」

裁判所案にもとづいて解決交渉をすすめるべきなのかどうか。争議団、共闘会議は、年末から八六年始めにかけて会議をかさねた。

基本案は、かたくなに受け入れを拒否してきた沖電気に、職場復帰による解決を迫っていた。だがそれは争議団員をはじめ、誰もが願ってきた全員復帰ではなかった。

裁判所が文書で正規に提出してきた以上、

三五という数字が簡単に動くことも考えられなかった。それはいずれにしても、どちらかを有利に、片方を不利にすることだったからだ。この和解交渉を具体化した場合、三五人が職場復帰をあきらめなければならぬ可能性があった。総論論議だけでなく、六一人の一人ひとりがみずからの進退を迫られていた。

三五人では少ないという声が、圧倒的だった。だが一方で裁判所の独自に出してくる数字が、これほど多くなると思われていなかったのも事実だった。そこには、自分たちが七年間つづけてきたたかひの成果が感じられた。労働組合運動が右傾化しているきびしい状況のなかで、当該の労働組合の支援がない困難なたかひの、大きな成果と考えられた。

まだまだ、たかひをつづけて前進できる力も決意もあった。しかし、これ以上の内容がとれるというたかひな見通しは、当然、だれにも予想はできなかった。議論を重ねるなかで「職場復帰三五」という内容を、圧倒的に多くの当事者が勝利だと考えていた。一日も早く職場にもどる重要性も指摘された。職場で一人ひとりが仕事をするうえでも、会社のねらった、沖電気全労働者の団結破壊を回復させるたかひをすすめるためにも。

「全員がもどれるのならともかく、そうでないのなら、自分はかならずしも沖電気にもどらなくてもいいよ。たかひにきちんと、はじめがつけられるんならね」

会社の外に放り出されて、七年の歳月を歩んできた争議団員たちの考えは、変わっていた。

もちろん全員復帰という旗を掲げたい気持ちに、変化はなかった。しかし、団員たちは争議の七

年間に、いままで知らない世界を知った。数多くの人と出会った。たんに金を稼ぐというだけでなく、自分の生活を自分の手でつくり出し、自分の足で歩いていくことを知った。

もちろん、三五人というかぎられた人数に、自分はおりて他の人にもどってもらおうとする団員がいた。技術者のなかには、七年のブランクを懸念して、身を引くことを考える者もいた。生活まるごと共同してもまれた七年の歳月は、一人ひとりの生活のすみずみまでも、おたがいに熟知する関係をつくっていた。多くの団員は、職場にもどることも新しい道を歩み始めることも、積極的な自分の意志で選択していった。おそらく解雇された直後だったら、このようなかたちで意志統一をするのは不可能だったろう。仲間のきずなど、生活をつくりあげてきた七年の成果が、ここにあらわれていたとはいえないだろうか。

争議団は、解決に向けて交渉をすすめる決断をした。しかし会社は、交渉に同意したものの依然として職場復帰に反対した。三五人の職場復帰という裁判所案は、会社にとって、いっそうきびしいものだったのだろう。

* 争議の全面解決へ

— 復帰

八六年八月、争議団は沖電気の七〇〇人を越す管理職全員に手紙を送った。

△……思い起こせば、あの指名解雇は……これまで私たちが沖電気のなかで経験したことのない乱暴さで強行されました。みなさんも意に反した行動をとらざるをえない痛みや悩みもいろいろと経験されたことでしょう……。私たちは、いまこそ沖電気が争議の全面解決を判断すべきだと考えます。沖電気が先端技術産業の企業として発展していくためには争議の解決は欠かせないことだと思っております。この八年間、沖電気の企業イメージは大きく傷ついたので、「指名解雇の沖電気」の名は全国に広がっています。またこのような非常手段をテコにした労務管理は決して長続きするものではありませんし、上司の言うことには「イエスマン」として従いはしても創造的な技術力が育つことにはなりません。解雇後、多くの仲間が沖電気を去っていったことについてもいろいろお考えをお持ちのことと思います……。どうか、争議の現況と沖電気の今後のあるべき姿について充分ご賢察いただき、争議解決のために努力されるよう心からお願いたします▽

社内での管理職の心に、この手紙はどのような影響を与えただろうか。受け取り拒否でもどってきた手紙は、一通もなかった。会社に職場復帰を決断させるために、七年間に蓄積された力が総結集された。二月二一日の立川市民会館での一八〇〇人が集まった三多摩集會を皮切りにおこなわれた各地区集會が、いずれも一〇〇〇人規模の参加者を集めて成功した。四月には、全国の電機産業のたたかう労働者の参加で、電機総行動が一日行動をやりぬいた。

燃えないといわれた、八六年春闘の真っ只中に、沖電気は職場復帰を決意しろという、抗議の

声が鳴り響いた。

問題は、沖電気一企業だけのものではなくって、臨調の目玉として、国鉄と国労・国鉄労働者に攻撃が加えられ、民間にたいしても産業構造改善の名目で、至るところに合理化攻撃がかけられていた。沖電気の争議は、すべての労働者のたたかいを發展させる、スプリングボードの役割を果たすところまで成長していた。

八月、会社はついに関係者会議を開いて、三五人の受け入れを決断した。八月二六日の第一八回和解交渉で受け入れを回答した。

八五年六月に一〇億円の金銭解決案を出したとき、会社は「これは敗北ではない」という通達を社内に出した。指名解雇を「合理的」な政策と宣伝し、それをテコとして社内改革を断行してきた会社には、和解というのはそれほど恐ろしい、自分たちの足もとをすくうような出来事だったのだ。

いま、三五名が職場に復帰、一二億九〇〇〇万円の和解金を払うというかたちで、八年四カ月にわたった争議は決着した。この事実が、経営者をどれほどおののかせただろうか。

八七年六月三〇日、三五人は、東京、八王子、本庄、高崎の各事業所に、八年半ぶりに復帰していった。残りの三五人は、それぞれの新しい道を歩み始めた。

ほんとうは、争議団が管理職に送った手紙に書いたように、争議解決という事実は、会社の未来にとっても、喜ぶべき出来事に違いないのではないだろうか。

第Ⅲ部

企業社会への
“大波・小波”

1 大変化の「波」がおしよせるとき

* 「会社とともに生きる」?

七八年の合理化がおこなわれた直後、『日経産業新聞』は沖電気の将来を次のように予測していた。

「……荒療治は一応終わったものの、病状回復にまではなお第二、第三の手術は避けられない見通しであり、三宅社長の今後のメスさばきが注目される」(七八年二月二三日付)

争議団員たちが企業の外でたたかい、生活をつづけた八年四カ月の間に、沖電気という会社はどうなっていたのだろうか。

七八年一〇月一日に、労働組合にたいして合理化案が提出された。提案されたのは、首切りばかりではなかった。従業員二四〇〇人の働く品川事業所は、八〇年末までに完全に閉鎖されることになった。社員は品川から八王子に本庄に、遠くは、新潟あたりにまで配置転換された。そのなかには、幸運にも首を切られずにすみ、会社とともに生きていくことを決意していた労働者

もいたかもしれない。

社内への波紋は、小さくなかった。

「品川が閉鎖されるといっても、信じられなかった。話が具体化してくると転勤が決まった人とまだの人との間に溝が生まれたりで、かなり混乱した……」（『沖労新聞』七九年一月五日付）

『日経産業新聞』が指摘したように、その混乱も引きつづく社内変革の一部でしかなかった。その意味では、七八年の合理化も一つの予兆にすぎなかったのではないか。労働者たちは、一時の合理化には生き残った。しかしその後の企業のなかに、安住のときは訪れたのだろうか。

予兆はすでに、七三年の第一次オイル・ショックのころから見え始めていたのかもしれない。沖電気の社内では、クロスバー交換機から電子交換機へと主力が移りだした。女性労働者が主力になってみんなが一つのラインに集まって作業をしていた形態から、それぞれがバラバラに離れて位置し、紙テープを見ながら製品をチェックするような仕事に変わっていった。労働者たちが職場のなかで集まるといふ機会は、しだいに少なくなっていた。

当時の山本社長は、「ヒューマン経営」を会社の信条としていた。穏やかで堅実な社内の空気も、合理化を境に一変していった。『日経産業新聞』（八一年三月二〇日付）によれば、沖電気の労働生産性は七八年三月期から八〇年三月期までの二年間に、五七%上昇した。同じ時期に日本

電気の伸び率は二七%、富士通は二四%だった。合理化のショックが、いかに沖電気の労働者たちを生産に駆り立てたかが分かる。

技術や経済環境が変化するとき、企業はさまざまな手段を講じて戦略を転換し、生き残り（サバイバル）をはかろうとする。それは利益を追求し、永遠の存続をめざす企業にとって、当然の行動かもしれない。

しかし「企業の論理」は、変革のための歪みを働く者に押しつける。「企業社会」に生きる以上、だれもその危険から確実にまぬがれることはできない。

会社とともに生きていこう。首を切られなかった労働者の多くがそう思ったとしても、ほんとうの嵐は、その後の職場にこそ吹き荒れたのだった。

予兆のすぎた職場のなかを、働く者の人間らしさを失わせる嵐は、足早に吹きすぎていった。

* ある配転命令

板垣道明に配転命令がきたのは、新年度までにあと二週間ほどしかない三月の半ばだった。一五〇〇名が首を切られた合理化から、まだ四カ月しかすぎていなかった。

板垣は入社以来一六年間、調整技術者として働いてきた。オキスコープなど当時の先端主要製品の調整を担当し、ベテランとして自分の腕にも自信をもっていた。配転されたのは、一人だけ

隔離されたガラス張りのような部屋だった。ICの不良品を選び出すだけの仕事は、新入社員でもできる単純な仕事ばかりだった。

このときすでに、同僚の秋元英常は、解雇にかんする社長への公開質問状をビラにして配ったことから、課長直轄の閑職に就かされていた。

板垣も、秋元も、指名解雇をうけた何人かの仲間とともに、合理化以前から活動家として働いていた人間だった。会社の意のままにならない社員への見せしめなのか、あるいは、社内改革をさらにすすめていくためのスケープゴートだったのか。明らかに会社から生まれ、仕事をとりあげられた二人とは、仲間だった社員たちもしいに口をきかなくなっていた。

『くそっ、なんでオレがこんな仕事しなけりゃなんねえんだ。これが、一六年間働いてきた社員にたいするしうちか』

隔離部屋で単純な仕事を繰り返しながら、板垣は思った。技術者として、腕には自信があった。ずっと先端の製品を手がけてきていたし、係長さえ、板垣を手離したくないといって残念があった。その自分が、きずきあげてきた技術とは無関係の単調な仕事にまわされた。自分の能力が衰えてしまうことへの、焦りもあった。

板垣は、管理部長、製造部長、総務課長に抗議し、適正配置してほしいという意見を、申し入れ書にして、総務課長あてに内容証明郵便で送りつけた。

『こうなったら、首が飛んだっていい。こんな納得できない配転なんか、とことんたたかっ

てやれ』

板垣は、ともに沖電気で働いていた妻、てつ子を指名解雇されていた。配転された板垣とは口をきかないように、裏で管理職がいつてまわっていると耳に入った。追い打ちのような会社のやり方に、どうしてもがまんできないものがあつた。

それ以上に板垣が抱いたのは、こんなことを許せば、会社が思いどおりに全社員の管理をすめるようになってしまふのではないかという恐れだつた。

「経営の危機」を、会社は指名解雇という手段まで用いて乗り切つた。残された社員は、一生懸命働いて会社とともに生きていこうと決意したと同時に、さからえば今度は自分の首があぶないと恐れただらう。会社は社員の心理をたくみについて、社内改革をすすめていこうとしていた。板垣にとって納得できなかったのは、自分が仕事のうえではだれにも負けない働きをしているという自負があるからだつた。適性がないから仕事を替えるというならまだ分かる。気に入らなから仕事をとり上げるといふのでは、まるで、「恐怖政治」と同じではないか。納得のいく仕事をした。自分の持っている技術をみがいて労働者としての能力を発揮したい。そんな素朴な社員の思いは、会社の意向でわけもなく踏みじられることになる。こんなことが平気で横行するような職場では、社員はだれも仕事を手につかなくなつてしまふ。配転は、自分一人の問題ではないのか。

オレは配転を撤回させるまでたたかうぞ。板垣は、妻のてつ子や指名解雇された仲間と相談し

ながら、主張しつづけた。

労働者があぶない。みんなの考えは一致していた。しかし、どんな手段でどこまでたたかうかについては、意見が分かれた。争議団が結成されるまでには、あと半年の期間が必要だった。合理化から四カ月の時点では、指名解雇された者たちのたたかいかいもまだ手探りの状態だった。会社と争うよりも、いまは社内に支持者をひろげていく時期ではないのか。多くの仲間は、そう考えていた。

争議は、始まったばかりだった。どこまで多くの人の力と連帯を得られるか、まだまったく分からない段階だった。たとえ会社のやり方に納得がいけないとしても、耐え忍ばなければならぬ。そんな冬の季節だった。

「まあ、仕方のないことでしょ」

労働組合の担当者はいった。

「君にはこの仕事があっているんだよ」

会社の管理職はいった。

たたかうために人を結集するには、時間がなさすぎた。板垣は怒りの気持をカラまわりさせたが、月日だけが過ぎていってしまった。

ついになにもできないまま、四月一日はきた。板垣は、正式に配置転換されることになった。

会社は、全社員に管理をつよめ始めた。そして、予想通り、指名解雇をテコとした社内の体質

転換が押しすすめられていった。

* // 体質改善 // の始まり

合理化後の社内改革は、板垣たちの配置転換とときを同じくして始まった。七九年四月、沖電気にはSBU（戦略事業単位）と呼ばれる社内組織が導入された。

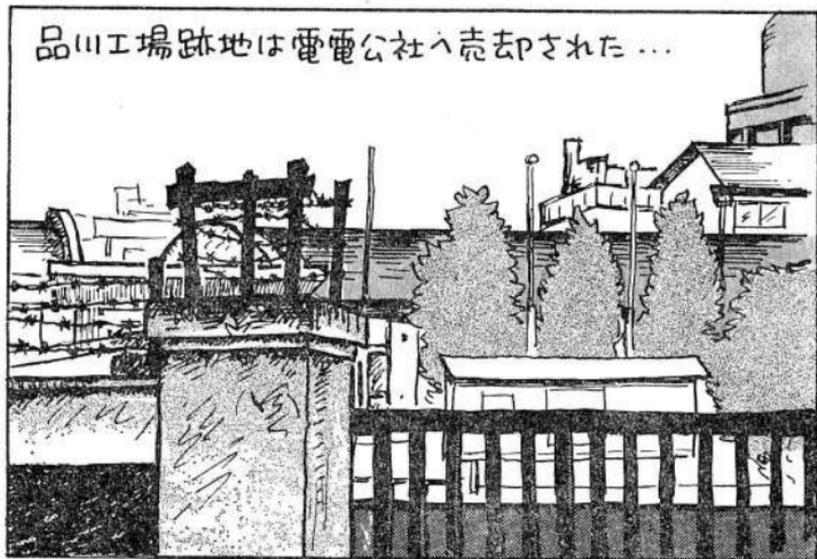
SBUとは、アメリカのGE社が経営コンサルタント会社マッキンゼー社の進言によって始めた、製品別に損益を計算して商品を練る社内組織のことだった。世界最大のコンピュータ・メーカーであるIBMも、IBU（独立事業単位）という同様の組織を導入している。沖電気では、製品ごとに縦割りの組織をつくり、独立採算でコスト意識を徹底させることになった。この方式によって後に、NC装置のような業績のあがらない部門が、事業を撤退して解散させられていった。

「『戦略』という言葉は、一見、きつく、競争相手を陥れる意味にとられがちですが、企業が永遠に存続してその責任を果たすためには、不可欠な要素といえます」

社長室は、SBUの理念をそう説明していた。

同業他社をはるかに上回る生産性によって、沖電気は急激に業績をあげていった。コストダウンのためには、あらゆる手段がとられた。生産の本流でない部門においては、子会社化が急ピツ

品川工場跡地は電電公社へ売却された...



チですすめられた。完成した製品を梱包して倉庫に入れ、注文相手に納める物流担当部門などは、一部工場を残してそっくり「沖物流」という子会社に移管されていた。

合理化時の提案どおり、品川工場は八〇年に閉鎖されて、跡地は電電公社に売却された。一方で、業績の好調な分野には、「社運を賭けて」大量の資金が注ぎ込まれていった。

「半導体部門の強弱が、今後のエレクトロニクス関連メーカーの消長を決める」

三宅社長は、早くから公言していた。その判断に従って、八〇年五月には一二〇億円を投じた宮崎超LSI工場が建設、着工された。後に、最先端の六四キロビットDRAMを大量生産し、沖電気の主力となる工場だった。

このとき、三宅は大量解雇時を振り返って次のように語っている。

「当時の決断は間違つてなかつたと思つてゐる。……これがなかつたとしたら次の手が打てなかつただろう」(『日経産業新聞』七九年一月四日付)

「一昨年の合理化により、企業体力の回復に努力してきたのも、このような将来に備える前進的な施策をとることのできる体力にするためでありました」(『沖ニュース』八〇年一月号) 八〇年三月期には、一〇〇億円と史上最高の経常利益をあげた。解雇翌年の七九年には、早くも新規採用を始めた(内定は、首切り時に出していた)。八〇年度からは、五〇〇名の新規採用が始まった。三宅のいうとおり、沖電気の企業体力は急速に回復した。

職を奪われ路頭に放り出された一五〇〇名は、ほんとうに「企業の永遠の存続」のために、首切りの犠牲を受ける必要があつたのだろうか。

人間の歴史の歩みにともなつて、科学や技術は進歩し、経済構造や生産体制は変貌をとげていく。どのような立場にいたとしても、それはだれにも否定できないし止められはしない。一八一一年にイギリスの工員たちがどれほど真剣に悩み、自分たちの将来を案じていたとしても、「ラッダイト」と名乗つて工場の織機を破壊してまわつた彼らのおこないは、歴史には「愚かな行為」としてしか刻まれていない。

しかしだからといって、技術や生産体制の変化がどのような姿勢であらわれようとも、私たちはただ黙つてそれを受け入れなければならないわけではないだろう。

「産業革命」で進行した機械化が、熟練工たちの仕事を奪つて生活を脅かしたのはたしかだつ

た。一八三三年、イギリスに五番目の工場法が制定されるまで、殺人的な長時間労働による酷使が、労働者たちを物と同じように使い捨てていったのも事実だった。

“業績回復”を名目にして、沖電気は一五〇〇名を解雇した。だが、急速に業績を回復したこの会社に、大量解雇が必要だったのか。数年後に新規採用を始めるならば、一五〇〇名を人材として見ることはできなかったのだろうか。

沖電気は、なぜ一五〇〇名を切り捨てたのか。指名解雇にまで駆り立てたものは、いったいなんだっただろうか。

* “高度情報化社会”に向けて

三宅が電電公社から沖電気に移ったのは、七七年四月だった。この年、電電公社にかんする三つの計画が完了していた。「電信電話拡充七カ年計画（七二―七七）」、「第五次電信電話設備拡充五カ年計画（七三―七七）」、「公社一〇年後の電信電話ビジョン（六七―七七）」

この年を境に、電電公社の進路はどうなっていたか。七八年に始まる「第六次電信電話設備拡充五カ年計画」に、その姿はあらわれていた。

第五次計画の総投資額七兆円に比べて、第六次は九兆円、インフレ率を考慮すれば、この金額はほとんど横ばいに等しい。計画期間中の一般加入電話の伸び率目標は、五年間で二〇%。同期

のファックス伸び率目標が六〇〇％であるのと比較すると、公社の政策の重点がどこに移ってきたかが分かる。データ通信、画像通信、移動通信などの新サービスも登場した。公社の姿勢は、たんなる電話器機の「拡充」から、電子化、複合化、多様化された「情報時代戦略」に突入したといえるだろう。

かつて沖電気は、販路の八〇％を電電公社需要に依存していた。それはこの時期、すでに三〇％にまで下がっていた。機材の門戸解放という外圧によって、ファミリー存続の将来にも不安がもちあがっていた。

「脱電電という形での将来への技術の展開、そういうものの方向づけ、これが、私のまず第一の仕事だと思っんです……」

自分の口から語っていたように、電電公社から送り込まれた三宅の使命は、電電公社依存の沖電気体質の変革にあったのだろう。最先端産業で生きていくために、企業戦略は転換された。

七八年は、その幕明けの年だった。三月、電電公社の通研基幹交換研究部長だった神宮司順が沖電気取締役に天下りした。以後、公社から沖電気に送り込まれる人材は、約九〇人にのぼった。六月には、超LSI製造の特許と技術ノウハウを、電電公社が沖電気に有償で提供することになった。

合理化後の七九年度経営方針は、体質の変革を社員に向かってつよく訴えていた。

「新技術や新製品を開発するための研究開発費を増加したりしながらコスト競争力を強く

して、受注や売り上げを伸ばしていこうというのが今年の会社の大きな方向であるわけだ。……あなたもわが社の新しい経営方針と新しい体制のもとに、あなたの職場で精一杯力を出して、沖電気が隆盛を迎えるよう力を貸して下さい。一人一人の努力と力が結集されてこそ沖電気チームが強くなり、大きく社会に貢献できるのです」

全従業員の二割、一五〇〇人の解雇があったとき、会社に残った労働者たちはなにを思ったのだろうか。おそらく少なくない社員が、自分の首がながっていることに胸をなでおろし、会社とともに生きていこうと決意したのではないだろうか。経営方針のいうように、新しい体制で精一杯力を出そうと考えたことだろう。

しかし会社に残った社員にとっても、一五〇〇名の首切りという事実が教えてくれた警告は、忘れてはならなかったのではないだろうか。沖電気は、情報化への変化の波のなかで、生き残りのために社員を見殺しにしたのだった。

企業の体質転換は、けっして社員のためのものではない。そして七八年に始まった変動の波は、合理化後の社員をも襲いつづけずにはおかなかったのだ。

* “情報化”のもたらしたもの

社員が会社とともに生きようと考えても、七八年を境にして始まった変革は、沖電気という一

企業内だけの問題ではなかった。

二度目の石油危機を「優等生」的に乗り切った自信から、日本はこの時期に、八〇年代から二一世紀をにらんだいくつかの国家プロジェクトを策定し始めた。七八年には、「日本型福祉社会」という概念を初めて明確にした『現代日本の課題』が、政・財界のシンクタンク「総合研究開発機構（NIRA）」から発表された。

石油ショックによって、それまでのような高度成長が期待できなくなったこと。欧米への「追いつき型近代化」が完了し、先進国のトップを走る国家として、「先進国病」におちいらずに「活力」を維持しつづけるための新たな政策をかける必要があったこと。時代の要請が、「高度情報化社会づくり」に国を挙げて取り組むという姿勢にあらわれたのではないだろうか。

八一年に発表された「八〇年代の通産政策ビジョン」は、「情報化こそ明日の日本を方向づける国民すべての課題」だと説いていた。

同じ年に産業構造審議会が通産大臣におこなった答申では、情報化の影響は「産業革命」にも匹敵するひろがりやと深さをもつものと位置づけられていた。

産構審は八六年五月に、その位置づけを明確にした「二一世紀産業社会の基本構想」を発表し、次のように規定した。

「……一八世紀末以来蒸気機関等の出現による第一次産業革命。一九世紀終りから二〇世紀にかけて石油の大量発見、原子力の利用等による第二次産業革命。今や第三次産業革命とも称

すべき時代を迎えている。……技術体系はもとより、産業社会もその組織、構造様々の側面で新しい展開を遂げるものと予想される」

アルビン・トフラーが「第三の波」と呼んだように、「情報化」というキーワードを軸にして、歴史の地盤が変革した。沖電気が起こった改革の嵐は、最先端をいく電機産業にそれがもつとも顕著にあらわれた姿に他ならなかったのではないか。

八七年九月になって、産構審は新しく「二〇〇〇年の情報産業ビジョン」を提言した。

「情報産業は、引き続き高い成長の可能性を有しており、今後日本経済を担うリーディング・インダストリーとしての役割を果たすことが期待される。……産業構造の転換を図りつつ、就業構造の転換を進めていく上で、情報産業に期待される役割は極めて大きいものがある」

三宅が半導体生産に社運を賭けたのも、沖電気をリーディング・インダストリーの企業に脱皮させるための方策だった。沖電気はまた、防衛機器産業として、国家戦略企業的体質にもなわされていた。

さまざまな時代の要請が、沖電気という企業のなかに歪みを生み出した。沖電気は企業の論理で、その歪みを労働者たちに押しつけた。勤勉な労働も、入社以来きずき上げた優秀な技術も、その論理の前ではなんの価値もなかったのだろう。

経済環境や技術の変化をうけて、企業は戦略を転換する。沖電気という企業の行動が教えてくれたのは、利益と永遠の存続を追求するとき、犠牲はいつでも労働者たちにかぶせられるのが

「企業の論理」だということだったのでないか。

* “会社再建” のために

八一年三月、沖電気東京工場企画課では、SBU対応の係編成から仕事の種別の係編成に組織変更がおこなわれた。伝票発行の仕事がまとめられて発足した計画係には、中山森夫の妻、洋子と、争議を支援してきた活動家の浅利正がふくまれていた。

発足にあたって、係の社員全員が集められた。課長から、計画係を設置した理由が説明された。計画情報の集中化。コントロールを容易にすること。的確、迅速な伝票発行をするためであること。その目的で、コーディング、伝票発行担当とブックイング担当者を分けること。

組織の概略を簡単に説明して、課長は最後にこう付け加えた。

「浅利さんと中山さんには、ブックイングをやっていただけだと思います。二人は仕事が雑で、ミスが多く、計画者として信頼できませんから」
いい終わると、課長はそそくさと立ち去っていった。

浅利と中山は、一瞬ぼう然としていた。課長の言葉は二人にとっても、同僚の係員たちにとっても、にわかには信じがたいものだった。

「仕事が雑でミスが多い」

課長はたしかにそういった。だが長年この仕事に携わってきた二人の仕事は、ミスが多いどころか確実であることに定評があった。

「二人が抜けると……みんなの仕事がきつくなるなあ」

同僚たちは困惑しながらつぶやいていた。ただでさえ仕事量の多い企画課内で、ベテラン二人を仕事からははずすなどというのは、無謀な話だったのだ。

課長が指定した“ブックキング”という作業は、コンピュータから吐き出された用紙をミシン目に沿ってちぎり、整理するだけの単純な仕事だった。二人をそんな仕事に就けるところに、秋元板垣に加えたのと同じ会社の活動家への攻撃の意図が臭っていた。

「私の浅利さんと中山さんにたいする評価は……課長とは違うねえ。浅利さんにはいろいろ助けてもらって私もつとまってきたし。仕事のことというよりも……裁判のことがからんでいるんじゃない……」

昼休みに会った元の上司は、そこまでいって語尾を濁した。

争議支援への、懲罰人事ではないのか。だれの目にもはっきりと分かるほど、露骨な会社のやり方だった。活動家への干渉が、また一段と激しくなり始めていた。

「昨日はどこへ行っていたんだ」

五味田洋清が課長から詰問するようにいわれたのは、それより三カ月前の八〇年一二月だった。

指名解雇された靖子の夫である五味田は、家族としての立場から、沖電気争議の裁判にはかならず傍聴にいつていた。公休をとっての行動に、問題はないはずだった。実際、それまで会社は裁判傍聴についてなにもいつてきたことはなかった。

それがこの時期、会社側は態度を一変させてきた。

「会社と争っている裁判を傍聴に行くのは、社員として好ましくないではないか。理由を書きなさい」

迫られたのは五味田ばかりではなかった。秋元、中山、そして争議団の貞子を妻にもつ加藤孝も、それぞれ所属課長から干渉を受けていた。四人は総務課へ抗議すると同時に、労働組合にも不当な干渉、権利侵害をやめさせるよう申し入れた。

沖電気争議の第一回公判は七九年四月に始まっていた。このころから、社員の態度に少しずつ変化があらわれた。会社の門前でくぼるビラに手を伸ばす人が減り、争議団へのカンパが少なくなっていた。

従業員にはっきりとした変化が出たのは、八〇年三月に品川工場が閉鎖されてからだだった。芝浦工場に合併した東京工場では、ビラの受け取りは、極端に悪くなってしまった。

活動家にたいする、目に見えた排除行動もあった。

労働組合は、毎年夏休み前に就業後、社員食堂などに集まって語りあうピアパーティーを開いていた。職場単位で席をもうけ、参加するのが通例になっていた。そのパーティーに、この時期、

五味田、板垣ら争議支援をする者たちが呼ばれなくなってしまった。

「職場ごとに有志が集まってやってみるんですからね、だれを呼ぼうとその人たちの自由なんですよ。どうしても出席したいっていうんでしたら、個人的に自由席で勝手にどうぞ」

抗議をすると、組合側はそう答えた。

会社と組合が一体となった、活動家への嫌がらせや攻撃が始まっていた。それは表面上は、少数の活動家を孤立させるというかたちでおこなわれた。だがそこには、会社側のより大きな意図が隠されていたのではないだろうか。

指名解雇でも活動家への抑圧でも、ある意味では、会社の意識の大半は、残った一万数千人の全従業員のうえにおかれていた。

経営上の都合で解雇される。会社に逆らったり、信条をとおそうとすれば弾圧される。仕事ができるとか、能力があるとかには関係がない。その事実が、会社にとっては他の社員にたいするかっこうの見せしめになるだろう。

会社の思うとおりにしていなければ、生きていけない。

少数の活動家を痛めつけるだけならば、あるいはやり方はもっと他にあったかもしれない。全社員の見守るなかで、ここまで執拗に陰湿な攻撃を繰り返すのは、一万数千人の全社員に、会社のやり方に従うという意識を織り込むことに大きな目的があったのではないだろうか。

その意識の変化をテコに、会社は企業体質の転換をすすめていこうとねらった。

裁判では、会社側証人の室田平八郎社長室長が、「指名解雇は従業員を意識改革にも目的があった」とはっきり証言していた。

一万三〇〇〇社員をより強力で管理していこうとする全社的労務支配の意図が、活動家への弾圧というはっきりとしたかたちで、あらわれ始めていたのではないだろうか。六人を中心とした活動家たちが、ほんとうに孤立させられてしまうのか。孤立させられて、全従業員の意識変革のテコにさせられてしまうのか。決着のときは、迫っていた。

* “M-1000運動”のねらい

沖電気の創業は、一八八一年だった。創立一〇〇周年を一年後に控えて、業績回復がかたちにあらわれ始めた八〇年六月、“M-1000運動”はスタートした。

身のまわりのムダを改善して、三年後までに全社で一〇〇億円の経費節減をしようという新しいTQC運動だった。

「……今私達は、悪戦苦闘しているSBUに強力な兵糧を送る手段を持っています。それはM-1000による総員のコストダウン運動です」

M-1000運動推進本部事務局は、そう呼びかけてよりいっそのコスト節減を迫った。

合理化以降、沖電気は同業他社を二倍以上も上回る驚異的な労働生産性上昇を実現してきた。



その結果が、過去最高の経常利益となつてあらわれていた。経営者はここでさらに、一人当たりの労働生産性を他社レベルまで引き上げて、強固な経営の安定を狙っていたのだろう。

ふたたび、上から植え付けられた危機意識が、全従業員を駆り立てていくことになった。高崎工場では、翌八一年五月から半年間をかけて、間接部門の効率化を目指した構造改善運動が始まった。一〇月中旬に出された結論は、三〇%近くの人員が削減できるという答えだった。

M-100運動は、八三年に予定を上回る一二億円の経費削減を達成して終了している。

この結果は、経営者にとって大いに満足すべきものだったろう。大量解雇が外科手術的

な危険をとまなう体質改善だとすれば、TQC運動にもとづく社員の意識改革とコスト削減は、平時にいかにして改革をすすめていくかという新しい手法だったはずだ。

M-100運動終了後、会社はただちに「新M-100運動」としてこの方式を継続した。さらに八四年には、CWWQC（全社的品質管理運動）が始まり、社員はどこまでいっても気をゆるめることは許されない。

品川工場が閉鎖され、M-100運動が始まった八〇年という年は、合理化後の好調な業績をうけて、経営者が新たに従業員支配をつよめていこうとした年だったに違いない。

そのためには、合理化時に残された各工場の活動家の動きを封じておく必要がある。急にきびしくなった裁判傍聴への干渉、浅利、中山にたいする異常な仕事差別は、会社側の振りおろしてきた支配の刃が、従業員とまみえた最初の出来事だったのではないだろうか。

経営者の強引なやり方は、浅利、中山にたいする仕事差別の場面で、激しい軋きしみを起こしていた。

* 「争議支援をする人は信頼できない」

「あなた方二人が計画業務に不適格だというふうにとられたのなら、私のいいすぎだったかも知れない。謝りますよ」

浅利と中山の追及にたいして、課長はそういった。

自分の仕事に自負を持っている二人には、ブッキングへの仕事変更はどうしても納得のいかなものだった。そればかりか、課長の表現は全係員の前で無能呼ばわりしたに等しいものだった。二人はその日のうちに、課長に謝罪を要求していた。課長は簡単に言葉を撤回し、係員の前で謝ることを約束した。

しかし、さらに二人が詰め寄るなかで課長の口にした言葉は、会社側の意図がよりはっきりとあらわれたものだった。

「管理職として、会社といま争っている裁判に出席するような人には不安をもっているから、重要な仕事はまかせられない。沖電気と争っている裁判に出席している人が、これからどういう行動に出るか……そのへんですよ」

会社にたいする不満はいくつもあったが、二人は仕事の手抜きをするようなことはしてこなかった。職場での信頼関係は、まず仕事を確実にこなすことから始まっていた。二人とも、自分が担当の仕事で同僚や課長に“不安”を与えたことなどなかった。

課長の“不安”は、別のところにあったのだ。

争議の裁判では、室田社長室長の証言が始まっていた。指名解雇について出てくる証言は、会社側に不利と思われるものばかりだった。

一方では、争議支援の輪は全国にひろがっていった。いずれ弱体化するだろうと考えた会社側

の読みは、完全にはずれていたことが明らかになってきた。

従業員支配を強化しようとする会社にとって、社内に残った活動家はじまものであり、脅威であった。争議団への関心、支援がひろがるのを防ぐために、会社は攻撃をかけてきたのだった。

新しい係編成が発表されて三日後に、座席替えがおこなわれた。いつものように、数名の机を
一列にして向かいあうように並べていると、課長が走ってきて怒鳴った。

「その並べ方は違う。反対向きにしろ！」

課長の指示は、浅利と中山の入った四人分の机を反対にして、よその課を向くようにして並べろというものだった。

二人は計画係ではないというのだろうか。

露骨なやり方に、浅利は頭に血がのぼった。ふと見ると、隣席の若い同僚が、顔をひきつけ、くちびるを震わせて座り込んでいた。あとの二人は、浅利と中山の道連れにされたのだ。指示に従わない同僚の姿は、会社のやり方についてする従業員の無言の抵抗だった。机を動かしていた、みんなの手は止まった。

「計画係のものが、自分の係に背を向けて仕事をやる合理性がどこにあるんだ！」

浅利は、怒りのあまり怒鳴り返した。課長に突きつけた指が、わなわなと震えていた。他の従業員まで巻き込んで、争議支援者への差別を強行しようとする。仕事をぶち壊しているのはどっ

ちなんだ。職場を働きにくくしているのはだれなんだ。浅利も中山も、心のなかに会社にたいする激しい怒りが渦巻いていた。

こんなことを許していいのか。その思いは、巻き込まれた若い同僚も、まわりで見守っていた課員たちも、同じ思いだったに違いない。雰囲気を感じて、課長は逃げるように立ち去っていった。

休み明けのミーティングで、係長は新しい仕事の分担についてのメモを読みあげた。

「ブックイング作業については、ご面倒でも浅利様、中山様にお願致します」

係長が同情したのか、会社がわざと付けたのか、異例の「様」入りの文書だった。

結局、会社の強硬な姿勢は変わらなかった。その日から、二人は単調な仕事に就いた。

元のように仕事をしたい。職場の仲間と一緒に、やりがいのある仕事をしたい。コンピュータから吐き出される紙をちぎりながら、二人は心のなかで思いつづけていた。二人の抜けた分だけ仕事のきつくなった、同僚たちのことを思っていた。

自分たちだけの問題じゃない。会社は、意図をとおすためにはどんな手段にもうったえてくる。こんなやり方に黙っていたら、職場はますます働きにくくなってしまおう。合理化のあと、必死になって耐えてきた一万三〇〇〇人の社員は、これからどうなってしまおうのだろう。

こんなことを、許していいのか。その思いは、激しい攻撃を受け始めた、すべての者の心のなかにひろがっていった。

2 全社員の思いを胸に

* 都労委への提訴

——半年間の議論

四月二八日の朝、仕事をしている加藤のところへドカドカと数人の男たちが入ってきた。

「立ちなさい！」

課長は、いきなり大声でいった。

とりかこんだのは、総務課長、組立課長、組立係長、勤労係長、それに勤労係員という顔ぶれだった。

異様な雰囲気だった。まわりの同僚は、仕事の手を止めて成り行きを見守っていた。

いったいなにごとだ。不審に思いながら加藤がゆっくり立ち上がると、総務課長が激しい口調で詰め寄った。

「あれはなんだ、あの組合への申し入れは。侵害とはどういう意味なんだ！」

課長のいったのは、二二日に出した労働組合への申し入れのことだった。

「……昨年一二月三日、年休をとって、この裁判を傍聴した、秋元、加藤、五味田及び中山を、各所属課長が就業時間中に呼び出し……重大な干渉を行ない……また板垣についても同様な干渉がありました。……その後、企画課計画係の浅利、中山の両名に対し、一層不当な攻撃が行なわれるようになりました。……そこで、私たちは、会社のこの不当な攻撃にたいし、労働者、労働組合員の利益と権利を守る労働組合が、自身の問題としてとりあげられ、対会社交渉などにより、次に述べる私たちの要求実現のために尽力いただけるよう申し入れるものです。
(中略)

③会社は、申し入れ組合員の年休取得の権利を侵害したことについて、謝罪し、今後二度と侵害しない旨、誓約すること。(以下略)

申し入れは、浅利、中山、秋元、板垣、加藤、五味田の六人の名前で、労働組合にたいしておこなわれていた。

反応は労働組合よりも早く、会社側がやってきた。しかもそれは、職場のみんなが見ている前で、桐喝に近い抗議だった。

加藤だけではなかった。二日間にわたって、六名全員が職場のなかでつるし上げをくった。

労働組合の出した結論は、年休は取れたのだから問題はないというものだった。六名の訴えにたいして、なんら有効な手段を講じようとはしなかった。

会社側の攻撃は、ますますつよまるばかりだった。権利の侵害を守ってくれるものは、どこにもいなかった。

このままでいいのか。あからさまに干渉を受けている六名をかこんで、東京・高崎・本庄・八王子工場の活動家たちの間で、何度も話し合いがもたれた。

もう黙ってはいられない。はっきりとしたかたちで会社とたたかうことを主張する声が高まってきた。五味田には妻靖子を指名解雇された怒りがあった。それは板垣も同じ思いだった。さらには、仕事をとりあげるような配転を受け入れさせられた無念さがあった。

屈辱の思いは、だれも同じだった。許せない気持は、みんな持っていた。だが、たたかいに立ち上がることに、ためらう声もつよかった。

松下電器、石川島播磨重工、東京電力……。そのころいくつかの企業で差別撤回闘争がおこなわれていたが、労働者と団結してたたかいを組織していくことには、非常な困難があると伝えられていた。いままで企業のなかでの活動だけをつづけてきた経験から、外に出てたたかうことは大きな不安がともなっていた。自分たちの力で、そこまでやれるのかどうか。

浅利と中山にたいする仕事差別が、不当労働行為として認められるかどうかも疑問だった。全従業員にたいする弾圧がつよまっていた。出向や配転などは、もうあたりまえのようになっているときだった。八王子工場などでは、もっとあからさまな攻撃がかけられていた。

しかし、それだからこそ、自分たちがいま、立ち上がらなければならないという思いは、みんな

なの心のなかにつよかった。会社はどこまでも、支配をつよめようとしている。ここで歯止めをかけなければ、従業員はどうなってしまうのか。八王子では、田中哲朗が配転拒否を理由に解雇されていた。一方では、総人員一定策、東京工場の再編など新たな合理化策も打ち出されていた。議論は、暑い夏を越えて、半年間にわたってつづいた。

外へ出てたたかうことを、支援してくれる人もたくさんいた。

「社員はみんな、会社よりも労働組合を怖いと思っている。合理化当時、積極的に協力した人たちが組合の役員になって、職制になっているんだ。ほんとうに仕事ができるかどうかは二の次だよ。これで会社の将来は大丈夫かと心配になるくらいだ。こういうなかでたいへんだけど、最後までがんばってください」

やはり立ち上がるべきだ。みんなの思いはつよくなっていった。

不安がなくなったわけではない。具体的なめどが立ったわけでもない。だが、これ以上会社の無謀を許しておくわけにはいかない。

外には、支援をひろげている争議団というつよい味方ができていた。支援は、全国的にひろがっていた。電機の各職場労働者の苦労も電機総行動でつながった。その力と結びついてたたかえば、どうにかやっているといるのではないか。あたりまえに、仕事のできる職場がほしい。その思いを根底にして、浅利も中山も、いまこそ立ち上がらなければならないという思いをかたくしていった。

半年間の議論を経て、ついにみんなの意志は固まった。浅利、中山への不当労働行為を、東京都労働委員会に提訴する決定をした。

たたかいのときは、きた。

* 立ち上がったとき

八一年九月二四日、不当労働行為救済が、都労委に申し立てられた。翌日の朝、一斉に門前でピラをまき、会社への抗議行動を公にしていくことが決められた。

その夜、五味田は明朝まくピラの束を枕もとに置いて、寝つかれないときをすごしていた。

いよいよたたかに立ち上がる。そのときの迫ったことが、いい知れぬ不安と緊張を、五味田に与えていた。

長年、活動家として職場のなかでやってきた。地道に支持をひろげ、人に訴えてきた。もちろん、争議が始まってからは積極的に支援をしてきた。だが、その五味田にとっても、職場のたたかいを都労委という場に持ち出して、大っぴらに活動するのは始めての経験だったのだ。

どれだけの支援を得られるだろうか。浅利、中山にたいする仕事差別を、みんな自分の問題として受け止めてくれるだろうか。自分たちと支援者をつなぐものは、手から手へ渡すピラ、マイクで訴える演説、そして顔と顔を合わせて語るオルグだけしかない。明日からのたたかいは、

きつときびしいものになるだろう。

五味田はそんなことを考えながら、夜中に何度も目を覚ましては、枕もとのビラをたしかめたのだった。

翌朝、沖電気の門前で、ビラまきは一斉に始まった。朝刊各紙がこの問題を報道していたことが、みんなを勇気づけていた。

秋元は、会社の門前で、初めて職場の仲間らに演説をする場に立った。マイクを握る手が、小刻みに震えていた。

『こんなデカイ会社に向かって、たてついちやっぴいのか』

門の前に立つと、秋元の心の中にはあらためて、たたかいへのためらいが生まれていた。争議団も支援者もついている。だが、一万三〇〇〇社員のなかで活動家たちががんばったところで、ほんとうに会社の攻撃に歯止めをかけられるのか。未知の世界へ漕ぎ出していく恐れを、秋元はどうしてもぬぐうことができなかった。

五味田も秋元も、普通の人間だったのだ。活動をつづけてきたといっても、大企業のなかだけしか知らなかった。自分たちの力が、どれほどのものなのか。どれだけの人たちが支援をしてくれるのか、まったく自信も見通しももっていなかった。そしてやはり、巨大な会社を前にして体の震えてしまいう一労働者にすぎなかったのだ。

その労働者たちが、立ち上がった。そこにはどれほどの、やむにやまれぬ思いがあっただろうか。震える体に入力して、秋元は気を取り直してマイクを口に近づけた。

「みなさん、おはようございます。私たちは、昨日、浅利、中山にたいする仕事差別への不当労働行為救済を、東京都労働委員会にたいして申し入れました」

会社にとっては、その一声、ピラの一枚こそが怖かったのだ。活動家にたいして攻撃をつよめてきたのは、そこまで運動をひろげることはないという読みがあったのだろう。だが、労働者たちは立ち上がった。それは会社にとっても打撃だったに違いない。

ある労働者は、「こういうたたかいがあったのか」と、新鮮な驚きをもっていった。会社や組合から見放されても、労働者にはたたかいの道があった。職場の労働者たちへの提起でもあった。以後、活動家にたいする公然とした攻撃がなくなったという事実、会社の狼狽ぶりが示されていた。

半年後の八二年六月七日に、第一回の審問が開始された。都労委には、二七団体、八五人が傍聴に参加して席を埋めてくれた。会社側の席には、工場長を初めとした管理職が並んでいた。上司たちと向かい合う席に座りながら、傍聴席の支援者たちの熱気を感じて、五味田は初めてこう思っていた。

『なんだ。こうやって向かい合ってみれば、上司も下っぱも関係ないじゃねえか。こっちはこんな大勢の味方がいるんだ。なにも怖がることはない。オレたちは、対等なんだ！』

* ゆれる心と職場

提訴した六人は、争議団の仲間とともに、支援を訴えて労働組合をまわった。すでに争議団が連帯をきずいたところでは、どこへ行っても温かい励ましを受けた。印刷した二〇〇〇部のパンフレットは、またたく間になくなった。「守る会」も結成されていた。

翌八二年の正月、「守る会」は東京工場の多くの社員に向けて、年賀状を出した。都労委闘争の現状を簡単に報告し、日頃の支援を感謝し、よりいっそうの力添えを願うという内容だった。新しい年に向かって、仕事差別と争議団の勝利へ、一歩でも前進したい。それがみんなの素直な思いだった。

ところが、正月早々この年賀状が波紋を呼ぶことになった。

「こういうものがきたが、『支援ありがとう』といわれても私には覚えがないことだ。これは返す」

一月八日に、一人の係長がいつてきたのがきっかけだった。提訴した六人のもとには、「守る会」の出した年賀状が次々に返されてきたのだ。

「深く考えないでください。形式的なあいさつですよ」

いくらいっても、だれも耳を貸そうとしなかった。

ある人は、目立たないようにそっと置いていった。

「申しわけないが……出した人に返してくれませんか」

なかには、職制や多くの人がいるところへきて、わざと大声を張り上げる者もいた。

「こんなもんを私に出すなんて、なにかの間違いじゃないの、返すよ！」

初めのうちは、「年賀状を会社にまでもって返すなど、なんて非常識なんだ」と思っていた。だが、しだいに真相がはっきりしてきた。一部の職制が、受け取った者は返すようにと陰で強制していたのだ。

都労委へ提訴して、職場の問題が公になったことで、会社側の攻撃はきわめて陰湿になってきた。争議団への態度、ビラを受け取るか、かかわりを持っているか。チェックのためあらゆる出来事が踏み絵にされ、キメ細かい監視の目が張りめぐらされていた。

ある職場大会では、一人の労働者が立ち上がってこういった。

「争議をしてる人がウチにまで訪ねてくるけれど……迷惑だ。困っている……」

表面上は、争議団や都労委提訴団にたいする抗議の言葉だった。だが、いかにも嫌々いわされているという感じのその態度が、本質を語っていた。この労働者は、「なにか発言はありませんか」と、三回促された後にやっと立ち上がったのだった。陰で発言を強制する、職制の意図が見えていた。

仕事場で、話しかけてくる労働者はまったくといっていいほどいなくなった。いままでは、旅

行に出れば土産を買ってきてくれたような仲間まで、避けるようになった。

職場の労働者たちは、「身の証し」をたてなければ、とても生きていけないと思わざるを得ないところまで追い込まれていた。

年賀状の返却は、管理される労働者たちの苦しみのあらわれだった。返しにきた人たちは、それなりの覚悟が必要だったのだろう。返すことをこぼんだ多くの人も、板ばさみにあってつらい思いをしただろう。

身を削って切り合う争議のきびしさは、提訴した二人にも、職場の労働者にも同じような緊張感を生んでいた。

のちに浅利は、胃かいようを病んで、帰宅途中の電車のなかで吐き倒れた。審問期間中に、一月の入院を余儀なくされた。神経をすり減らされる毎日が、激しく内臓を傷めつけていたのだ。会社側か労働者か。どちらが自分たちの力をひろげ、勝利を得るのか。ある意味では、命をかけたわたりあいがつづいていた。

* 職場の人の “無言のカンパ”

自分たちが、どこまでたたかえるのか。都労委へ提訴した六人がいだいた不安は、自分たちの訴えを、どれだけひろげて支援を勝ち取れるかという問題にかかっていた。これまで職場のなか

で地道に支持者を増やしてきた成果が問われていたし、もし失敗すれば、きずいてきたものまで失う可能性のある、一種の賭けだった。

都労委に提訴して一年後、争議団のたたかいでは中央共闘会議が結成された。幅ひろい全国的な支援が、かたちとなってあらわれた。困難の末に共闘会議ができたことは、職場の活動家にも大きな励ましになっていた。これで自分たちのたたかいも、いけるんじゃないか。そんな見通しが、だれの心にも芽生え始めていた。

浅利と中山は、完全にブックキングの仕事だけをつづけさせられていた。「仕事」ともいえないような単純な作業は、午前一〇時ごろには終わってしまった。あとはなにもすることがなく、じっとさせられているだけという毎日がつづいていた。

そんなある日、机に向かって中山が座っていると、一人の労働者が職場に入ってきた。労働者は、なにか探し物をしているような様子で中山の机に近づいてきた。中山が顔をあげると、その労働者はチラッと合図するように視線を送った。そして手ぶらのまま、なにかをゴミ箱のなかに投げ捨てて背を向けた。

不審に思った中山が、捨てられた紙切れを拾いあげたときには、労働者はもう立ち去ったあとだった。紙切れにくるまれていたのは、小さくたたみこまれた千円札三枚だった。

中山は、胸を衝かれた。労働者は、無言の合図で、中山たちへの支援をおくってくれたのだ。ゴミ箱に捨てたと思えたのは、気づかれないように渡されたカンパだったのだ。

『ありがとう……』

中山は、去っていった労働者に向かって心のなかでつぶやいた。

監視の目は、一段ときびしくなっていた。中山たちとは、近づくことさえ避けようとする労働者たちが多くなっていた。そのなかにさえも、危険を冒して支援をあらわそうとする労働者がいたのだ。

五味田の職場では、みんな機械に向かって仕事をしていた。部品箱を抱えた労働者が、とおりがかりにちょっとわき道へそれたという感じで五味田に近寄った。

労働者は、そっぽを向いたまま小さな声でささやいた。

「おたくなの？ 板垣さんと同じようなことやってるの。ちょっと箱のなか見て。これもってって、板垣さんに渡して」

労働者の抱えた部品箱をのぞくと、隅に二〇〇〇円が押し込まれていた。五味田は素早くそれを取って、下を向いたまま小声でいった。

「ありがとうございます。きっと渡します」

労働者は、なにごともなかったようにもどっていった。

階段ですれ違うときに、サツと金をつかませてくれる労働者がいた。ドアごしに声をかけて、カンパを置いていってくれる人がいた。支援の輪は、ものをいえないような職場のなかにさえ、確実にひろがっていった。

労働者たちはなにを求めていたか。無言のカンパは、ほんとうの心をあらわしていた。職制にいらまれて、表だっては近寄らないが、多くの労働者が都労委のたたかいを支援していた。それはおそらく、浅利、中山の問題を、みんなが自分のこととして受け止めてくれたからなのだろう。だれもがキチンとした仕事をしたいと思っていた。都労委闘争の勝利が、職場を働きやすく変えたと信じてくれたからなのだろう。

『自分たちは、ひろく支援されている。私たちは、勝てるかもしれない』
たたかいを、それぞれの問題としてひろげることができた。職場のたたかいの核は、周囲に力を与えだした。中山も五味田も、たしかな手ごたえを感じるようになっていった。

* 工場への立ち入り調査

五味田は争議団の相原と、車で江東区内を走っていた。日曜の道路は渋滞することもなくすいていたが、住所録を頼りに面識のない人を訪ね歩く作業は容易ではなかった。

都労委に提訴した職場の活動家たちは、争議団員と組んで、休日に沖電気労働者の家庭を訪問する活動をつづけていた。職場では見張られていて、労働者と話することもできない。少しでも支援を訴えるために、苦肉の策として、一軒一軒手分けして家庭訪問をすることになったのだ。その日二人が訪ねたのは、すでに沖電気をやめていたソフト労働者だった。前日に徹夜の仕事

があつて、二人が声をかけたとき、まだふとんのなかで眠っていた。来訪の理由を説明すると、労働者は着替えて、近くの喫茶店へ連れていった。

二人の訴えに耳を傾けたあとで、ソフト労働者はいった。

「沖のやり方は、ソフトの開拓をするような頭を使う仕事にはだめだよ。ボクはもういまは、好きなようにやってるけどね。沖電気は……狭いよ」

労働者は、朝食がわりのトーストとコーヒーを二人にごちそうしてくれ、カンパを出してくれ。そして、職場の人たちのために少しでもがんばるようにと、帰っていった。

当初の予想に反して、家庭訪問を門前払いで帰らせるというケースは少なかつた。話をきいてくれた人たちからは、争議や都労委闘争への批判めいた言葉はまったくといえるほど出てこなかつた。それが沖電気の労働者たちの、ほうとうの心の内だつたのだろう。

むしろこの日のソフト労働者のように、会社のやり方に批判をもつた声が圧倒的に多かつた。会社はそれを、力で抑えつけてきたのだ。

ある家庭では、本人が留守だつたが、代わりに出てきた奥さんが、話を聞いてこういった。

「ウチの人はよく私に争議の話をするんですよ。会社はいずれ負けるよ。あの人たちにはがんばってもらいたいな」

陰湿なやり方を変えない会社は、労働者たちのほんとうの心を、どのように見ていたのだろうか。それをつかめないと、会社側の運命があつたのかもしれない。

八〇年一月二七日に始まった都労委の調査は、年が明けても調査の段階にとどまっていた。会社側が膨大な資料を提出し、それを調べることに時間を取られていたのだ。

その結果、翌年三月一七日に、東京工場にたいする立ち入り調査がおこなわれた。会社の資料が煩雑で、現場を見なければ分からないと労働委員会が判断したためだ。

このとき、会社側は「立ち入り調査」という名称の使用を、激しく拒んだ。「立ち入り」というのは、非のある者にたいする印象を与えるというのだ。結果としてこの調査は、「現場調査」という呼び方に変更された。だが、実質は少しも変わらなかった。工場の職場に調査が入るといふことは、民主主義の力が会社側に与えた大きな打撃だった。

自分で自分の首をしめるようなかたちで、会社側は追い込まれていった。

審問は、六月七日に第一回が開始された。以後、ほぼ一カ月に一回のペースでつづけられ、八四年一〇月八日に第二回審問で結審した。この間会社側からは、根岸人事部長、森田企画課長、立石総務課長、木越工場長が審問に登場した。

傍聴席は常に、たくさんの支援者たちに埋め尽くされていた。

* 初めての“譲歩”

八〇年ごろに抑圧と管理をつよめてきたときに、会社は労働者のたたかいをどう考えていたか

ろうか。

争議団のたたかいも、まだ始まったばかりだった。どれだけ幅ひろい支援を得られて、どこまで力づくよくたたかいをすすめていけるかは、当事者にさえまだまったく読めない段階だった。職場での抑圧をつよめたところで、たたかいを外にもち出して継続するほどの力はないと会社は踏んだのではないだろうか。

そこに第一の、見込み違いがあった。労働者たちは、もう黙っていられないところまで追いつめられていた。そして、外でたたかう争議団と連携してのたたかいは、会社の陰湿な嫌がらせや弾圧を乗り越えて、支援をひろげていった。ここにも、「職場の労働者は企業内にとどめておける」と考えた、会社側の見識の狭さがあった。

争議団のたたかいは、すでに沖電気の会社レベルをはるかに越えていたのだ。その意味でも、七一名のたたかいが、七一名だけのもの、争議団員を職場にもどすことだけを目的にしたたたかいではなかったことが、証明されたといえるかもしれない。

八五年秋になって、板垣、五味田は会社から同じように運動会への妻の出席を拒まれた。そのとき、争議団員など数名とともに、五味田は社長宅を、板垣は重役宅を訪問した。

企業社会の常識から考えれば、まったくの平社員が社長の自宅を訪れるなどあり得ないことだろう。だがこのとき、五味田にも板垣にも、心のなかには経営者と自分たちは対等なんだとしか

思えなかった。都労委提訴前夜には眠れなかった五味田が、四年のたたかいでそれだけ変化して
いた。

自分たちの背後には、たくさんの仲間がついていてくれる。その思いが、五味田たちをいつで
も力づけていた。結局、板垣も五味田も、運動会に妻を参加させることができた。

職場のなかにも、たたかうことが労働者たちを変えていたのだった。

会社にもう一つの誤算があったとすれば、それは自分たちの労務管理のやり方を、職場のほと
んどの労働者たちが受け入れていなかったということだった。どんなに陰湿なかたちで活動家た
ちに嫌がらせをしようとも、それは他の労働者たちを傷つけ、深いところで会社への反発をつよ
めざるを得なかった。

隠れてのカンパ協力。家庭訪問での職場批判。会社側の気づかないところで、争議団や各工場
の活動家たちは労働者のほんとうの心を知っていた。

会社がほんとうにすすめたかった社内改革も、その意味では従業員に歪みが寄せられ、受け入
れられていなかったというのが真相かもしれない。

先端産業で生き残るために、沖電気は新しい技術を導入して、FA化をすすめた。M-100
運動に始まるTQCで、コスト削減をはかってきた。業績は順調に上がってきた。だが、従業員
たちの心をつかめないという事実は、企業としての危険を隠れたところで孕みつづけていたので

はないだろうか。荒んだ職場と人間関係が生産の場にあるとすれば、会社がどうなるかは目に見えているのではないだろうか。

八四年一〇月八日に結審したのち、会社側は浅利と中山を元の仕事に復帰させた。ミスの多い労働者が帰ってきたといやがる者は、もちろん一人もいなかった。

「また一緒に仕事をやりましょう」

社内電話をかけてきた他の課の労働者は、うれしそうにいった。それがほんとうの、職場の姿ではなかったか。

浅利と中山を中心にして、沖電気の職場のなかで足かけ四年にわたったたたかいで、会社は初めての譲歩を示した。

より働きやすく仕事をするために、なにが必要なのか。労働者の思いをつらぬきとおした都労委闘争は、それをたたかってとる道を教えてくれたのではないだろうか。

3 二つの「解」

——企業と人間と

* 企業社会のもろさ

——幻のエクセレントカンパニー

八四年九月二日、二〇ページをこえる一冊の美しいパンフレットが、全従業員に配布された。表紙には、コンピュータ・グラフィックの写真とともに、次のようなタイトルが印刷されていた。

「一九九〇年シナリオ

——エクセレント・カンパニーを目指して——」

この年一月、三宅のあとを継いで就任していた橋本南海男社長は、恒例の年頭あいさつで社員に向かってこう訴えていた。

「我が社は昨年来、昭和六一（八六）年度をメドに売上高五〇〇〇億円達成をめざす中期計画をつくりました。エレクトロニクス産業は今年も好況を持統できる見込みです。この時にあ

って、私はさらに一歩進んで、沖を一九九〇年には一兆円企業にするという目標を掲げたい。この目標を単なる初夢に終わらせないよう、全社を挙げて具体的なシナリオづくりに取り組んでいきましよう”

エレクトロニクス業界では、トップの日本電気が売り上げ一兆五〇〇〇億円、富士通も九九〇〇億円と“一兆円企業”になっていた。橋本社長が掲げてみせた目標は、三三〇〇億円の沖電気が五年後までに年率三四％という驚異的な成長をつづけて、売り上げ一兆円のエクセレントカンパニー（業績、財務状況、将来性などすべてが良好な最優良企業）の仲間入りを果たすというバラ色の夢だった。

業績という点から見れば、沖電気は順調な伸びをつづけていた。合理化以降、経営者たちの意図した先端産業への転換は着々とすすんでいるように見えた。

最新鋭の宮崎工場が稼働し、電子部品の部門でも沖電気は他社にひけをとらない生産体制を整えた。

半導体生産の分野には、“神風”が吹き始めていた。六四キロビットLSIが「産業のコメ」と呼ばれ、需要が高騰した。社内ではFA化、子会社化が順調に進行し、M—1〇〇、新M—1〇〇、そしてCWWQCと連続して実施されたTQC運動の成果もあって、コストダウンは経営者の念願どおりすすんだ。

八四年三月期には、初めて一〇〇億円を越える経常利益をあげた。九月になると、橋本は宮崎

工場につづく宮城超LSI工場の建設を発表した。一部完全無人化(FMS)のこの工場が八七年四月に量産体制に入れば、最大の生産拠点となることが期待された。

経営者たちは順風満帆の勢いで自信に満ち、合理化前に社長室の掲げた「明るい沖未来像」を「一九九〇年シナリオ」に託したように見えた。

「シナリオ」が発表されたとき、マスコミ各社は年率三四%という成長目標にたいして、口をそろえて疑問を呈していた。好調だったこの数年の間でさえ、沖電気の年平均成長率は一二%にすぎなかったからだ。この疑問に、「シナリオ」を作製した経営推進室主幹の得田皓則はSBU体制が定着したことを理由にあげて、十分可能だと答えていた。

一万四〇〇〇人の沖電気社員は、美しいパンフレットを手にしたとき、なにを感じただろうか。一〇〇年の歴史があるとはいえ、官公需に支えられてきた沖電気は、一般にはあまり名前の知られた会社ではなかった。その自分の会社が、有名な一流企業の仲間入りをする。経営者の掲げた夢は、おそらく大多数の社員にとってもバラ色だったことだろう。合理化のときとは別の意味で、少なくとも社員が、自分も目標に向かって一生懸命がんばろうと思ったに違いない。だが、そこに欠けているものはなかったのだろうか。

「沖ニュース」八四年一月号に載った『一九九〇年シナリオ』を語る」という座談会で、橋本は次のような話をしていった。

「CWWQCというのは、会社全体に危機感を植え付け、みんながこれから大変だ、どうにか

しなければいけないのだ、というコンセンサスのもとに頑張っていく、という一つの手法だと思っています」

危機感を植え付けられれば、社員はがんばるだろう。バラ色の夢を見せられれば、発奮するだろう。しかしそうやって、締めつけたり喜ばせたりして業績をあげようとする企業の、将来はどうかなるのだろうか。

たしかに、経済環境が良好なときには、業績もあがるだろう。しかし労働者たちにとってそれが一時の夢でしかないことは、合理化に始まった沖電気の歩みが示していた。労働者がほんとうに仕事に打ち込める、働きやすい職場をつくっていかねければならないことは、職場のなかでたかっている労働者たちが教えてくれた。

エクセレントカンパニーが幻想でしかなかったことは、現実が明らかにした。八五年以降、エレクトロニクス業界には三つの大きな嵐が吹きまくった。繊維、自動車とたどって半導体に火が飛び移った日米貿易摩擦。好況時に過剰生産したことが原因の半導体不況。そして後半に急に激しさを増した空前の円高。

七八年に指名解雇が通告された日、円は一ドル一七五円三〇銭と史上最高値を記録していた。八七年に入って、円は一ドル一四〇円を突破した。八七年三月期、沖電気は九年ぶりの経常赤字を記録した。

いま、会社はふたたび構造改善で危機を乗り切ろうとしている。

しかし、円高がくれば、経営が苦しくなるのは分かっていたはずだ。半導体の洪水的輸出が摩擦を引き起こすことは、警告されていたはずだ。

それでもなお、経営者たちはTQCで社員の危険感をあおり、従わない者に制裁を加えつづけてきた。ふたたび危機におちいって同じ道をいこうとする彼らに、果たしてほんとうの「解」を示すことはできるだろうか。

* ある上司の嘆き

都労委闘争が結審してからしばらくたったある夜、浅利は一人の上司と会っていた。上司は浅利と同年代だが、会社の重要な仕事をこなしている上級管理職の一人だった。

「なぜ会社がこんな事件を起こしてしまったのか……理解に苦しむよ。浅利さんも中山さんも仕事をするといってるんだし……まして、他の人より多くできるんだから、仕事を取り上げて遊ばせておくなんて、愚の骨頂だ」

高級なかつぼう料理屋のスタンドに腰をおろして、上司はため息をつきながらいった。

何度か率直な意見をかわした経験から、浅利は上司がいつも本心から会社のことを考えているのを知っていた。そして企業人としての誠意をもって、上司は会社のやり方を嘆いたのだった。

「あなた方が会社にとって、『有害な人物』だというなら、仕事をほすなどという姑息な手段



でなくもっとドラスチックにやればいいんだ」

吐き捨てるように上司はいった。

浅利は息を飲んだ。鋭い刃物を突きつけられた気がして箸を止め、上司の顔に目をやった。だが、上司の瞳は、怒りでも憎しみでもなく、ただ悲しみをたたえているだけだった。浅利が見つめているのに気づくと、上司は苦笑しながらあわてて言葉を継いだ。

「おどかしてしまったかな。会社が『有害な人物』といっているのは、むしろ『有益な人物』ですよ。会社が悪いことをしていると、悪いとはっきりいうんだからね……。それがあなたみたいな左翼だけだと感違いさしたら困るけどね」

浅利は、上司の心のなかを思って、笑いがらうなずいた。上司がいうように、『有益

な人物”が自分たちだけだとは、いまの浅利は思っていなかった。都労委闘争を通じて、真剣に悩んでどうにかしたいと考えている人間が社内にもたくさんいることを、浅利は知っていた。

その人たちの苦しみも知っていた。

上司もその一人だった。真剣に会社のことを考えていたからこそ、上司は会社の社員にたいする扱いに不満をもっていた。そして、浅利たちの言葉に、耳を傾けたのだった。

「トヨタや松下と同じようにきびしい労働がいいとはいわないが、もっと仕事の密度を濃くするべきだ。販売目標、技術開発の目標をきびしく設定して、きびしく進度をチェックし、仕事を遂行する必要がある」

上司の口から出る言葉は、利益を追求して永遠の存続をめざす企業経営者の考えそのものだった。

それは違うんじゃないか。そういうやり方ではだめじゃないか。口もとまで出かかった反論の言葉を、浅利は飲み込んだ。

仕事の話になると熱を帯びてくる上司の口調から、浅利は気が付いていた。それは上司が上級管理職という立場から、精一杯、会社のことを考え、真剣に悩んだ末に出した結論だったのだ。

だが、会社の利益を考えれば考えるほど、彼の熱意はカラ回りした。求めている「解」を、手にすることはできなかった。

上司もまた、「変貌する企業社会」のなかで悩む、一人の人間にすぎなかったのだ。

「合理化して技術導入して、会社はやってこうとしたんじゃないか。間違いは、どこにもなかったはずだ。公社がNTTになってみれば、他に方法がなかったことはだれにだって分かるんだ。だからこそこういうときに、言い訳のかたまりのようなCWCなどやっている時間も、浅利さんたちの事件を起こしてひまをつぶしてる余裕もないんだ。この会社のどこに、一兆円企業などとうかれていられる材料があるっていうんだ。人の良心を傷つけ、押しつぶすような企業に未来はないんじゃないか」

心のなかにたまったものを吐き出すように、上司は話しつづけた。「企業社会」で生きつづけてきた人間の、出口のない心の叫びが、浅利には聞こえるような気がした。

店のカンバンが近くなったころ、上司は小さな声でポツリといった。

「私、くたびれました。いまじゃ窓際族のようなものだし、女房と呑み屋でもやって、のんびり暮らしたいと思ってるんですよ」

それが、三宅社長時代に、若手のホープの一人として有望視された人間の、いまの姿だったのだ。

* 先端技術者たちの苦悩

争議団事務局長だった中屋重勝は、指名解雇をうけるまでの一二年間に、技術者としていくつ

かの大きな変化を経験した。クロスバー交換機は電子交換機になった。ワイヤースプリングリレーは半導体になった。『高度情報化社会』の現代につながる技術革新の、最初の変化だった。

争議を始めてからも、中屋はかつての技術者仲間と何度か顔を合わせる機会があった。三四歳で争議に入った中屋も、解決したときには四二歳になっていた。その間に、何人かの技術者が沖電気の職場を去っていった。

職場に残っていても、将来になんの希望ももてないというのが多くの理由だった。第一線で働くある技術者は、自分の置かれた状況をこう話した。

「私ら技術屋ってのは、自分の打ち込める仕事を与えられれば、バカみたいになって一生懸命やるもんですよ。強制されなくて平気で残業するくらい没頭してしまうんですよ。ところがウチじゃ、コマ切れの仕事ばかり与えられて、隣とどういふ関係があるのかさっぱり分からぬ。これじゃやる気も起きないし、いい製品できないっていう意味で会社にとってもいいとは思えないんですがねえ。おまけにいつも納期に追われていて、納得のいく仕事さえできない感じですね……」

黒いカバンを預けた影山と同じように、解雇のあと二、三年すぎたとき、中屋は職場の仲間にくらいつかれた。

「技術ってたって、もうあんたのいたころとは全然、職場の様子も違っちゃってますよ。もうもどっても、ピント合わないんじゃない？」

この九年間に起こった技術の変化は、想像もつかない。それだけに中屋は、だんだん中年の域に入ってきた職場の仲間が、焦りを感じて沖電気を去っていくとする気持がよく分かるという。六四年に撤退した汎用コンピュータ製造部門に、一六年もたつて沖電気は八〇年に再参入することを決めた。先端産業の中心であるコンピュータ部門を社内にもつことは、他部門の技術水準をも引き上げるといふ点で不可欠というのが理由だった。しかし、ならばなぜ経営者は、まだ他社と差のついていない六〇年代の段階で製造継続を決断しなかったのだろうか。それにも増して、その間に翻弄された技術者や労働者を、会社はどう見ていたのだろうか。一方で会社は、TQCの連発で乾いた雑巾をしぼるようにコストを浮かせ、逆らう労働者にはインフォーマルグループを通じて、陰湿な攻撃をかけてきた。

「沖ニュース」八一年九月号は、「高品質・低コストを推進する」^クというタイトルで、生産技術関連管理職の座談会を掲載している。そのなかである係長の語った言葉は、企業が社員をどう見ているかを如実にあらわしていたのではないだろうか。

「……人間を扱っていくのはむずかしい、人間を扱うには、いかに作業に興味を持たせて、作業を理解させて、モラルを上げるとかというのが、一番重要なことなんです。モラルが欠けると絶対効率は半分以下になってしまう。管理する方からいえば、与えられたものを守らせるだけで精いっぱい、それ以上に良い結果は出ないんです」

沖電気は最近、「コピー黒板」以外にヒット商品を産み出していないといわれる。その「コピー

「黒板」にしても、発売して間もないうちに、性能でも価格でも後発の他社に抜かれてしまった。新製品をつくり出すためには、優秀な技術と、自由な発想のできる環境が要る。ヒット商品が出ないのは、どこに問題があるのだろうか。

△それぞれの分野で世界に通用する人材を目指す……▽

「一九九〇年シナリオ」にはそう書かれていた。しかし技術者の話にもあったように、沖電気
に自由な発想を許す環境があったのだろうか。

八年四カ月の間、外から沖電気という会社を見てきて、逆に、職場の変化していく様子がよく分かったと中屋はいう。

仲間の技術者たちのいったように、技術革新がすすむほど、仕事そのものが細分化されてバラバラになっていく。しだいに強化された労務管理が、労働者と労働者をもバラバラにしていた。全体の仕事を総合して、だれが責任をもったかたちで社会に送り出していくのか。それができないままきってしまったのが、沖電気という企業の姿だと中屋には見えた。

働く者にとっては、会社の姿勢はもっと切実な意味をもっている。仕事のうえでも技術のうえでも、自分に与えられたきわめて小さな部分しか見えなくなるとき、労働者の視野には「人間」が入らなくなってくる。自分の仕事の結果が、どのようにして世の中の人間とつながっているのかが分からなくなってくる。そのとき、働く者にとって「仕事」とはどんな意味をもつものになるのだろうか。

ついに沖電気の職場にふたたびもどることのなかった中屋は、争議が解決したとき、一万四〇〇〇人の沖電気社員たちに向かってこう語りかけていた。

「人間を見失わないでくれ。どんな素晴らしい技術でも、せばめられてしまおうと人間が見えなくなる。人間のことをどれだけ思えるかを、忘れないでくれ。そのときに、人間というのは質でも量でも、ものすごく分厚いものを持って、自分になにかを返してくれるものなのだから」

* “競争信仰”の果てに

八一年に、沖電気は創立一〇〇周年を迎えた。それを記念して社内公募した懸賞論文には、海外事業統括本部長、御園平の「八〇年代における産業社会の変化と沖電気の役割」が最優秀作となった。

「およそ有史以来の人間の歴史は技術の進歩と不可分の関係にある」

論文は、技術革新が人類の富を形成するために、いかに重要な役割をになったかを分析するところから始まる。そして、御園自身が経験した海外生活から、未来人のほんとうの富はなにかを考察し、それを得るために“通信”のもつ意味を説く。御園は情報産業の沖電気に、輝かしい未来を見る。

「わが社が日本の産業社会、ひいては世界の産業社会をリードし、ゆたかな未来を築く重要

な役割を担った産業の、その一翼であることは確実なようである」

だが御園にとっても、七〇年代に沖電気を揺り動かした危機は無視できないものだった。彼はそのまま手放して輝く未来が来るわけではないとして、そのためには、技術開発、設備投資、人づくりを力を入れることを主張する。

ここまでは、働きやすい職場を求めるだれもが、共感を得られる論旨になっている。しかし、彼は結論に入る手前で重大な誤りを犯す。

「……以上の『改造』に大きく貢献しうる可能性のあるのは、現在積極的に行われているM—〇〇運動である。QCやコスト・ダウンという手法やものの考え方を通じて得られる『発想の転換』と『意識の改造』の効果……」

すなわち御園は、会社の労働者にたいする管理の手法——競争信仰と能力主義——を、無批判に認めてしまったのだ。その行きつくところは、事実が教えてくれていた。迷路に入り込んだ御園の出した結論は、ひたすら信じこんで救いを求めるといふものだった。

「私たちは一丸となって十年先、二十年先の沖電気の発展を考え、そしてこの八〇年代を『積極的体力づくり』と『自己変革』の年代としていきたいと思う。……五、六年は苦しい時があるかもしれないが、トンネルの先に一条の光はすでに見えており、そこには明るい未来とわが社の急成長とが大きな視野で広がっているのである。……心から信じ、こうなるはずだと日々努力するところに、わが社の未来も自からひらけてくるだろう」

* わたしたちの「解」

臨時教育審議会は、八七年八月七日に最終答申を提出した。答申の第二章「教育改革の視点」には、「生涯学習体系への移行」という改革理念が盛り込まれていた。

この理念に沿って、今後の職業能力開発対策の方向を検討するためとして、八六年一〇月に生涯職業能力開発研究会が設置された。この研究会は、八六年六月、「二一世紀に向けての生涯職業能力開発のシステムの推進」という報告を出していた。

報告によれば、「生涯職業能力開発を効果的、体系的に推進することは、労働力需給のミスマッチを解消し、雇用の安定を図るうえでの最重要課題である」としている。

沖電気の姿をとおして私たちの見てきたものは、技術革新で余った人員、技術の進歩についていけない中高年社員の切り捨て策、そしてそれを正していこうとする労働者への弾圧だった。

八四年一月、沖電気労組の小林委員長との対話のなかで、橋本社長はこう語っている。

「ひとつ難しい問題だな、と考えているのは、技術革新がこれだけ早くすすんでいくなかで、たとえば昔なら三十人の仕事が六人でこなせるようになってきていること。また、ことばが悪いですが、技術革新に取り残されていく人。これらの対策です」

目前の利益を追求し、強引な生き残り（サバイバル）策を展開するために、合理化や労務管理、活動家への弾圧といった抑圧的政策を取りつづけてきた。そのことが、モラルどころか社員の

人間性までを破壊し、自殺者を出し、会社にとっては技術の停滞を産み出してきた。苦悩する技術者、争議団や都労委提訴団に寄せる労働者の熱い支援が、企業社会のほんとうの姿を教えてくれた。

生涯職業能力開発研究会の報告は、企業がそのような状況におちいらないために、次のような対策が必要であると述べている。

「。中高年齢者が意欲をもって生き生きと働ける体制づくり

。女性の多様な分野での能力の活用とその発揮

。組織の活性化と勤労者のモラル・アップ……」

ほんとうに女性も中高年労働者も、不安なく生きいきと働ける職場になるのなら、だれも異存はないだろう。しかし、沖電気という企業の姿を見てきた私たちは、それで安心していいことはできない。「企業の論理」のみが貫徹するところでは、報告の言葉は違った意味をもってくるからだ。

この研究会の母体となった臨時教育審議会は、「競争が人間に活力を与える」という考え方を、一貫したベースとしてきたように思える。国家や企業の側からの人間能力や人格への具体的な期待にもとづいて人間を競わせ、自己実現への意欲を活性化させようと考えてきたように思える。

“活性化”の意味が、人と人とのつながりを断ち切られた疑心暗鬼の企業内で、人間と人間が出口を求めて競争することをあらわしているのだとしたら、その果てにあるものはいったいなん

だろりか。私たちはそれでもなお、企業のなかに埋没し、会社を頼りにして、「心から信じ」てぶら下がって”生きていくべきなのだろうか。

ほんとうに人間の能力を発揮させ、つながりをつくって生きいきと生活をきぎずいていくための活性化は、企業の論理が提出してくれることはない。私たちは、私たち自身でそれを手に入れなければならぬ。

沖電気は教えてくれた。企業のいく道に、「解」はない。働く人間にとって必要な「解」は、私たち自身が探し求めていかなければならない。

沖電気争議団の七一人は、職場の労働者たちのたたかいは、そして、彼らを支援し、ひろい大きな連帯をつくってきた人間の輪は、私たちのためのいくつかの「解」を、生きたかたちで教えてくれたのではないだろうか。

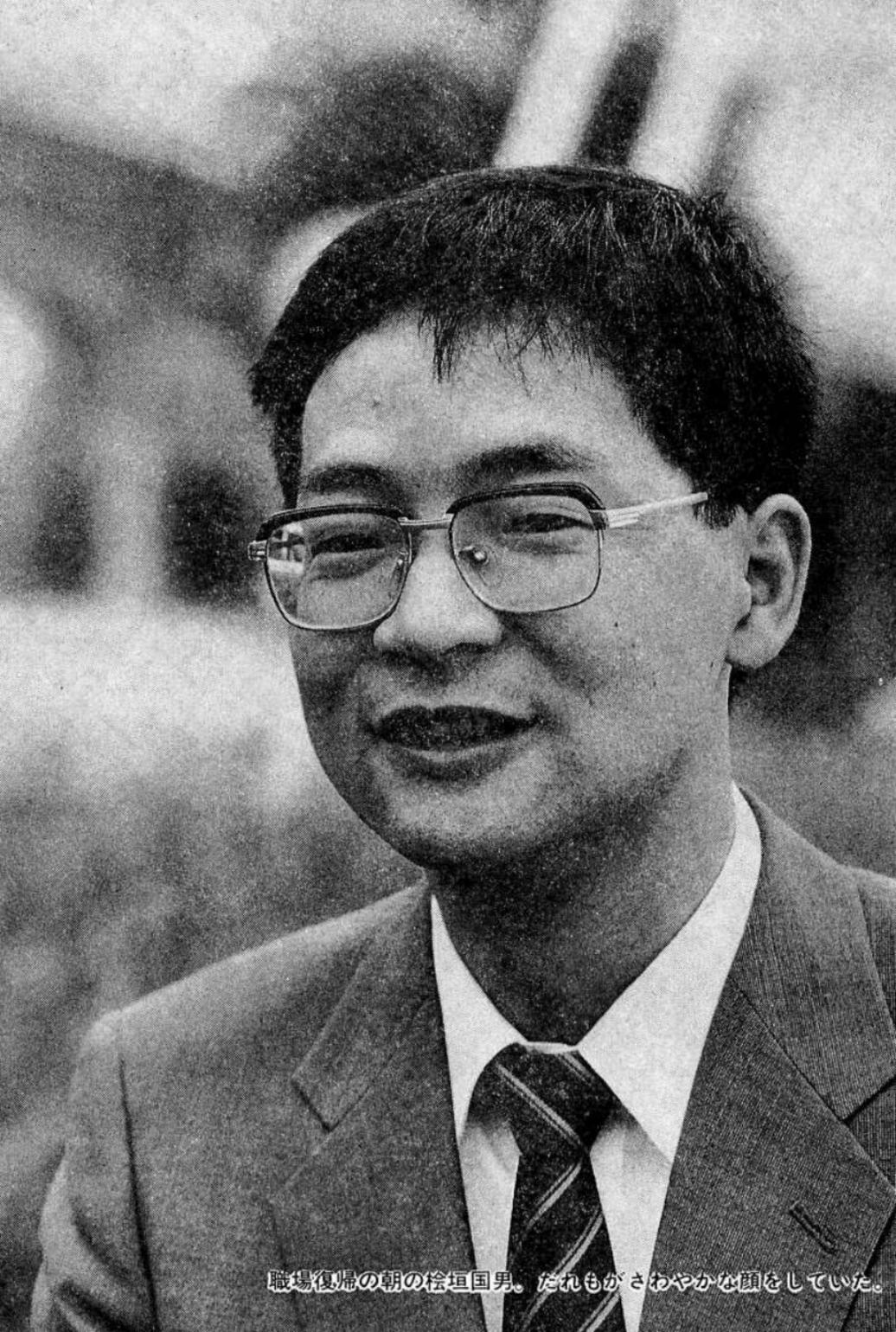
職場にもどる日 1987.6.30 高崎事業所



東田稔・照子夫妻は、ともに首を切られ、
そろって職場に復帰した。

夫婦ともに出勤できるようになった長井明・一恵。明が指名解雇され、一恵は社内で支援の活動をした。





職場復帰の朝の桧垣国男。だれもがさわやかな顔をしていた。



齊藤和成はカバンを大きくふくらませて出勤。
まわりの者にかからわれた。



職場復帰者たちは、支援してくれた人々に手をふり構内に消えていった。



エピソード 新しい変革へのチャレンジ

* たたかかってよかった

八七年三月、八年四カ月のたたかいの末に、沖電気争議は和解した。三五名が職場に復帰、解
決金として、会社から一二億九〇〇〇万円が支払われた。

桧垣国雄は、高崎工場へ復帰することが決まった。和解が成立してしばらくたったとき、桧垣
は高崎工場の单身寮で、八年半ぶりにお盆をもって食堂の列に並んだ。

指名解雇通告をうけたあと、寮に生活していた若者たちは会社から徹底したイヤがらせを受け
てきた。退寮を迫られ、食堂へいっても食事をさせてもらえず、風呂もトイレも使えない状態に
なった。会社からの追い出しに入り口にバリケードをきざずいて、八年半の間がんばってきた。

その桧垣の目の前に、いま、あたたかい御飯とみそ汁があった。八年半も食べさせてもらえな
かった、寮の食堂の飯だった。

湯気をたてるみそ汁に口をつけ、ホカホカとした飯をかき込むうちに、桧垣の目じりには涙が

あふれてきた。おかずに手をつけてもお新香を頬ばっても、涙は止まらなかった。

桧垣は涙をポロポロこぼしながら、寮の食事を食べつづけた。桧垣は、ほんとうは「泣かないヒガキ」でとおってきた。理性的でクール。オルグで話をするときも、冷静に論理だったしゃべり方に定評があり、人前で涙を見せたことは一度もなかった。

指名解雇を受けたとき、まだ入社四年目の二二歳。会社の仕事がよくやく分かりかけてきたばかりの若い桧垣には、首を切られた怒りも会社への憎しみも、他の争議団員とは少し感じ方が違っていたのかもしれない。あるいは、争議が仕事みたいなものだったのだろうか。

その桧垣が、寮の飯を食べながら泣いた。彼の涙は、なにを意味していたのだろうか。

もちろん、八年半ぶりに争議に勝ったうれしさはあっただろう。だが桧垣は、首切りの悔しさに勝ったことで涙を流したのではなかった。

八年四カ月の争議期間中、桧垣もまた全国をオルグで歩いた。東京ではド真ん中の中央区銀座を、皮サンダルで訪ねまわった。「高知で食わしてもらった新鮮な刺し身、うまかったなあ。夏の日照りに銀座の印刷所で飲ませてくれた一杯の麦茶も、忘れられないなあ……」

寮の飯を口にしたが、桧垣はそんなことを思い出していたのではないだろうか。労働組合の事務所で、支援してくれた人の家で、町の食堂で、八年四カ月の間に、桧垣はいろいろな人たちと、いろいろな所で飯を食べてきた。外で食べてきた飯の数が、クールな桧垣を変えていた。たった一杯のみそ汁にも、涙を見せてしまう豊かな感情をもつようになっていた。自分を支援して

くれた人を思い出し、心をはせる温かさを身につけていた。

首を切られたとき、松垣のまわりに初めから「仲間」がいたわけではない。人のなかに入って、同じ思いでたたかって、一人ひとりと連帯を結んでいくことで、松垣は「仲間」を手にしてきた。自分を成長させてきた。豊かな心をかちとった。

寮で食事をしながら松垣は、八年半の間に自分の心のなかに育った、大きなものをかみしめていたに違いない。それはおそらく、他人を蹴落として生きていく「競争社会」では、一生手にすることのできなかったものだろう。

「たたかって、よかった」

そのとき松垣は、心の底からそう思っていたのだろう。

争議が始まってから生まれた相原の娘の香利が、八〇年の暮れに高熱を出して泣き叫んだ。病院に連れていくと、左上腕部が骨髄炎にかかっていた。急いで入院したが、レントゲンに写る香利の左腕の骨は、肩に向かって日に日に黒ずんでいった。医者は、切断の覚悟をしておいてほしいといった。

まだ一歳七カ月の香利は、痛みに苦しみ、医者の白衣に怯えて泣きつづけた。

相原は毎日、妻の勝美と交替で、つきっきりで看病をした。

真夜中の静まりかえった病院のベッドで、香利は小さな足首に点滴の針をさし、腕を包帯にま

かれて、かすかな寝息をたてていた。

体の弱い妻の勝美をかばって、相原は争議にも家事にも、人一倍がんばっていた。香利の急病は、相原の体力にも神経にも重くのしかかってきた。しかし相原は、つかの間のやすらぎのなかにいる香利の寝顔を見つめながら、疲れきった頭のなかで思っていた。

『香利……。オマエが大きくなったとき、お父さんは絶対に、オマエの病気で苦勞したとだけはいわないよ。たいへんなこともあったけど、おかげでお父さんとお母さんはまた仲良くなれたし、いろいろ勉強にもなった。いつかかならず、あの苦勞もムダでなかったと思える日がくるはずだから……』

相原は、争議で歩きまわっているとき、よく人にたずねられた。

「夫婦そろって首を切られて、しかも奥さんが妊娠されていたなんて、さぞたいへんだっただしょうねえ」

あいまいにうなずきながら、相原はいつも自分に問いかけるのだった。

『オレはほんとうに、人より苦勞しているんだろうか……』

小さな子どもを抱えて、もちろん口ではいえないような苦勞もあった。妻の勝美は、解雇前にケイ腕症候群にかかり、体調の悪い日が多かった。オルグや集会で忙しく相原の帰りの遅い日がつづいたときには、相原のスケジュールが書かれたカレンダーを破ってケンカになったこともあった。毎朝、香利を背中にしぼりつけて、勝幸を前に乗せてバイクで保育園へ連れていった。オ

ルグからもどると、夕食を調理して子どもに食べさせ、夜の集会へと出かけていった。たしかに、相原は人より余計に仕事を背負い込んでいたかもしれない。

けれど相原は、そうやって忙しく働く自分の生活がたいへんだと思ったことは、一度もなかった。むしろ自分が一人で子どももいなかったら、きっと精神的にはもっと苦しかったらうと、妻や子どももいたことに感謝をするのだった。

争議の生活は、大企業のなかで外の世界を知らずに生きていたときには、思いもしないものだった。すべてを自分たちの手で、ゼロからつくっていかねばならなかった。けれど相原は苦勞のなかで、それがほんとうの人間の生活なんだと思えるようになっていった。

どんなに遅く帰ってきてても、洗い物をし、洗濯物をかたづけた。料理も掃除もした。子どものことで、何度も保育園へ通った。相原には、そうやって自分たちの力で営んでいる毎日が、楽しくてしかたなかった。

保育園へいけば、保母さんと話し、子どもたちと遊ぶことができた。料理の腕前もあがって、今度はこんなものをつくってみようと考えてようになった。生活のなかに、楽しみがいっぱいあることを相原は発見していった。

生涯職業能力開発研究会の報告は、企業のなかで自分を活性化し自己実現を図る人間を、“自立型仕事人間”と呼んでいた。相原が争議をとおして知ったのは、人間の生きる場所は企業のみかだけにあるのではないという事実だった。自分の足で人と出会い、手を握ってコミュニケーション

ヨンをする。自分たちの力で、生活をきずいてゆける。私たちが豊かに生きていくためには、
“自立型仕事人間”であるとともに、“自立型生活人間”でなければ、ほんとうの意味での自己
実現はできないだろう。相原は自分の体で、それを知ったのではないだろうか。

香利の病気は、運良く最初の薬が効いて、一カ月ちょっとの入院で全快した。

争議が解決に向かうころ、香利は成長して小学校一年生になっていた。ある日学童保育で、
「お父さんの仕事」という題を出されたとき、香利は作文にこう書いていた。

「うちのおとうさんは、またしごとにもどれることになりました。みんなでさんじゅうごにん
がもどれます。わたしはいつもゆめのなかで、おとうさんたちをおうえんしているんです」

争議のことをちゃんと話したこともない。まして、三五人などもどるなど分かるはずもないと思
っていた。その香利が、相原や勝美の生き方を見つめ、まわりのたくさんの人たちにふれ、話を
聞いて自分でそう書いたのだった。

相原は思った。争議のなかで、自分はいろいろなことを教えられた。人の立場になって考える
こと、相手のためにながでできるかを考えること。そういう生き方が、結局は自分たちのたたか
いを勝利に導いてくれた。

これからは、ますます人間と人間の関係が結びにくい時代になるかもしれない。だからこそ、
相原は子どもたちに、人のことを考えられる人間になってほしいと考えていた。いつの間にか子
どもたちは、相原が争議のなかで学んだことをしっかりと受け継いで、人間として歩きだしてい

るように思えた。相原にもやはり、たたかいは素晴らしい財産を残してくれたのだった。

職場復帰して本庄勤務になり、相原たちは家も工場の近くに移り替えた。この埼玉北部の地で、相原はまた、勝美や子どもたちと一緒に、人間と人間のつながりのある新しい生活をつくっていかうと考えている。

* 企業の矛盾のなかで

八七年三月、争議解決が最終盤を迎えたころ、アメリカの小さな半導体メーカー、マイクロン・テクノロジ社（通称：マイクロン）の社長が、アイダホの本社で記者会見をした。彼の口から語られたのは、沖電気が日米半導体協定に違反して、半導体メモリーをダンピング輸出していた証拠を入手したというものだった。

前々日、沖電気の香港販売会社、オキ・エレクトロニクス香港に、一人の女性から二五六キロビットDRAMを協定を下回る価格で大量に買い付ける注文が入った。女性は翌日製品を引き取りにきた。事態の発覚後、あわてた沖電気社員が買いもどしに探したが、女性は完全に行方をくらませていた。

沖電気は、協定違反はアメリカの会社もやっていることと強弁し、「おとり捜査」にひっかかったのだと言いつつ釈をした。だが結果として、半導体メーカーは減産を徹底させられた。沖電気は、

問題の製品の東南アジア輸出を中止した。アメリカは四月に、対日報復関税を実施した。

利益を追求する企業の活動は、労働者に関係のないところでもおこなわれている。技術者がよい製品をつくろうと努力し、労働者が一生懸命働いてみても、「企業の論理」が強引につらぬかれてしまえば、報われることすらなくなってしまふ。

六月三〇日、復帰した三五人が職場に通い始めた。全員に与えられたのは、年内いっぱい初任者研修を受けつづけるという命令だった。

半年間、研修をさせられる。会社側の意図が復帰した争議団員を社員から隔離することにあったとしても、仕事の勉強ができることにみんなは眼を輝かせた。しかし、始まってみると、会社のやり方は、本気で労働者としての能力を高めようと考えているとは思えない、いかげんな研修ばかりだった。ものすごい、ツメ込みの教育で、やっている意味もねらいもハッキリしなかった。「なんで、こんないいかげんなやりかたの研修を受けなけりゃなんねえんだ。やっぱ、沖はダメなんかなあ」

本庄に復帰した松本謙司は、新人教育を受けながら考えていた。八年半外で暮らして、他の電機職場もたくさん見てきた。沖電気の労務管理のやり方は、やはりどこかズレているような感じがした。

一〇月に入って本格的な研修が始まったとき、みんなは俄然、色めきたった。自分たちからす

すんで覚えようとした。コンピュータのプログラミングのときなど、だれもが自費で二、三冊の教科書を買ひ込み、昼休み返上で覚えようとした。若い真喜志など、休日にわざわざ、元の東京・三田の争議団事務所へ通って勉強をつづけた。

それがほんとうの、労働者の姿だったのでないだろうか。キチンと訓練されて、能力の発揮できる仕事さえ与えられれば、黙ってたつて仕事をするのだ。ところが沖電気は、その労働者たちにたいする研修さえ、いいかげんにしかやろうとしなかった。

「でもそいつは、沖だけの問題じゃあないんだよな」

松本は、そうも思い始めていた。

日本電気、富士通、日立、東芝……。この日本のなかにさえ、いくつもの電機産業があり、おたがいに競い合っている。競争に勝ち残り、利益を追求するのが「企業の論理」になっている。しかし、そこにこそいろいろな矛盾の生まれる原因があるのではないか。

「企業の論理」はときとして、スパイ小説まがいの愚かな事態を引き起こす。一方では、労働者たちがたがいに競争し、蹴落としあつて苦しんでいる現実がある。日本電気に解雇、日立に解雇と仕事差別。労働者たちの生き方は、どの企業でも歪められている。

大企業にいるから、倒産がないからといって安心していることはできない。自分は会社のなかのことしか知らなくても、労働者の首は経営者のちょっとした判断の違いや、思惑によって簡単に飛んでしまう。いつもグローバルな環境変化にさらされている。

七月、沖電気はダンピング課税の動きに先手を打って、プリンターを欧州で現地生産することに踏み切った。九月に発表された今年度の「海外設備投資融資修正計画」によると、沖電気は八四億円と、日本の全企業のなかで七番目に多い海外投資を予定している。経営者たちの考えている計画がこのまますすんでいくとき、「産業の空洞化」を生じさせ、労働者はどうなるのだろうか。

そればかりではない。電電公社が八五年に民営化されたことから、N T Tと沖電気との関係も微妙に変わってきた。量産工場をもたないN T T。高度な技術のほしい沖電気。八六年初めにささやかれた、I B MやN T Tによる沖電気の買収説は、外部から見ているかぎり、けっして橋本社長の弁解したような、根拠のないうわさ話とは思えない。

労働者は、どう生きていくべきなのか。松本は、争議を終えてふたたび「企業社会」にもどった。しかしいま、人間として思っている。自分たちのたたかいは、まだ終わってはいないと。

五味田靖子は、朝六時前に起きて浦和の家を出る。片道二時間以上をかけて、本庄の事業所へ通勤する。指名解雇前は品川事業所にいたのだから、まったく正反対の方角へ向かうことになった。東京工場に勤務している夫とも別れ別れになる毎日が始まってしまった。

和解が成立したとき、だれがどの事業所に復帰するかについては、争議団側のいい分をとおすことができなかった。品川事業所や芝浦事業所にいた労働者たちが、高崎や本庄、八王子に復帰しなければならぬケースがたくさん出た。事業所の近くに、新しく移り住んだ夫婦がいる。靖

子のように、長時間の通勤を余儀なくされた者もいる。

復帰の条件についてたかぬかなかった点をいろいろいわれたこともあった。しかしいま、多くの“元”争議団員たちは、違う思いをいだいている。

靖子のかよう本庄事業所にも高崎事業所にも、東京から単身赴任している労働者がたくさんいる。争議団員でなくても、長時間通勤を強いられている者もいる。仕事以外のところでクタクタになり、神経をすり減らして、ほんとうにいい仕事ができるというのだろうか。

「会社はいい、私たち労働者にないを求めているんだらう……」

夕方、会社を出て駅へと急ぐ社員の群れを見ながら、靖子は思う。靖子にしたところで、自分がどうしても本庄に勤務しなければならぬ理由があったとは思えない。東京工場にだって、女性労働者はいるのだから。

事業所を移り変わるような配置転換も、いまの沖電気ではあたりまえのことになってしまっている。会社のやり方に疑問を感じながら、多くの労働者たちは、なすすべもなくそれに翻弄されている。

職場の現状がそうならば、労働者たちと同じ環境で復帰しよう。それがほとんどの争議団員たちの、復帰の決意だったのだ。

会社のなかには、まだまだ矛盾がたくさんある。みんながそれに苦しんでいる。その現実を放っておいて、復帰したことだけに喜んではいられない。「企業社会」の歪みとは、まだまだた

かいつづけていかなければならない。そうしなければ、自分たち労働者のほんとうの豊かさは、勝ち取ることができないのだから。

また、新しいたたかいの日々へ。その熱い思いを胸に、三五人はそれぞれの職場へと帰っていった。

* 連帯の輪をひろげて

前にのべた生涯職業能力開発研究会の報告は、未来の人材像を「自立型仕事人間」と呼んだ。仕事をおして自己実現をはかり、中高年になっても企業の活性化に寄与する人を、理想的な労働者像とした。

私たちはいま、もう一つのことを忘れるわけにはいかない。それは、私たちの人生が、けっして「企業」のなかだけで営まれているのではないという事実だ。

職場復帰をしなかった影山は、東京土建江戸川支部というまったく新しい組織の仕事に就いた。大工、左官、屋根職人、配管工……。一〇を越える職種の人びとが、仕事を分かちあって生きていた。家をつくる。修理する。彼らは一つの仕事に寄り集まり、自分の責任をまっとうすることで製品を完成させていった。

そこに見る労働者たちの姿は、大企業のなかにはないものだった。

八年四カ月のたたかいを経て、影山は思っていた。自分は、いろいろな人たちと出会った。自分を支え、励ましてくれた人ばかりだった。その人たちをつないでいくことで、相手に脅威を与え、たたかいに勝つことができた。

企業内の競争社会にかかわりなく、連帯の場所があった。労働者たちはどこでも、痛みを分かちあい、仕事や生活をとおして連帯の輪をつくっていた。

土建組合に集まる大工たちは、土地高騰の問題や、大手建設会社の支配への対応を議論した。そしてまた同じ場で、自分たちの暮らしや、平和について語り合っていた。彼らにとっては、それがあたりまえの人間関係だった。仕事だけでなく、暮らしだけでなく、すべてをひっくり返して、自分の足で自分の人生を歩いている労働者たちがそこにいた。

新しい人の輪のなかで、影山は八年四カ月のたたかいの成果を踏まえた、自分の人生を歩みだそうとしていた。

争議をしているとき、真喜志晃は電機の職場をまわった。全国を歩き、何人もの同じ職種に働く労働者たちとふれあった。そしてのちに、電機総行動の事務局を担当した。真喜志はいま、日立中央研究所の差別撤回闘争の守る会運動、日立武蔵工場で解雇された田中秀幸の解雇撤回闘争をたたかっている。争議が被害者を救済する運動から、それをささえ、一緒にたたかう仲間自身の要求実現のたたかいに変化し、発展してきていることを実感している。

八七年一月、全民労連が結成され、電機労連がその議長組合になった。きびしい情勢のときも、彼は電機の職場を歩きつづけてきた。電機の職場に働く労働者たちの声をとりあげて、要求をつないでいくことに精力を注いできた。

支援を訴えて歩いているうちに、真喜志は思い始めていた。

「オレらだけの問題じゃないんだ。自分たちのたたかいは、すべての電機の職場、日本中の職場に働く労働者たちの願いをになっているんだ」

その思いは、ほとんどすべての争議団員の思いでもあった。

「八年四カ月、感動のしっぱなしだった」

争議が解決したとき、松本はそういった。

沖電機という企業のなかだけしか知らなかった労働者たちが、なぜ八年四カ月のたたかいに勝つことができたのだろうか。それは彼らがたたかいを、自分たちを助けるためだけのものにしなかったからではないか。

労働者のたたかいは、いつも人と人をつなぐ力をもっている。沖電機争議団の七一人は、企業のへいを越えて、企業のなかに埋没して生きている労働者たちに連帯の輪をひろげていった。その人の輪の力が、彼らを勝利に導いた。

たたかいは、ほんとうはまだ終わっていない。企業のなかには、まだまだ変革していかなければならないことがたくさんある。つないでいかなければならない人間が、何人も彼らを待ってい

る。人間を歪める矛盾は、企業の外にもあふれている。

七一人は、新しい人生を歩き始めた。八年四カ月の感動を胸に、それぞれの仕事と生活の場に散っていった。

そしてまた連帯の輪をひろげて、明日から生きていくだろう。いつまでも、胸を張っていいつづけられるように。

たたかって、よかったと。

▽沖電気争議の経過

■'78年

11月20日 指名解雇日

11月21日 就労闘争を開始

12月11日 東京地裁、同八王子支部、前橋地裁（群馬）、浦和地裁熊谷支部（埼玉）の四カ所に提訴。

12月19日 察追い出し拒否闘争開始、以後解決まで居住する。

■'79年

1月20日 NHK「ルポルタージュにっぽん」で30分間放映

5月 全国オールド開始

9月22日 被解雇者71名で沖電気争議団を結成。東京地方争議団共闘会議に加盟。

11月21日 一周年集会（日本教育会館、千六百人）

11月22日 富士銀行へ初の要請。

12月19日 江戸川区労協など七地区労で沖支援東部共闘会議を結成。

12月29日 高島平団地で行商活動。

■'80年

4月 沖支援港区労働組合連絡会議結成。板橋連絡会議結成。

4月22日 第一次電機総行動、以後毎年実施。

5月1日 メーデーの中央会場で宣伝、毎年実施。

5月16日 埼玉集会。

5月29日 決起集会（日比谷野外音楽堂、五千人）

11月 二周年闘争。各工場連鎖抗議集会、地域連帯集会、中央集会など開催のべ五千人参加。

■'81年

3月24日 東京北部五地区労主催の支援集会（千五百人）

4月8日 初の富士銀行支店抗議・亀戸支店。

6月29日 八王子工場で転勤に応じなかった田中さん解雇。

株主総会に、中山代表が初めて出席し発言。

9月24日 東京工場の浅利・中山さんへの仕事差別事件で都労委へ申し立て。

10月23日 三周年中央集会（日比谷野外音楽会、七千人）。

10月27日 高崎集会（千人）。

11月17～21日 本社前抗議の座り込み。

■'82年

4月12日 社長宅への要請行動。

3月～6月 富士銀各支店へ要請行動。

11月11日 八王子集会

11月30日 中央共闘会議結成（八千人・東京都体育館）

■'83年

4月27日 東京工場包囲デモ（千六百人）。

9月30日 富士銀行本店へ要請行動（三千五百人）。

2月22日 千代田区支援共闘会議結成。

11月10日 埼玉支援共闘会議結成（一三五〇人）

11月29日 沖電気争議支援半日行動。

■'84年

1月3日 初めて重役宅へ年始あいさつをかねた要請。

1月19日 記録的な大雪の中、昼休み本社抗議行動。

2月1〜22日 21団体が連続の本社抗議。

2月8日 中央共闘会議の倉持議長死去。

3月18日 争議団と中央共闘会議で「コンピュータ・情報化社会を考える」のシンポジウム開催。

5月21日 東京地裁で和解交渉開始。

8月3日 原告の伊藤善正さん急逝（64歳・心筋こう塞）

11月30日 沖電気総行動（四千人）。

12月17日 浅利・中山仕事差別事件解決、この日から元の仕事に。

■'85年

2月5日 全国からの個人署名40万人分沖電気へ提出。

1月19日 東京争議団議長に中山森夫さんが就任。

6月18日 第10回和解交渉。沖電気「解決金一人一千万円復職なし」の和解案を提示。

9月22日 沖電気城下町の本庄市で、支援のふれあいまつり（八千五百人）

11月21日 沖電気総行動。

11月15日 品川共闘会議結成集会。

12月12日 第13回和解交渉。裁判所「35名を現実に復職させる」という和解の基本案を示す。

■'86年

2月〜4月 勝利めざし連続行動。各工場、東京の東西南北、中央集会のべ一万五百人が参加。

8月26日 第18回和解交渉、沖電気、35名復職の受け入れを表明。

11月21日 沖電気争議支援中央集会。

■'87年

2月27日 裁判所和解案を提示。

3月13日 沖電気争議解決。

あとがき

「円高」「産業構造調整」、さらには「空洞化」の名のもとに、資本の身勝手な人減らし攻撃の嵐が吹き荒れています。こうした時代に、沖電気に指名解雇の撤回を求めた、このたたかいとその勝利は、画期的なものとなったと思います。七一人が「首切りは許さない」とたたかいに立ち上がり、企業のワクを越えて、ひろく全国に支援を求めて走りつづけました。

働くものの大きな連帯の輪が、身勝手な大企業を社会的に包囲しました。沖電気に指名解雇を撤回させたとき、私たちは、蟻の大群が巨象を打ち倒したのだと感動しました。

その蟻の大群とは、たんに争議団や支援を寄せてくれた人びとばかりではなく、沖電気の職場、電機産業の労働者、そして現代の企業社会に生きるすべての人たちの願いの結集ではないでしょうか。その意味で、沖電気争議の勝利とは、あるとき希望退職に応じて去っていった一〇〇〇人以上の労働者たちとも、職場に残って生きてきた一人をこえる社員たちとも、ともに分かちあうべき勝利だったと思えるのです。

今日、「大きいことは、いいことだ」と全民労連が発足しました。首を切られた労働者を守れ

ない、守ろうとしない団体が労働組合といえるのかどうか。沖電気争議団のたたかいは、この連合にたいするもっとも強烈な批判としても、ほんものの労働組合運動のあるべき姿を具体的に示したという点でも、大きな役割を果たしたと思います（運動的視点からまとめたものは、『労働法律旬報』一九八七年一月下旬号の東京労働争議研究会報告「沖電気争議の課題と到達点」がありますので参照して下さい）。

このたたかいとその渦中にいた人間像をルポライターの矢吹紀人氏が描いてくれました。「仕事型人間に未来はあるのか」という視点は、新鮮で鋭い切れ味をもっていると思います。指名解雇が強行された職場で働きつづけた者と、その企業を「敵」としてたたかいつづけた者とがどこで重なり合うのか。沖電気争議は一人のルポライターの目を通して描かれることで、企業社会に生きる者への問いかけ、明日への呼びかけになったと思います。

争議は年末にかけて発生することが多いといわれます。労働者がたたかいに立ち上がり難いき攻撃をかけてくるところに資本の非情さを見ることができません。失業して、必死に職を捜すのではなく、会社を相手に裁判された、などということは、世間の常識を越えた選択なのでしょう。年の暮れから正月に向かう人間の営みのなかではいっそう際立つというものです。しかし、八年余、その日常性を越えた「たたかいの生活」を終えて、沖電気職場にもどった仲間が、異口同音に、職場の方が異常だといっています。

あるべき社会の発見と創造に向かって蟻たちの歩みが、また始まりました。巨象を倒した確信と、そのとき実感できた人間の温もりを糧として。

尚、本文中のかこみの「私のひとこと」は『はたらく』（沖電気争議を守る会の機関紙）から抜粋したものです。

一九八七年一二月

中山 森 夫

中山森夫 (なかやま もりお)

1941年生まれ
名古屋大学経済学部卒
沖電気工業株式会社
1978年指名解雇される
沖電気争議団代表

矢吹紀人 (やぶき としひと)

1953年生まれ
慶応大学経済学部卒
ルポライター
『湘南学園物語』など

企業社会の扉をひらけ

1987年12月15日 初版第1刷

著者◎ 中山森夫／矢吹紀人
発行者 柳 沢 明 朗
発行所 株式会社 労働旬報社

東京都文京区目白台2-14-13
電話 03-943-9911 (代)
振替東京 0-180374

印刷所 三 和 印 刷

定価はカバーに表示してあります

●好評発売中!

暮らしのルネッサンス

—生活をつくり変える女たち
今崎暁巳著

主婦たちにとって毎日が戦争のよう！一緒に泣き笑いながら生活に明るい見通しを生協活動のなかでひらいてゆく女性たちをえがく。

B 6並装
240頁
1200円

暮らしと女と街づくり

—協同のネットワーク
今崎暁巳・二宮厚美編著

母親たちの「子育て」「手づくり文化」運動からはじまった、人をむすび、心をつなぎあい、ふれあいと共感を生む街づくりをルポ。

B 6並装
248頁
980円

スチュワーズ志願

家田愛子著

少女のあこがれから、ママさんスチュワーズ第一号誕生までの涙と笑いと苦闘の体験記。世界の空を翔けめぐる夢とロマンの物語。

B 6並装
264頁
1200円

湘南学園物語

—心をひらく子どもたち
矢吹紀人著

現代の「子捨て」に挑み、家庭の愛と信頼をよみがえらせた感動の実践。子どもたちはどのように心をひらき、絆を結んでいったのか。

B 6並装
248頁
1200円

いのち永遠に新し

住井すゑ・柳田ふき・石井あや子・矢島せい子著

戦前・戦中・戦後と歴史のうねりのなかを、いのちと平和と平等を追いもとめてきた魅力の「日本のおんな」たちの人間賛歌。

B 6並装
216頁
980円

